

平成17年度

学校経営サポート事業 報告書

平成18年3月

三重県教育委員会事務局研修分野

目 次

I	研究協力校・アドバイザー・協力者一覧	1
II	事業経過概要	2
III	各研究協力校における実践	
①	県立桑名北高等学校	5
②	県立四日市西高等学校	17
③	県立名張桔梗丘高等学校	26
④	県立西日野養護学校	33
⑤	伊賀市立柘植中学校	40
⑥	松阪市立東部中学校	44
⑦	鳥羽市立鳥羽東中学校	50
⑧	鳥羽市立答志中学校	54
⑨	亀山市立野登小学校	59
⑩	伊勢市立早修小学校	65
⑪	伊賀市立花垣小学校	71
⑫	名張市立つつじが丘小学校	82

I 研究協力校・アドバイザー・協力者一覧

【研究協力校】

県立桑名北高等学校
県立四日市西高等学校
県立名張桔梗丘高等学校
県立西日野養護学校
伊賀市立柘植中学校
松阪市立東部中学校
鳥羽市立鳥羽東中学校
鳥羽市立答志中学校
亀山市立野登小学校
伊勢市立早修小学校
伊賀市立花垣小学校
名張市立つつじが丘小学校

【アドバイザー】

国立教育政策研究所	教育政策・評価研究部長	小松郁夫
国立教育政策研究所	総括研究官	木岡一明
大阪教育大学教育	名誉教授	中野陸夫
三重大学	教授（教育実践総合センター長）	佐藤廣和
名城大学	教授	池田輝政
中京大学	教授	杉江修治
株式会社組織開発総合研究所	代表取締役社長（日本経営品質賞主任審査員）	谷口 洋
筑波大学大学院	助教授	藤田晃之
名古屋大学大学院	助教授	南部初世
山梨英和大学	助教授	福本みちよ
国立教育政策研究所	主任研究官	松尾知明
国立教育政策研究所	研究員	山森光陽
佐賀大学高等教育開発情報センター	講師	梶間みどり
京都府立日向が丘養護学校	教諭	澤 月子

【研究協力者】

名古屋大学大学院生	田中秀佳
名古屋大学大学院生	小出禎子

Ⅱ 事業経過概要

桑名 北高 等学 校	アドバイザー	国立教育政策研究所総括研究官 名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授				木岡一明 南部初世	
	研究協力者	名古屋大学大学院生 名古屋大学大学院生				小出禎子 田中秀佳	
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	
	訪問日時	7月5日(火)	10月19日(水)	12月26日(月)	1月26日(木)	3月7日(火)	
	概要	研究協議 ・コース制導入について ・コミュニケーション授業について	研究協議 ・中学校へのアンケート分析 ・コミュニケーション授業 ・地域協議会報告 ・コース制導入について	研究協議 ・コース制の具体案検討	研究協議 ・各コースの教育課程(カリキュラム)について	報告 ・卒業生の進路 ・一般入試の状況 ・地域協議会の内容 研究協議 ・コース制導入の上申	
	四日市 西高 等学 校	アドバイザー	筑波大学大学院助教授				藤田晃之
訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回			
訪問日時	7月20日(水)	9月21日(水)	12月15日(木)	1月27日(金)			
概要	課題の確認 研究協議 ・目指す学校像	研究協議 ・キャリア教育推進について	講演の打合せ 講義(1学年を対象) ・進路について 協議 ・進路指導計画の見直し	研究協議 ・1・2年生の進路指導年間計画の見直し			
名張 桔梗 丘高 等学 校	アドバイザー	国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長 佐賀大学高等教育開発センター 講師				小松郁夫 梶間みどり	
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回 第6回	
	訪問日時	7月15日 (金)	9月28日 (水)	10月17日 (月)	11月11日 (金)	1月17日 (火) 3月2日 (木)	
	概要	事業の説明 課題の確認 研究協議 ・同校の「強み」「弱み」について	学校経営品質アセスメントへの参加 研究協議 ・課題の明確化	研究協議 ・職員アンケートの結果について	授業参観 研究協議 ・授業等について ・課題の再確認	研究協議 ・最重要課題の特定について ・最優先課題の解決のために ・来年度に向けて	
	西日 野養 護学 校	アドバイザー	京都府立日向が丘養護学校 教諭				澤 月子
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回		
訪問日時	6月22日(水)	9月14日(水)	11月8日(火)	1月12日(木)			
概要	学習活動の参観(ケース対象生徒) ・各場面でアドバイスを受ける 研究協議 ・自閉症支援について	学習活動の参観(ケース対象生徒) 研究協議 ・自閉症支援について	研究協議 ・コミュニケーション支援など 実習「PECS」	学習活動の参観(ケース対象生徒) 研究協議 ・「K式発達検査」について			

伊賀市立 柘植中 学校	アドバイザー	大阪教育大学名誉教授			中野陸夫
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	
	訪問日時	10月12日(水)	2月8日(水)	2月15日(水)	
	概要	研究授業参観 研究協議 ・研究授業について ・学習意欲、学力の低い生徒にどうせまるか	研究授業参観 研究協議 ・研究授業について ・評価項目について	研究授業参観 研究協議 ・研究授業について ・学校評価の結果をどう来年度に活かすか	
松阪市立 東部中 学校	アドバイザー	三重大学 教授			佐藤廣和
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回
	訪問日時	6月10日(金)	6月28日(火)	8月11日(木)	10月26日(水)
	概要	研究の概要説明 授業参観 協議 ・今後の取組について	打合せ 授業参観 協議 ・研究授業について	講演 「仲間を求め合う学習」 ・学習をめぐる現在の議論の問題 ・学習の「個人化」「協働化」 質疑応答	研究授業 事後研修会 ・授業の雰囲気 ・教材解釈 ・グループ学習について 等
鳥羽市立 鳥羽東 中学校	アドバイザー	株式会社組織開発総合研究所 代表取締役社長			谷口 洋
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回
	訪問日時	8月1日(月)	8月3日(水)	11月16日(水)	2月8日(水)
	概要	研究協議 ・課題の明確化 ・今後の研修の進め方について	ワークショップ 「勤務時間の縮減」について	授業参観 研究協議 ・本校職員が年度初めに設定した「個人目標」の個人評価について	研究協議 ・内部(保護者)評価結果(10項目のアンケート結果)の分析と成果と課題
鳥羽市立 答志中 学校	アドバイザー	国立教育政策研究所教育政策・評価研究部長 佐賀大学高等教育開発センター講師			小松郁夫 梶間みどり
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回
	訪問日時	8月18日(木)	8月19日(金)	2月6日(月)	2月7日(火)
	概要	研究協議 ・学校の概要と地域連携について ・地域との協働の取組を目指す方策	フィールドワーク ・校区内見学 学校見学 研究協議 ・地域連携の目指すもの	フィールドワーク ・学校と町民のかかわりと連携のしかた	フィールドワーク ・保・小・中の連携について 研究協議 ・保・小・中の連携について ・地域と教職員の関わり

亀山市立野登小学校	アドバイザー	名城大学 教授			池田輝政	
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	
	訪問日時	8月30日(火)	11月7日(月)	11月22日(火)	2月6日(月)	
	概要	学校の概要説明 研究協議 ・地域との連携 ・学校経営品質	授業参観 研究協議 ・学習評価 ・人権集会の取組	研究協議 ・学校評価について ・研究授業指導案検討	研究協議 ・特色ある学校づくりについて ・学校組織のあり方 ・学校評価	
伊勢市立早修小学校	アドバイザー	山梨英和大学 助教授			福本みちよ	
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	
	訪問日時	8月5日(金)	10月18日(火)	12月14日(水)	2月15日(水)	
	概要	学校の概要説明 S W O T分析による組織診断 ・人材、施設・設備、校区の環境は整っている 研究協議 ・英語活動 ・地域との連携	研究協議 ・英語教育の進め方 事例紹介 ・英語教育の実例	授業参観 研究協議 ・授業反省 ・今後の取組 事例紹介 ・特区の学校での事例	研究協議 ・今年度の反省 ・今後の英語活動に向けて	
伊賀市立花垣小学校	アドバイザー	国立教育政策研究所 主任研究官 国立教育政策研究所 研究員			松尾知明 山森光陽	
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
	訪問日時	6月29日(水)	7月13日(水)	8月10日(水)	11月4日(金)	2月8日(水)
	概要	概要説明 集会の参観 研究協議 ・カリキュラム編成について ・コミュニケーション能力について	授業参観 研究協議 ・児童の様子 ・コミュニケーション能力を高める具体的な手立て	研究協議 ・「聞く」「話す」に関わる目標 ・「理解の能力」「表現の能力」の到達目標 ・チェックリスト	授業参観 ・これまでの参観時の様子との比較 研究協議 ・授業研究 ・「ふり返りシート」の活用	集会の参観 研究協議 ・今年度の成果と課題 ・来年度に向けて
名張市立つつじが丘小学校	アドバイザー	中京大学 教授			杉江修治	
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
	訪問日時	8月24日(水)	10月13日(木)	12月1日(木)	1月26日(木)	3月2日(木)
	概要	概要説明 講演 「学びの授業づくり」 質疑応答	授業参観 研究協議 ・研究授業について ・グループ学習の進め方 等	授業参観 研究協議 ・研究授業について ・学習の手順の提示について ・班学習について	授業参観 研究協議 ・研究授業について ・授業の改善について ・授業における児童の活動について	授業参観 研究協議 ・研究授業について ・教師集団による授業改善のあり方 -今後の課題-

① 県立桑名北高等学校

所在地	桑名市下深谷部字山王2527
交通機関等	近鉄 養老線下深谷下車徒歩10分
電話番号	0594(29)3610
FAX番号	0594(29)3620
教職員数	55名
生徒数	575名

1 学校の概要

昭和55年4月に開校、各学年10クラス規模の学校である。

名古屋地区のベッタウンとして開発された団地を周辺に抱えている。

開校以来27年が経過したが、途中、桑員学区協定（準小学区制）の廃止・いなべ総合学園の新設等があり、本校受検希望者が減少し、それに伴い募集定数も減少した。少子化現象もあるが、桑員地区においてはそれほどの減少はなく、むしろ中学生にとって本校の魅力がなくなっているといえる。

平成16年度より、学校経営アドバイザー事業・学校経営サポート事業のご支援をいただきながら、本校の新たな進むべき道を模索してきた。

2 学校、地域、生徒の現状

周囲の大型団地開発にともない開校された本校も、27年の月日が経った。各学年10クラス規模の学校ではあるが、ここ数年は7クラス募集でも定員割れを起こす状態であり、特に、平成16年度入試では、推薦一般（1次）では、定員の0.6倍にも満たない状態にあった。

定員割れに伴い生徒の質も変わり、授業にまじめに取り組むことのできない生徒が増加した。また授業中に校門にバイク少年が押しかけるなど、地域での評判も悪化した。平成15年度は、緊急課題で「2学期以降の生徒への対応」を話し合った。また、平成16年度は「授業規律の取り組み」を行い、学校の正常化の面では、ある程度の成果は得られた。

平成17年度入試では、6クラス募集にしたが定員割れを起こし、平成18年度入試において5クラス募集としてやっと定員ぎりぎりとなった。これは、「授業規律の取り組み」がある程度の成果を得た結果であり、校内もやや落ち着きを戻してきた。

3 アドバイスを希望する課題

平成16年度は、学校経営アドバイザー事業のご支援をいただき、本校の現状の把握や今後の学校改革について学校改革委員会および企画委員会のメンバーを中心に検討してきた。

今年度（平成17年度）も引き続き学校経営サポート事業のご協力を得て、昨年の結果を基に実現に向け行動に移していきたいと考えている。

昨年度、教育課程（特にKey-Stage 多様な選択科目）の早急な見直しの必要性を指摘され、それを受けて、教育課程の見直しと、同時にコース制の導入についても視野に入れ検討実現させていきたいと考えている。

地域で必要とされる学校へ、教員の働き甲斐のある学校へと変わっていきけるようご指導いただければと思う。

形式としては、今年度は学校改革推進委員及び企画委員会から構成される研修会の講師という立場で、実際に問題になっている事柄に対して、いろいろな効果的手法をご教授いただきたい。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時 平成17年7月5日(火) 14:00 ~ 16:30

イ 場所 三重県立桑名北高等学校 校長室

ウ 参加者 木岡 一明 [国立教育政策研究所総括研究官]

南部 初世 [名古屋大学大学院助教授]

田中 秀佳 [名古屋大学大学院生]

桑名北高等学校教職員

エ 内容

① 活動内容

校長、教頭、8名の企画委員の教員とアドバイザーにより、「本校の将来像を探る」という議題のもと(1)今までの流れと来年度入試について、(2)コース制導入について、(3)「コミュニケーション授業」の導入について、などのテーマで話し合いが行なわれた。

② 協議内容

I これまでの取り組みの流れと改革案について

昨年度から、学校改革委員などのプロジェクトチームを中心に学校改革の方向性が考えられ、現状の問題点を明らかにした上で学校に必要な改革の方向性を明確化する作業が行なわれてきた。今年度はその流れを踏まえて、具体的な改革案が検討されるに至った。その改革案として、来年度入試において募集定数を1クラス減らす(6→5クラス)こと、コース制の導入、「コミュニケーション授業」を取り入れることなどについて検討されている。

II コース制導入について

コース制の導入案は、昨年度からの学校内での議論を踏まえた改革の具体策として、また他の高校との関係で考えられる桑名北高校の今後のあり方を考慮した結果として校長から発案されたものである。これまで、進路志望が多様であり、授業に集中できない等の学習が困難な生徒も存在する中で、総合選択制やキャリア教育の充実などによって多様な要求に応えつつ、学習意欲を高め、進路を決定させる努力がなされてきたが、学校としてより効果的に教育を行なうために入学の段階で生徒の関心や進路志望を特化しようとするものである。具体的なコース案として、①国公立大学への進学を志望する生徒に対するコース、②スポーツや文化活動などの特技を伸ばすコース、③ビジネス、情報などに重点を置き商業系に就職を志望する生徒に対するコース、④学習が困難な生徒を主な対象にした総合選択コース、などが検討されている。①に関しては既に進学に重点を置いた学校が公私ともに多くあり、また②についても他校との関係から、生徒を惹きつけられる特色をいかに出すかが課題である。③については、地域からのニーズはあると考えられるが、行政との関係で検討する必要がある。④については、現在行なっていることがベースとして考えられている。

一方、コース制導入については教職員の合意が十分に得られておらず、学校として改革案をどのように具体化していくかが課題として挙げられる。また、協議の中で、生徒や保護者の中に介護・福祉関係への就職に対するニーズがあることが挙げられ、コース制の中で取り組むことができないか検討された。

III コミュニケーション授業について

「コミュニケーション授業」とは、生徒が幼児や老人との関わり持つ中で、「自分は必要とされている」という「役立ち感」を感じ、それにより日常においても友人や教師などとのコミュニケーション力を身につける、という高塚人志氏の実践である。「役立ち感」を得ることは、これまでもインターンシップを行なう中で目指されてきたものであるが、さらに「コミュニケーション授業」を「みらい」で取り入れる方向で検討されている。

③ アドバイザーから

(ア) コース制に関して

コース制による教育内容の重点化は有効な方策であると考えられるが、それぞれのコースにバランスよく集まるかは疑問である。高校進学に関して、どのような需要があるのか、中学校の進路担当の教員や中学生を持つ親、進学塾などに、まずマーケットリサーチを行なった後にどのようなコースを設定するかを考えるべきである。そして、そのコース制のメリットを地元の自治体や、経済界などにPRしていくことも必要となってくる。地域のニーズに応えつつ、様々なコースのスタッフや資金について、講師などの人的資源や資金、奨学金の提供を募っていくという活動などが考えられる。

協議の中で、福祉分野に対するニーズの存在について意見が出されたが、福祉系や情報系・商業系などの科目を、コースとして設定するのではなく総合選択科目の中に系の一つとして置くことも可能ではないだろうか。しかし、その際斬新で魅力的な科目名を設定して、他校との差異化を図り、外部に積極的にアピールする必要がある。

改革の方向性については、まず特色化、コース制ありきではなく、目の前の子どもにどのような力をつけさせたいのかという視点から具体的な方策が出されることが重要である。入試・入学の段階で目的意識の持った生徒を集めることの有効性がある一方で、中学校の教員から現在の取り組みに対するニーズが多くあることも踏まえる必要がある。

(イ) 「コミュニケーション授業」の導入について

コミュニケーション能力を向上させる取り組みは大切だが、それをどれくらいの教師が教えられるのかという点が留意されなければいけない。「コミュニケーション授業」については、メンタリング、ケアリングの話とコミュニケーション能力に必要な論理的思考に関する議論が混在しており、単純に幼児や老人との関係によって友人や大人との関係が展開していくとは限らない。原点に戻って、桑北の生徒に何を身につけさせることが必要で、それをどのようなアプローチで進めるのか、授業にしたときにどんな中身になるのかを確認することが必要である。看護学校での授業や、ピア・サポートの取り組みなど、コミュニケーションを扱った授業や実践は他にも多く行なわれており、必ずしも「コミュニケーション授業」を先行事例として特化することはない。

また、これまで行なってきたインターンシップでどのくらいの成果がでているか、検証することも必要であろう。

(ウ) 今後の学校改革の進め方に関して

コース制の議論に関して、どのように教職員集団で一致した方向性を見出すかが大きな課題である。改革を進める上での手続きについて、限られた時間と他校や行政など学校外部との関係の中で、早急に進めていかざるを得ない現状を、不満のある教職員間で共通理解を図る必要がある。そのためには、改革案の持つメリット、デメリットを一覧化することが求められる。そして、教職員が主体的に取り組める体制を整え、さらには地域人材、資源の活用のために、地域の人々と日常的に関係を築いていくことも求められる。

(2) 第2回

ア 日 時 平成17年10月19日(水) 14:00 ~ 16:30
イ 場 所 三重県立桑名北高等学校 校長室
ウ 参加者 木岡 一明 [国立教育政策研究所総括研究官]
南部 初世 [名古屋大学大学院助教授]
田中 秀佳 [名古屋大学大学院生]
桑名北高等学校教職員

エ 内 容

① 活動内容

教頭、学校改革委員・企画委員の教員、そしてアドバイザーにより、「本校の今後の取り組みを考える」という議題のもと、桑名郡市の中学校へのアンケート分析結果や、地域協議会での議論が報告され、「コミュニケーション授業」、「コース制導入」などについて話し合いが行なわれた。

② 協議内容

(ア) 桑名郡市の中学校へのアンケート分析について

学校は、桑名郡市 10 市町村の中学校の教員、保護者、生徒に対して 9 月にアンケートを行なった。設問は、高校選択の判断基準、桑名北高に対する印象、コース制の導入をした場合に特色として望むもの等であった。アンケートでは、特色ある学習内容に対する希望として「情報」、「国際コミュニケーション」、「スポーツ・健康」、「ビジネス」、「福祉・介護」、「大学進学」などの分野が高いことや、生徒、保護者、教員の 3 者間で回答での意見の一致、相違などの傾向が明らかになった。

アンケート結果と併せて、アンケート調査以降に開催された桑名市の P T A 連合会による高校の合同説明会において、コース制に関心を寄せる保護者がいたことや、例年減少傾向にあった学校説明会への参加希望者が今年度は増加したことが、教員から報告された。

(イ) 「コミュニケーション授業」について

生徒のコミュニケーション能力の向上、地域との連携の推進という目的のために、取り入れることが検討されている「コミュニケーション授業」について、夏季休暇中に講師を招き研修を行なった。今後、Key Stage の「人間」の中で導入する方向で、桑名市との連携を視野に入れつつ授業内容の具体化をはかっていく予定である。アドバイザーからは、この間進めている長期的な学校改革とは別のプロジェクトとして進めること、その際、生徒の履修人数の想定、期間、市や受け入れ先との打ち合わせ、費用などの具体的な問題を詰めていく必要があることが指摘された。

(ウ) 「コース制導入」について

学校改革の具体的な取り組みとしてコース制の導入が検討されているが、主にアンケート結果、地域協議会を踏まえての意見、導入に慎重な教員の意見が中心に出され、その導入の是非について議論が行われた。

まず、上述のアンケートや地域協議会など学校外部のコース制に対する意見に関する議論を挙げる。

- ・社会状況を反映してパソコン、介護、英語などの資格に対する関心が高い傾向が出ている。また現在「ベースアップ」として基礎的な補習をやっているが、生徒・保護者から評価を得ていて、ニーズの高さを感じる。
- ・アンケートでは、「福祉・介護」は生徒への人気が高い一方で中学教員、保護者に関心が高く、地域協議会でもニーズがあると指摘された。
- ・地元の中学校長は目的を持った子を進学させて、将来的に資格を取らせられるようなコース制に賛成している。
- ・地域協議会で、商工会を活用することが提言された。

また、コース制の導入については慎重な考えを持つ教員も少なくなく、以下のような意見が交わされた。

- ・想定する 4 コースでは多すぎる。
- ・学校に対するイメージが、コース制によるカリキュラムの改革で変わるのか疑問である。
- ・生徒の進路を考えると、想定している教育内容をコース制にしなくても、専門学校への進学や就職は十分可能である。

③ アドバイザーから

(ア) アンケートについて

前回、地域のニーズを収集するためにマーケットリサーチを行なうことが作業課題の一つとして挙げられ、それを受けて、中学校を対象にアンケートが行なわれた。そこでは、ある程度の桑北に対するニーズの集約や学校改革のアピールができたと思われるが、質問項目によっては従来から桑北のデメリットとされている部分を回答者に再認識させるものがあった。アンケートの実施によって、どういうニーズを求め、どういうアピールをしようとしているのか、その狙いを外部に対して十分に伝えられたのか課題が残る。アンケートはその結果から、学校がやろうとする改革を根拠づけ、正当化するための手段でもある。学校がどんな改革像を描いているのか、曖昧な部分が残っていると、その意味が失われてしまうこともある。

(イ) コース制について

アンケート結果からは教員が指摘したように実用性に対するニーズが読み取れ、学校で取れる資格を明確にするなどすれば、そのコースの存在意義を示していくことが有効であろう。いずれのコースであっても、入学時には中学校、卒業時には就職先・進学先など外部と連携をして、どのように生徒を集めるか、どこへ出て行くのかなどをシステム化して、地域の人々・機関とのつながりを具体的に考える必要がある。

コース制の議論と併せて、制服の変更も考えられているが、学校のイメージを一新する手段としては有効である。しかし、現段階では制服に関する検討は、まず柱となる改革の中身を作ってからが良いのではないだろうか。制服には、スクールアイデンティティの形成と生徒の管理という2つの機能があるが、改革像が具体化された後で、その機能を改革後の学校にどう位置づけるかの議論が必要になってくるであろう。

コース制については、制度の問題であるために学校の決定だけではなく行政の判断も関係してくる。コース制が採用できなかった場合、それで改革の方向性が変わらないような、柔軟な改革案（類系によるクラス分けなど）を考えておくことと、外部へのアピールの弱化への対応なども考えられるべきであろう。

(ウ) カリキュラムの検討について

具体的なカリキュラムは、制度面の改革の方向性が決まった後に詰めていくことになるが、日常的に小さい目標を少しずつ重ねていき、その達成感から自信を持って徐々に高い目標を目指し、卒業に向けて「資格を取る」というような構成が求められるのではないかと。

(エ) 今後の学校改革の進め方について

学校改革を進めていく上で、地域の人から何を期待され、どう応えるのか、そしてどうアピールしていくのが重要であるが、(ア)でも指摘したように、今回のアンケートにおいてそれが十分に達成できたとはいえない。明確な意図を持ったリサーチができなかったことの原因として、教職員間で学校改革の全体像が共有化されておらず、各教員がそれぞれに様々な方向性を持って活動していることが根底にある。制度面の改革に慎重な教員は、日常の生徒の問題に重点を置いており、その指摘は非常に重要なものである。しかし、制度（ハード）の問題は管理職、生徒指導や授業（ソフト）の問題は一般教員というように課題に対して分離した形で取り組んでいては、学校としての問題解決にはつながっていかない。

改革のタイムテーブルとしては、制度面に関しては既に決定段階にきている。まず、改革の大枠である制度構想を教職員の全体的な議論によって共有化し、その後授業内容や授業方法などについて深めていく、というように順序だてて議論を進めていかなければいけない。

(3) 第3回

ア 日 時 平成17年12月26日(月) 14:00 ~ 16:30
イ 場 所 三重県立桑名北高等学校 校長室
ウ 参加者 木岡 一明 [国立教育政策研究所総括研究官]
南部 初世 [名古屋大学大学院助教授]
小出 禎子 [名古屋大学大学院生]
桑名北高等学校教職員

エ 内 容

① 活動内容

校長、教頭、学校改革委員・企画委員の教員、そしてアドバイザーにより、19年度からの「コース制導入」の具体的な案と課題について話し合いが行なわれた。

② 協議内容

「コース制導入」について

学校改革の具体的な取り組みとして19年度からコース制を導入することが検討されており、プロジェクトチームから提案された4つの案を中心にコース制が成り立つかどうかについて、アンケート結果や地域、保護者、生徒の現状から考え、入学時に生徒が集められるか、卒業時に就職・進学先が保障できるか、設備や教育課程も含め検討された。具体的な4つのコース案について以下のような意見が出された。

(ア) 特進コース

大学進学を目指すコースで、私立大学志望の生徒も含めセンター試験を受験できるレベルまで学習し、国公立大学合格者を最初の目標とする。

(イ) 情報ビジネス系コースについて

このコースは、人間関係能力、情報環境能力、情報操作、意思決定能力のようなキャリア教育的なものを中心として、ワープロ、表計算、漢字検定、英検など資格取得に力を入れ、IT系のカリキュラムも取り入れるものとする。資格取得に関しては、現状のカリキュラムではより上級の資格を目指すことが難しいため、コース制にすることによって類型よりメリットがあることが確認された。また、資格取得により専門学校や大学の推薦入試を受験する生徒が増えていることから、就職ではなく資格取得で大学や専門学校に進学することを中心とした目標の方がいいのではないかという意見も出された。設備としては活用できる2つの教室があることは、本校の「強み」である。

(ウ) スポーツ文化系コースについて

スポーツや文化系の部活動を中心にしたカリキュラムで大学進学を目指すコース案であったが、部活動で進学することは非常に難しいこと、部活動を続けられる生徒が少ないこと、進学を目指すのであれば特進コースと競合することなどから、コースを立ち上げることは難しいとされた。

(エ) 普通コースについて

特進コース、情報ビジネスコース以外については、学習が困難な生徒を対象に現在行っていることをベースにした普通コース(総合選択コース)が考えられるが、入学段階で生徒の目的意識がはっきりできることや学級運営上のやりやすさから、特色を打ち出し目的を持ったコースを設定する方向性が模索された。アンケートの結果や現状の進路状況から保育や福祉系への進学も視野に入れ、つながりを大切にするという意味でのコミュニケーション能力の育成を連動するコース、例えば保育コミュニケーションコースが成立するという意見が出された。コース名はこれから検討が必要である。

以上がコース案の検討であるが、それぞれのクラス編成については、特進コースを1クラス、情報ビジネスコース2クラス、保育コミュニケーションコース2クラスとし、全てのコースにお

いて生徒に目的意識を持たせる案が現実的であるということとなった。しかし、情報ビジネスコースは専門学校や就職への門戸は広いが、入学段階で2クラス集められるかどうか疑問も出された。

その他コース制導入の課題として、生徒がコース途中で変更を希望した場合の対応をどうするか、そのような場合をなるべく少なくするために、受験の段階で中学校にどのように説明をするのか、入学時に保護者や生徒に確認をどのようにとるかなどが出された。

今後の検討委員会の作業としては、コース制と類型のメリットとデメリットを比較検討し、教育課程や教育方法、さらには生徒を集める方法について具体的に提案することとなった。

③ アドバイザーから

コース制導入は学校改革の最良の手段ではなく、コース制がその後を保障するものと確信されれば生徒は集まる。コース制導入が学校改善に効果を発揮するにはベースが必要である。桑北高はこの3年間を見るとよくなってきておりベースはできつつあるが、現在のやり方では次の段階に到達しない。そこで、今後の取組として教育課程をどう組み立てていくかが最も重要になり、カリキュラムの中味をつくる議論や合意を形成することに時間をかける必要がある。したがって、コース制か元の類型かという点については早急に結論を出す時期に来ている。

また、この検討委員会の状況を他の教職員にもイメージができるような形で情報を提供し、検討委員会だけが進めているということではなく、各教職員が自分ではどう関わられるのかを意識してもらえようような手立て、ニュースを配布するなどを講じる必要がある。

(4) 第4回

ア 日 時 平成18年1月26日(木) 13:30 ~ 17:00

イ 場 所 三重県立桑名北高等学校 校長室

ウ 参加者 木岡 一明 [国立教育政策研究所総括研究官]
南部 初世 [名古屋大学大学院助教授]
田中 秀佳 [名古屋大学大学院生]
桑名北高等学校教職員

エ 内 容

① 活動内容

前回に引き続き、管理職、学校改革委員、企画委員の教員、そしてアドバイザーによりコース制の協議が中心に行われた。まず、前回のアドバイザーの訪問以降に行なわれたコース制、入試についての県との協議や入試の状況が学校側から報告され、続いて各コース案の作成を担当している教員による、各案の報告をもとに、それらをより具体化する方策について話し合われた。

② 協議内容

開設するコースについて

桑名北高校では、コース制を平成19年度より導入する計画が進められている。また、入学試験の方法は前期に推薦入試を行なう複数受験を予定している。各コースの概要は以下のとおりである。

(7) 「アドバンスコース」

国公立と難関といわれる私立大学の受験を目指すコースとして、18年度入学の学年から「カレッジクラス」(仮称)として1クラス設置する。校外模試を全員受験するなど、大学進学のための学習体制を積極的につくっていく。

(4) 「情報ビジネスコース」

IT時代の担い手としてビジネスの各分野に必要な専門知識や技術の習得を目指し、情報・ビジネスに関する資格の取得を目指す。専門分野の授業は1・2年次から行なっていく、学年が上がるごと

に段階的に増やしていく。専門科目については、簿記は得手、不得手がはっきりするので選択にしたり、専門学校から講師を招いてコンピュータ・グラフィック（CG）デザインの授業を取り入れたりして特色を出していく。

(ウ) 「キャリアスポーツコース」

体育、部活動など、スポーツをカリキュラムの中に大きく位置づけ、部活動での全国レベルでの活躍やその実績による大学等への進学、スポーツに関連する職業に就くことを目指す。前回の議論でも話し合われたように、コースとして1クラス（40人）を設置することは難しいので、類系の形で普通科クラスの中に位置づけることが検討されている。中学校の運動部で活躍する生徒を推薦入試で募集し、週3日程度は5、6限に部活動を行なう。

(エ) 「人間臨床コース」

保育、福祉など人を援助する仕事へ従事すること、またその分野への進学を目指す。保育系のコースを開設している学校のカリキュラムを参考に、これからコース案を作成していく段階である。授業では、コミュニケーション能力を高めることを重視することや、専門科目については大学や短大と連携して開講することが考えられる。進路については、専門学校や大学と連携して、推薦枠を設けて進学先を確保することが考えられるが、就職までの進路保障をどうしていくかが課題である。

以上の各コースの案について協議され、以下のアドバイザーからの意見も踏まえて、①計5クラスのうち「アドバンスコース」と「情報ビジネスコース」を1クラスずつ設け、「キャリアスポーツ」、「人間臨床」は3クラスの中に類系として位置づける、②人間臨床コースで検討されているコミュニケーション能力を高める授業は全てのクラスで横断的に位置づけ、数年間の実践の後にコースとして独立させられるようであれば専門コースの設置を検討することが方針として決定された。

③ アドバイザーから

(ア) 「アドバンスコース」について

現時点では年間の授業時数表のみだが、0限や7限なども含めて生徒に渡す時間割表を具体的に組んで、正規の授業以外の時間にも、どのような指導を行なうことが可能なのかを含めて検討する必要がある。課外での授業となると、教員の負担が問題としてあがってくるが、単に通常の授業を増やすのではなく、教師がチューターとして交代制で調べ学習や自習の指導を行ったり、あるいは生活指導をしたりなど、生徒の自発的な学習を促す活動をすることも考えられる。また、授業間の休憩時間は必要なのかなど、従来の日課表自体も根本的に見直すことも考えてよいのではないだろうか。

(イ) 「情報ビジネスコース」

専門科目で身につける内容は、その科目の中で行なう以外にも、一般教科の中でその発想を盛り込んで関連性を持たせることを考える必要がある。例として、漢字検定なら「国語総合」の中に位置づけるとか、芸術であれば書道ではなく、CGやコンピュータを使った作曲を行なうことなどが考えられる。他の多くの学校が「教科は教科」でやっているが、それを克服することで学校としての特色が打ち出せると考えられる。特にCGについては、この分野に関心のある生徒は多く、進路もビジネス系に限らず芸術系への進学も可能性がある。また、専門科目は、1年次から組んでいくと生徒の専門分野に対するレディネスをつくることになり、効果的である。今後カリキュラムを作成するにあたって、横軸にビジネス教科、縦軸に一般教科を並べて、学年ごとに3分割して、そこに何を盛り込むのかを協議して進めていき、両者が重なるものをシラバス化していけばよいのではないだろうか。

(ウ) 「キャリアスポーツコース」

他のコースと同様に、スポーツと一般科目との関連性を持たせて、例えば国語でスポーツ選手の伝記を読んだり、世界史でスポーツに関する歴史を取り上げたりするなどのカリキュラムづくりが必要となってくる。類系として、1クラスのうち半分をスポーツに特化し、残りの半分を少し緩やかなものと設定するとよいのではないだろうか。部活動の種目については、現在のところ野球や陸上が検討されているが、生徒の獲得については中学校の教員とのつながりが重要であり、また部活や学級の指導については他校の教員からの異動なども考えられ、学外での協議も今後早急に詰めていかなければならない。

(エ) 「人間臨床コース」

コースのカリキュラム作成の参考としているのが、保育科の短大・大学を持つ私立の附属高校であり専門科目や実習などが容易に設定できる学校である。そのため、授業内容は参考になるが、それを実現するためには専門学校や短大、大学との連携先を探し、具体的な連携方法の協議が不可欠となってくる。また、生徒の進路を保障する上でも連携校への推薦入学ができるような仕組みをつくる必要がある。

どの程度専門的な科目を設定するのか、また設定可能なのかは今後の詰めていくことになるが、コミュニケーションに関する授業は、後述のように全てのコースで共通に取り組むことが考えられ、特色が明確に出されない場合、魅力あるコース（類系）としてPRが難しく、コースとして独立するのは難しいであろう。

(オ) 各コース共通の課題について

各コースの具体化と同時に、学校共通の方針や具体的な活動を同時に詰めていかなければ、コースの数だけ学校が分離してしまいかねない。学校の現状の課題から出されてきた「コミュニケーション能力を高める」という目標を、「人間臨床コース」の中だけにとどめることなく、学校全体の方向性としてその具体化を図る議論を別に進めていく必要がある。例えば、コミュニケーションに関する科目や活動は、どのコースでも共通に持ちつつも、その比率は「アドバンス系 → 情報ビジネス系 → キャリアスポーツ系 → 人間臨床系」の順に高めるなどすることでコースごとの違いを出していくことになるのではないだろうか。また、今回出された各コース案の授業時数は、アドバンスコースのみ多く、他のコースは少なく設定されていたが、全てのコースで単位数を統一したカリキュラムを組んでいくことが重要である。なぜなら、生徒に自己管理能力を身につけさせることなどの生活指導面の教育が、学校としての重点課題かつ特色であり、日常生活での有効な時間の使い方を指導することはコースを問わず、学校全体で取り組むべきだからである。「アドバンス」以外のコースも、同数の単位を設定して「校内での時間」を確保し、その中で単なる授業に限らない多様な教育内容をコースごとに考えていくことが必要であろう。

今後、コース内容を具体化していく際、企画委員、学校改革委員やコース案作成の担当者だけでなく、全教職員の共通理解を図りつつ進めていくことが求められる。同時に、生徒の募集や教師・父母へのPRについては中学校、専門科目については専門学校や短大・大学、開設するコースやそれに合わせた教員の人事については県、など学外の機関や関係者との連携・協議も早急に進めていかなければならない。

次回（3月7日）に向けて、2つのコース（「アドバンス」と「情報ビジネス」）を中心に学校で検討を進めていき、今回のように授業時数だけでなく授業内容も想定した、曜日ごとの時間割表も作成することが望ましい。その上で、次回は各コースのシラバスを検討することを行なう。

(5) 第5回

ア 日 時 平成18年3月7日(火) 13:30 ~ 17:00
イ 場 所 三重県立桑名北高等学校 校長室
ウ 参加者 木岡 一明 [国立教育政策研究所総括研究官]
南部 初世 [名古屋大学大学院助教授]
田中 秀佳 [名古屋大学大学院生]
桑名北高等学校教職員

エ 内 容

① 活動内容

上記の教職員、アドバイザーによりコース制の協議が行われた。2月に行なわれた地域協議会、校内でのコース制の研修と協議、他校への学校訪問、指導主事訪問などの報告の後、教育委員会へのコース制導入の提案書、各コース案をもとに、コース制の検討が行なわれた。

② 協議内容

(ア) 地域協議会について

学校では今年度2回目となる地域協議会を開催した。協議会のメンバーからは、近年の学校の取り組みや生徒の様子などについて、概ね好意的な意見が出された。一方、学校に対する要望も出されたが、その中心は「人間性を育てる教育をしてほしい」ということであった。以下、箇条書きによって示す。

- ・企業の即戦力を養成するのではなく、遅刻や欠席をしないなどの基本的なことを身につけている生徒を育てることが大切であり、社会もそのような人材を求めている。
- ・コース制導入の際、どんな子どもも受け入れ、3年間でその可能性を見つけ出せるよう選択幅を持たせて、先生と一緒に考える学校をつくってほしい。コースも途中で変更ができるようなチャンスを与えてほしい。
- ・教育の成果を数値で示すのではなく、心に残る教育をして、その努力を家庭に向けて示して欲しい。
- ・アルバイトに積極的な意味づけをしても良いのではないか。労働の大切さを教えてほしい。将来フリーターをやるよりも学生時代にアルバイトをすることで、生徒は新しい発見をすることもある。

また、協議会での議論を受けて、アドバイザーからは次のような意見が出された。

- ・特別指導生徒数、遅刻者数、生徒の自己評価など様々な情報が提示されたが、1次データや数量データのみではなくて、進路指導の中身やデータの質的分析の結果まで示すことができるとよい。
- ・教育課程の変更について、作成途中ではあっても「部外秘」として資料を提示して現状を説明することで、信頼関係にあるということを互いに意識する必要がある。
- ・どういう生徒がフリーターになっているのかの記述を残すことが重要である。
- ・協議会では、社会で一般的に考えられている意見が出されたが、それに対してどうこたえていくのか。学校の規範と社会との整合性、学校の「柔軟性」が求められている。
- ・制服改革は、コース制導入などの改革とはベクトルの異なるプロジェクトである。必ずしも生徒が着たいものではなく、なぜその制服を導入するのか、しっかりと意見を主張していくべき。入学してくる生徒とどれほど信頼感を持って接することができるか、に関わる問題である。

(イ) 学校訪問について

学校改革の参考として、定員割れを起し、授業を行なうのが困難であった状況を克服した愛知県内の普通科公立高校への学校訪問をおこなった。カリキュラムに特色があるわけではないが、学校からの情報発信を工夫するなど、PRの方法を巧みに行なうことが重要な要素であることが、訪問した教員から報告された。

(ウ) コース制について

教育委員会へのコース制導入の提案書、各コース案をもとに協議をおこなった。アドバイザーからの提案により、提案書に学校改革のための学校・教職員の問題意識が十分反映されているの

か、その内容を検討する作業が行なわれた。

提案書や各コースは、学校の課題を踏まえて検討されてきたものである。しかし、検討されてきた内容が各教員の意識にはあるものの、教員間で十分に共有化されていない。そのため、①提案書の内容が、これまでの課題の提示と、その課題からコース制を導入することの説明がともに明確でない、②各コースの内容が、学校の課題を反映しているのかが明確でなく、コース間でも目指す生徒像が共有化されていない、などの問題点が出された。

また、これまでの取り組みを十分に評価できているのか、年末に行なった教師・生徒に対するアンケートを分析して、これまでの授業のノウハウを見直し、良い部分は今後の授業で取り入れていくべき、という意見が出された。

③ アドバイザーから

上述のように、提案書とコース案に、これまで議論されてきたことを的確に表現する必要がある。まず、学校の状況と、それに対する認識を明確にし、なぜコース制の導入を提案するに至ったのかを説明する。そして、入試制度を変更することで、①どのような生徒が入学してくるのか、また入学させたいのか（インプット）、②どのような力を身につけさせて卒業させるのか、（アウトプット）、③そのためにはどのような教育内容・方法が必要となるのか、の3点を順序だてて示し、各コースの具体的な内容を説明する。学校の現状分析については、協議の中で、学校として問題と感じている部分のみ挙げられたが、学校の長所についても既に確認する作業を行なってきた。提案書には、その「良さ」についても表現すべきであり、コース案にもそれをどう活かしながら、授業に組み込んでいくのかを考えていく必要がある。

また、前回と同様に、各コース案の内容は学校として共通の目標を見出しにくく、それぞれ独立したものである感が否めない。依然として授業時数も、コースごとに異なっただけである。学校のアイデンティティとなる、全てのコースに共通のカリキュラムが必要であり、学校として目指す生徒像が明確なコース案が求められる。各コースのカリキュラムは、それぞれのコースで目指される生徒像を踏まえて、①何を教えるか（授業科目、活動について）、②どのように教えるか（教育内容、授業方法について）について、具体化していくことが望ましい。生徒に身につけさせる力については、①生徒の知識の獲得を課題とするのか、②生徒の認識・思考の方法を課題とするのか、によって教育内容や教育方法が異なってくる。その違いが、各コースのカリキュラムの違いとして反映され、コースごとの特色化につながる。

5 アドバイスを受けて—成果と課題—

(1) 成果

今年度は、19年度入学生より「コース制」導入を前提にアドバイスを受けた。中学校・生徒・保護者へのアンケートも実施し、どのようなコースを設定していくか、どのような教育課程にするかを話し合い、どうにか方向性まではできあがった。また、「コース制導入」が実現できなかった場合も考慮に入れるよう提案された。

(2) 課題

提案書の提出等、時間的なものに迫られカリキュラム等に未完成の部分が多くある。本校としての特色と各コースの特色とを現実的なことを踏まえて完成させてゆく必要がある。

一方で、「コース制導入」にするか「普通科の類型」にするかの選択が問題となっている。また、19年度を見据えた18年度の対応も早急に決定しなくてはならない。

6 アドバイザーから ―成果と課題―

昨年度、改革の方向性を決める議論をし、今年度は改革の内容を具体化することを目標としてきた。昨年度の「アドバイザーから―成果と課題―」では、次の5点、①対象とする生徒像を絞り込み「特色」を絞り込む、②達成可能な目標を立てる、③学校に対するニーズを把握する、④これまでの成果を生かす、⑤教員間で問題の共有化・構造化を図る、を課題として挙げた。①については、生徒像はある程度絞られ、「コース制」によってカリキュラムの特色化をはかる段階にまできた。今後、「特色」＝コース制のさらなる具体化にあたっては、その内容（②と④）と過程（③と⑤）という二つの問題を昨年と同様に意識する必要があるだろう。

まず重要なのは、改革の中身をどのような内容にするのかということである。その構造は、既に示してきたように、①どのような生徒が入学してくるのか、また入学させたいのか（インプット）、②どのような力を身につけさせて卒業させるのか、（アウトプット）、③そのためにはどのような教育内容・方法が必要となるのか（スループット）、の3点を順序だてて、組み立てていくこととなる。学校として目指すべき生徒像、さらに各コースで目指すべき生徒像を明確にして、それに相応しいカリキュラムを構成していく。その際、これまでの取り組みで評価できる点を積極的に組み込んでいくことによって、現状に対応し、生徒や教職員が納得でき、そして桑名北の独自性を持った教育課程がつくられることになる。

そして、その改革をどのような過程を経て進めていくか、ということも大切にすべきである。これまで、改革の議論は、担当者まかせになりがちであり、「これまでの多忙感、徒労感がある状況から、さらに新しい取り組みをしてうまくいくのか」という意識が、教職員間に少なからず存在している。各教職員が改革の方向性と具体的な内容を合意できるよう、共有化していかなければ、学校改革は成功しない。カリキュラムの体裁を整えることを急ぐのではなく、積み重ねてきた議論がコース案に十分反映されているのか、実践の成果と課題、そして議論の過程を改めて振り返りながら、検討を進めていく必要がある。そして、教職員の合意を図るとともに、生徒・親・地域・中学校・教育行政など、校外の関係者と関係機関に対していかに納得させられるような改革案が示すか、ということも重要である。

また、教職員の間では、生徒にじっくりと寄り添うという意味で、「スロー・エデュケーション」という考え方が共有されつつある。その方向性を具体化することが今後の作業である。

② 県立四日市西高等学校

所在地	四日市市桜町 6 1 0 0
交通機関等	近鉄 桜駅下車徒歩 1 5 分
電話番号	0 5 9 3 (2 6) 2 0 1 0
FAX 番号	0 5 9 3 (2 6) 4 8 3 0
教職員数	5 5 名
生徒数	1 0 3 5 名

1 学校の概要

本校は昭和50年に四日市市西部の閑静な新興住宅地域に開校され、本年度創立30周年を迎えた普通科進学高校である。創設時の7クラスに始まり、多い時で11クラスという大規模校であったが、少子化の影響を受け本年度より1クラス減の8クラスとなった。個々の生徒の多様な進路希望に応じた教育内容の提供に努めるため、平成7年度より比較文化・歴史コースを1クラス設置し、国際感覚の醸成を培っている。また平成15年度からは、数理情報コースを1クラス新設し、急速な科学技術の発展やIT化に対応できる人材の育成を目指している。

2 学校、地域、生徒の現状

(1) 学校・生徒の現状

「自律・協同・創造」をモットーに豊かな人間性と不屈の精神力の育成を目指している。制服の自由化（平成5年には制服を廃止し、標準服と私服の併用制を導入）に象徴されるように、生徒の主体性を重んじる比較的自由でのんびりした校風の普通科進学学校として地域に定着している。その様な校風に対する地域の中学校からの人気は高く、この3年間の受検平均倍率は1.3倍である。なかでも数理情報コースの受検倍率は約2.5倍以上の高倍率を維持し、また比較文化・歴史コースも平成17年度入試は2.2倍と倍率が上昇している。

生徒の9割以上が上級学校への進学を希望するものの、進路先は国・公立から各種専門学校まで極めて範囲が広い。そのため進学中心校のような大学受験オンリーの指導体制では対応できない状況であり、生徒の実態に合わせた教育指導体制が必要である。このように生徒の能力・適性、興味・関心が極めて多様化するなかで、生徒（保護者）のニーズ（平成14年度より学校アンケートを実施してニーズの把握をしている）に応え学校を活性化させるために、西高改革委員会を立ち上げて、いくつかの改革案を13年度より5ヶ年計画で企画・実施してきた。その成果の一つが数理情報コースの設置にあると言えるが、その設置を切っ掛けに、授業評価や家庭学習時間調査等の新しい試みをし改革の具現化を推進している。また事務簡素化の為に学籍管理一元化、校内ネットワークシステムの促進、教育相談体制の強化なども継続して推進している。

多様な価値観を持った生徒の中には、自己中心的な考えを持ち、規範意識に欠け問題行動に走る実態もある。学習面においても熱心に課題に取り組む生徒がいる反面、具体的な進路を決めぬまま勉強を半ば放棄する生徒がいる。又、入りたい学校に進学希望をするのではなく、入れる学校に推薦入学する生徒も目立ってきている。このような多様な生徒に対し、各教師は生徒一人ひとりの資質や適性・個性に応じた能力の育成を助け、自発的な学習につなげてゆく努力はしているが、学校全体としての組織的な取り組みとして、成果はあがっていない。

(2) 地域等の現状

昭和45年の東名阪自動車道の開通に伴って造成された大規模住宅団地を校区に持ち、昔からの町並みを流れる清らかな日本百名水の智積養水のある自然豊かな地区である。鈴鹿山麓研究学園都市センターに隣接した恵まれた立地条件にあり、本年度から交流の一環として三重ソフトウェアセンターより講師を招聘した。PTAとの連携は強力で、生徒会役員とPTA役員との話し合い、地域の清掃活動、文

化祭、人権講話、公開授業等の様々な学校行事を協働で実施している。また本年度より学校評議員会は各部の主任を4名加え、出された課題を全校的な課題として取り組む体制も出来上がった。

3 アドバイスを希望する課題

本年度の目指す学校像「キャリア教育の推進と学習指導を充実し、質の高い進学校を目指します。」を具現化し、活気あふれる学校にするためのアドバイスをいただきたい。

平成15年には理系志望の生徒・保護者のニーズに応えるために「数理情報コース」を設置し志願増を図ってきた。生徒は比較的素直でおとなしいが、高い進路目標を維持できず安易な（昨年推薦入試により合格した生徒は私立四大進学者の約68%にもなる）方向に流れがちである。推薦入試などの拡大による合格の早期化は、合格がゴールになってしまい、クラス全体の学習意欲が下がる。昨年度の家学習調査で、学年平均時間が1時間に満たないことや3割近い生徒が家庭学習をしていないことが判明した。学習に対して受身の傾向にある生徒にどの様に意欲を喚起し、学力向上を図ればいいのか課題である。課題解決に向けてキャリア教育を如何に有効に取り入れていけば良いかご教示いただければ有り難い。一方教師集団は課外授業・国際交流・クラブ活動などに力を発揮しているが、組織的な取組になっていない。昨年度より実施した授業アンケートを基に授業改善を組織的に進めることが課題である。しかし、教師の事務的な仕事内容は年々増え、生徒に対応する時間が少なくなり、ひとつひとつの実践に取り組むゆとりがなくなっているという現状がある。意識しないうちに、教育実践が惰性的になり、教育の質の低下を招きはしないかと危惧する。この様な課題も含めた昨年度末にまとめた別添の課題改善の前提条件として教職員の多くのストレス（日々の仕事量の多さ、保護者対応の難しさ）を緩和することが必要である。校務を見直し効率化を図り、授業改善に向き合う意欲を喚起したい。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 平成17年7月20日（水） 13:30～16:40
イ 場 所 三重県立四日市西高等学校 校長室
ウ 参加者 藤田 晃之〔筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授〕
落合 英次〔三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹〕
中村 和生〔三重県立四日市西高等学校長〕
大山 真穂〔同校教頭〕 臼井 正次〔同校教諭〕
岩花婦美代〔同校教諭〕 川崎千佳子〔同校教諭〕
瀧川 幸人〔同校教諭〕 伊藤 伸〔同校教諭〕

エ 内 容

(ア) 活動内容

- a 落合主幹より「学校経営サポート事業」の趣旨説明、今後の取り組み方法等についての確認
- b 学校長より本校の現状説明と課題の確認
 - ① 学校側資料
学校要覧、進路資料、学校経営の改革方針、学校アンケート結果、H17に向けての課題と改善案、白銀の矢（西高の生徒向け決まりなど）
 - ② 本校生徒の実情（進学意欲にやや欠ける、のんびりと高校生活を楽しまたい、あまり勉強しない）をどう打開するのか学校全体の足並みがそろっていない。
 - ③ 部活動でも頑張れる生徒を育てていきたい。推薦入学をしていく生徒が多い中で、どう生徒にキャリア教育を植え付けていくのか。
- c 藤田先生より自己紹介、キャリア教育の概要説明を受け質疑応答、意見交換
- d 福島県立磐城桜ヶ丘高等学校の研修会で使用したスライドの説明（16:00～）

(イ) 協議内容

a 目指す学校像について

- ① 「質の高い進学校」に対して教職員の共通理解がなされていない。
- ② 高校生活をのんびり送りたいとの思いで入学してきた生徒の学習意欲をいかに喚起するか。
- ③ 推薦入学を希望する生徒に対してキャリア教育をどう植え付けていくのか。

b 数理情報コースについては、西高における成績ランキングが高いという理由で選択し入学してくる生徒がいるが、その様な生徒への対応をどうするのか。

c 学校アンケートから見えてきた保護者の多様な考え方に対して、いかに対応していくのか。

＜キャリア教育の疑問に答えてもらう＞

【質問】 キャリアカウンセラーを設置している学校は？

【回答】 私立では少数。東京都の晴海総合などは公立高校では数少ないひとつ。予算的な問題で今のところ文科省は設置しない方向であるので、担任が担当せざるを得ない。

【質問】 キャリアアドバイザーの制度について？

【回答】 定義はない。社会人講話 8割、2割は進路指導。県によりバラツキがある。

【質問】 質の高い進学校とは？国公立合格の人数なのか？入学時点でその様な進学校を望んでいない生徒の地域の受け入れ校としての役割・存在価値はある。職業高校とは違う高校でのキャリア教育は「生きる力」をつけてやることだ。バリバリの進学校に転身する必要はないと思うが、どう思われるか？

【回答】 重要問題点。キャリア教育の原点は社会人として生きていく力をつける。辞めたときに自分がどうするのか、主体的に将来をどうしていくのか見通しが重要。

【質問】 数理情報コースにランキングで入学してくる生徒に対して？くくり募集について？

【回答】 学校ランキングで将来は決められない。無意味（ネームバリューで選択する）な劣等感・優越感も根っこは同じ。キャリア教育の正否を分ける価値観をより広いものにする必要がある。くくり募集は成績が良いところだから行きたいという弊害もある。

【質問】 18歳で自分の一生が決められるのか？

【回答】 耳あたりの良い言葉（生き方・在り方を考え支援する）で片付けている。効果は検証しにくい。2～3割は出来るはず。指導者も答えが分からず、自分の体験をもとに年輪を重ねて情報提供できる。キャリア教育は高い所から低い所へという図式ではなく生徒と共に模索する姿勢が必要。

【質問】 偏差値教育と対極にあるのがキャリア教育と思う。優越感・劣等感からの解放が必要。競争も必要だが、思いやりも大切と思うが。

【回答】 実社会では軸が沢山ある。中・高生の軸はひとつしかない。キャリア教育で一面的な見方一つの価値だけでなく軸取りの多元性、幅を広くする。

【質問】 教師の軸、保護者の軸は？教師の軸の意思統一は出来るのか？

【回答】 四日市西高の理念を理解してもらおう。説き伏せることは出来ないが、情報は提供できる。

【質問】 親の考え方が多様化している。無理して国公立に行かなくてもよいという親もいる。

【回答】 親とのコミュニケーションは大切。保護者面談とどれだけリンクしているのか大事。

【質問】 意欲のない生徒をどうするのか？チャレンジ精神を起こさせるには？

【回答】 社会人を呼ぶ。生徒が共感できる年齢は30代まで、教育実習生・卒業生をうまく使う。

【質問】 キャリア指標は？

【回答】 進路決定・不決定指標がある。進路を考えないのはだめで迷っているのは良い。

【質問】 親と進路について話をしない生徒については？

【回答】 親から子供に手紙を書いてもらい教師に渡し、LHRで読んでもらう。将来まで親が考えてくれていることを知り、その後良くなった例がある。自己肯定感が大切。

オ アドバイザーから

- (ア) キャリア教育は学習の意義、意味をわからせるためには重要で、本校のような学校には是非必要である。最終的には四日市西高の活性化に繋がるスクールカラーとしてみては。
- (イ) キャリア教育はゼロからの出発ではなく従来の進路指導に1～2割加えるだけである。
- (ウ) 無意味な優越感、劣等感からの解放が必要、偏差値教育と対局にあるのがキャリア教育。
- (エ) 実社会では偏差値以外にたくさんの軸があることをキャリア教育により教える。
- (オ) 親とのコミュニケーションをとる方法の成功例（親の書いた手紙をLHRで読む）

(2) 第2回

- ア 日 時 平成17年9月21日（水） 14:00～17:00
- イ 場 所 三重県立四日市西高等学校 校長室、視聴覚教室
- ウ 参加者 藤田 晃之〔筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授〕
落合 英次〔三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹〕
中村 和生〔三重県立四日市西高等学校長〕
大山 真穂〔同校教頭〕
同校教諭 30名弱

エ 内 容

(ア) 活動内容

- a 今後の取組についての打合せ及び協議 14:20～15:30
- b 「キャリア教育の推進のために」というテーマで研修会（職員 30名弱）15:30～17:15
 - ① 事前配付資料「キャリア教育の10の素朴な疑問に答える」、当日資料「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」他
 - ② 講話の概要
 - ・ 「選択肢の森をさまよう若者たち」を受け止め支援する仕組みがあるのか。
学習指導要領、教育制度改革の多様化による選択肢の拡大が有効活用されるためには前提条件として進路選択力が十分獲得されている必要がある。進路選択力には内に向かう自己理解力と外に向かう社会認識力、客観的知識などがある。
 - ・ キャリア教育と進路指導、進路指導の負の遺産、生き方は指導できるのか。
 - ・ キャリア教育推進施策の特質、プロアクティブ・ガイダンスにより施策の効果を高める。
 - ・ 教科との連携、教科担当者は無味乾燥な断片的知識に命と体温を与える。成功の鍵は教員側の共通理解と熱意。
 - ・ 進学校におけるキャリア教育の必要性、できることから始めよう、教師は「高み」から「正答」を与える存在ではなく共に悩み模索できる存在でありたい。

(イ) 協議内容（講話後の質疑応答）

- 【質問】 キャリア開発は必要と思うが、キャリア教育とって予算をつけると、報告とか総括とかいろいろ別の仕事が増えてきて忙しい。その事についてどう思いますか。
- (回答) やればそれだけ成果はある。キャリア教育の成果をどう評価するのか問題だが、評価しなくていいわけではなく、部分的に限定されるが評価可能なものは評価していく。
- 【質問】 高校ですごく細分化して専門科を作っているようだが、そんなに（15歳ぐらい）も早くから専門科に入らなくても、一般教養を高める為にいろいろな科目を勉強すべきと思うが、先生のご見解はどうですか。
- (回答) 今世の中の流れとしては個性化・多様化の方向にある事は事実だが、好きな事だけやるのは好ましくない。細かく分けていくのには私的には反対です。

＜研修会後のアンケート調査より＞

キャリア教育の概要について①よくわかった②だいたいわかったの回答をした人が85%以上いたことから、キャリア教育の理解が深まったと思われる。主な意見・感想は、

- ・ フリーター、ニートなどの問題を切実に感じた。
- ・ 総合学習にキャリア教育を導入し、生徒に職業について考えさせたい。
- ・ わかりやすい話で大変参考になった。職業観に関連する社会問題を解決する為の様々な方策については、本来家庭でやるべき事をアメリカに倣ってやらざるを得ない状況なのか。
- ・ キャリア教育の必要性は痛感する。問題点は3つある。①生徒・保護者がキャリア教育の意義を感じていない。②キャリア教育の具体性が乏しく教員へのヒト・モノ・カネ等の補助がない。③結果として何を評価するのかという指標がない。

オ アドバイザーから

(ア) 意欲を持って取り組めるキャリア教育を推進する方策

a 社会人の講話

地元の名士より自分の将来と重ね合わせる事の出来る卒業生の話は大切。内容としては合格するノウハウだけでなく、高校時代に体験しておけばよかったことなども含めて話してもらおう。3年生だけでなく1・2年生も対象に実施。実施後は教師が一旦消化して伝え直してやるなど事後指導が大切。

b 適性検査

返し方が重要。人は変わるから、検査結果は成長の過渡期の一断面でしかない。又、体調や気分で左右されるので、その様なことを学年で共通理解をしておく。

c キャリア教育に関するプログラム作成

自分達の将来の動機付けのためにも、1年生からキャリア教育が大切。進路指導年間計画の見直し。

今回の訪問では、先生方を対象とした研修会の形式をとっていただき「キャリア教育の推進のために」とのテーマでお話をさせていただきました。文化祭を約1週間後に控えた時期であったため、ご欠席の先生方もいらっしゃいましたが、ご参加の先生方は熱心にお聞き下さり、また、極めて重要な点をめぐる質問もいただくことができました。

今回ご出席いただけなかった先生方を含め、職員室等で情報交換をしていただき、先生方お一人お一人、全校を挙げた取り組みとしてキャリア教育を捉えて実践して下さることを期待しております。
(アドバイザーより)

(3) 第3回

ア 日時	平成17年12月15日(木)	13:00～17:00
イ 場所	三重県立四日市西高等学校 校長室、体育館	
ウ 参加者	藤田 晃之〔筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授〕 落合 英次〔三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹〕 中村 和生〔三重県立四日市西高等学校長〕 大山 真穂〔同校教頭〕 知念 英也〔同校教諭〕 岩花婦美代〔同校教諭〕 伊藤 伸〔同校教諭〕 坂口 勝也〔同校教諭〕 稲垣 良二〔同校教諭〕 瀧川 幸人〔同校教諭〕 同校1年生 320名	

エ 内容

(ア) 活動内容

- a 今後の打合せ及び本日の講演の準備 13:00～14:15
- b 「1学年を対象とした進路講演（職員10数名、生徒320名）14:15～15:05
- c 1・2年生の年間進路指導計画の見直しについての協議 15:30～17:00

(イ) 協議内容

a 進路講演 テーマ：あなたの「今」はどこに向かっていますか

① 高校生の学力は調査(OECD)からは下がっているわけではない。しかし教科に対する意識、意欲に問題がある。教科を好きだと思わない生徒が国際平均に比べて多い。「今」「ここ」に関心の持てない日本の高校生の姿がある。受験のための勉強なら、終わればどうなるのか、本当の学びの楽しさや重要性を知ることが必要。そのためには

- ・ 高校の先生に苦手な科目ほどなぜその教科の教師になったのか聞く。秘密があるかも。
- ・ 大学見学をしてその道のプロの模擬授業を聞くのは視点を変えるチャンスになる。

人間には得意、不得意な領域があるが、もっと知りたいもっと分かりたいと思えることに会うことの大切さ、もっと大きな視野でみてみるとつまらないと思っているものの中にも面白いものもあるかもしれない。探求心を持ってこれからの高校生活を送ってほしい。

<生徒の感想>講演後1クラス(37人)でアンケートを実施した結果：大いにためになった(10人)、まあまあためになった(26人)、あまりためにならなかった(1人)。

- ・ 藤田先生の話聞いて「興味を持って行動することは大切だ」と思った。
- ・ 言われてみて「そうだな」と理解できることがいっぱいあり自分の視野が広がった。
- ・ 藤田先生のお話は自分の描いていた将来と似ていたから、とても興味があった。
- ・ 藤田先生の話にとっても共感できるものがあり勉強になった。為になった。
- ・ 「自分が少しやる気を出せば大きく変わるんだ」と分かった。
- ・ 藤田先生の話聞いて「なぜ勉強が大切なのか、勉強することの意味」が分かった。これからは勉強に対する姿勢が変わっていくと思う。
- ・ 話を聞いて理科以外の教科も関心が持てるような気がしてきた。

b 職員代表との協議

- ① 適性診断テストは問題が2つある。ひとつは本当にその子のやりたいことなのか解釈上の問題。もう一つは開発されたアメリカと日本の就職の仕方の違いにある。普通の会社員になるという場合には役に立たない。
- ② 1年のどこかの段階で視野を広げる、迷わせることを仕組んでいく。親が心配していることを子どもたちに伝える手紙を書くことで、視野を広げる支援になる。1年生の時に進路を考えさせるワークをする。それが親との会話につながる。ワークの用紙に、親の意見を記入するコーナーを持つ。
- ③ 総合学習の時間の中でキャリアに関することをやっていけば、LHRの取られる時間が少なくなる。総合学科の産社のように、業者の冊子をうまく組み立ててなら誰でもやれるしよい。進学校でも進路意識を高める指導としてやらせていた。
- ④ 進路カウンセリングのスキルがないので生徒に対して反応できない。カウンセリングを中心にしたエコグラム適性検査の解釈などはキャリア教育の中心的課題である。進路指導に関するキャリアカウンセリングなどの何人かに教師がいき伝達講習していくことはあった方がよい。
現職教育の講師としては2種類ある。大学の教育心理の先生かベネッセ、リクルート系列の人にきてもらう。もうすでに東京都晴海高校などですでにおこなっている職員の経験談などを聞くのもよい。
- ⑤ 進路の情報が進学・就職のタイムリーな状況が下の学年に入っていないので、つかみにくい。各学年の動きをつかむ必要がある。学年の意見交換など必要。

⑥ 進路からの情報は確かに少ない。進路が多様化しているので1回のプリントで大学受験だけ書けばいいわけではない、すべて網羅するのは、あらゆることを織り込んで書くのは大変。作っても読まれないジレンマがある。

オ アドバイザーから

- (ア) 3年生の年間計画は現状のままでよい。1・2年生については自分の進路を「どう」選んでいくのかというプログラムがもう少し必要。入試中心のプログラムではなく、「会社に入って働くとはどういうことなのか」社会人の出来れば本校の卒業生の話をお聴く機会があるとよい。
- (イ) ワークシート(フリーターに関するなど)の前後の位置づけ、体系づけ・系統立てをし3年間の活動計画をたてる。そのためには1・2年の引き継ぎ、連携を深める。今やっていることを軸にしてゼロからの出発ではない。
- (ウ) 生徒は狭い範囲の中でしか選択していない、いわゆる「迷わせる」「視野を広げてあげる」ことが1年の前半で必要である。また親の思いを知ることも重要。
- (エ) キャリア教育を四日市西高でやるとは理想論的な意味での 子供たちの学習動機・意欲を高めていく道具である。内的な動機付けのひとつとしてのキャリア教育により 四日市西高の良さをキープしていく。先生方の実践や生徒が四日市西高に対して期待している入学前から持っているイメージと矛盾しないでよりよい方向に持っていける。

(4) 第4回

- ア 日 時 平成18年1月27日(金) 14:30~17:00
- イ 場 所 三重県立四日市西高等学校 校長室
- ウ 参加者 藤田 晃之〔筑波大学大学院人間総合科学研究科助教授〕
 落合 英次〔三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹〕
 中村 和生〔三重県立四日市西高等学校長〕
 大山 真穂〔同校教頭〕 知念 英也〔同校教諭〕
 岩花婦美代〔同校教諭〕 伊藤 伸〔同校教諭〕
 坂口 勝也〔同校教諭〕 稲垣 良二〔同校教諭〕
 瀧川 幸人〔同校教諭〕

エ 内 容

(ア) 活動内容

- a 本日の打合せ(藤田先生、落合先生、校長、教頭) 15:00~15:30
- b 1月12日に実施した進路委員会での検討事項「1・2年生の年間進路指導計画の見直し」及び本事業についての成果と課題についての協議 15:40~17:15

(イ) 協議内容

進路指導年間計画の見直し 1・2年生のそれぞれの目標に合わせた『ワークシート』を追加しプログラムの立体化(体系的、継続的)を図る。

1年	①視野を広げる(4、9月) 「生活実態調査(進路調査)」 ②自己理解 『適性関心診断テスト』 ③職業理解 『フリーター 自分探しの旅』 ④コミュニケーション能力の育成
2年	①放課後「出前授業」の開催 ②『高校生活を見直す~10年後の自分を見据えて』 ③ 大学、学部探索 『学部・学科を探ろう』 ④ 学年末「進路週間」の開催により3学年に繋ぐ

オ アドバイザーから

- (ア) 4つのワークシートが有るのと無いのとでは大きく違う。
- (イ) 進路指導のプログラムを提供して感想文を書かせるだけ、というやりっ放しではいけない。新しいプログラムの事前事後の共通性のある効果分析（基本的には「進路のことを考えるのは面倒だ」など5択で、質問内容は事前事後で全く同じではなくダミーのような問題も盛り込む）による検証が必要。
- (ウ) 6月の教育実習生を生かすプログラム（大学生活をしてみて高校生活やり直すとしたら、こんなことをしてみたい）として、実習生による講話の実施。
- (エ) 1学年での西高でつきたいコミュニケーション能力とは何か、具体的にはっきりさせる。
- (オ) 2年生6月のプログラムの中に「働くってどういうことなんだろう」という働きかけを付け加えることにより深みが増す。
- (カ) 四日市西高関係者（卒業生、事務の方）の話を聴く機会を持つ。
- (キ) 適性関心診断テストはプログラムを実施した後の返却の仕方が問題。
- (ク) 「進学の手引き」の発行については、是非あった方がよい。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

(1) 成 果

- (ア) 進路指導年間計画をどの様に繋ぎ合わせ系統づけていくのか、というプログラムの立体化（体系的・継続的）が必要であるという認識が共有できてよかった。
- (イ) 進路指導部としては、これまで3年生の進路指導のプログラムメニューばかり意識してきたが1・2年生の時から体系的な指導計画を企画する必要があることがわかった。
- (ウ) 学年間での情報を共有する進路委員会を開催することができ、全体を見る良い機会になった。
- (エ) 勉強の仕方をまとめた3年生用の「進学の手引き」が作成できた。

(2) 課 題

- (ア) どういう生徒たちを育てようとするのかを全職員で話し合い、共通した目的意識を持つ
- (イ) プログラムの効果分析の実施、各部・各学年の連携強化
- (ウ) 西高の教師陣の学力保障と進路保障に関する意欲向上と意識改革が必要
- (エ) 西高の理念を実現する組織改革が必要（目標の明確化と実行部隊）
- (オ) キャリアカウンセリングの現職教育の充実
- (カ) 「進学の手引き」の活用方法の指導

6 アドバイザーからのコメント（1年間を振り返って）

(1) 「キャリア教育」とは

- ア 偏差値教育とは対局にあり、実社会では偏差値以外にたくさんの軸があり、無意味な優越感、劣等感からの解放が必要。
- イ 学習の意義・意味をわからせ、学習動機・意欲を高めていく道具である。

(2) 「キャリア教育」を推進することで

- ア 四日市西高の良さをキープし、先生方の実践や生徒が四日市西高に対して入学前から持っているイメージと矛盾しない方向にもっていける。
- イ 最終的には四日市西高の活性化に繋がるスクールカラーとしてみては。

(3) 「キャリア教育」を推進する方策

- ア キャリア教育はゼロからの出発ではなく従来の進路指導に1～2割加えるだけである。
- イ 進路指導年間計画を見直しプログラムの立体化（体系的、継続的）を図る。
- (ア) 3年生の年間計画は現状のままでよい。1・2年生については視野を広げ、自分の進路を「ど

う」選んでいくのかというプログラムが必要。親が心配していることを子どもたちに伝える手紙等で親にもかかわってもらおう。

(イ) 入試中心のプログラムではなく、「会社に入って働くとはどういうことなのか」等のテーマで卒業生、教育実習生、事務の方等による講話は大事。

(ウ) 学年で継続した共通ワークシートの作成（各学年2つぐらい）

(エ) プログラムはやりっ放しではいけない。事前・事後の効果分析による検証が必要。

ウ 「進学の手引き」は作成したほうがよい。

エ 進路委員会を復活させて定期的を開催した方がよい。

③ 県立名張桔梗丘高等学校

所在地	名張市桔梗が丘7番地1街区1926-1
交通機関等	近鉄 桔梗が丘駅下車徒歩20分
電話番号	0595(65)1721
FAX番号	0595(65)1759
教職員数	55名
生徒数	754名

1 学校の概要

本校は昭和48年に、名張地区に高等学校普通科の独立校をとの地域の多くの方々の熱望によって誕生した。そして閑静で文化度の高い地域の中に存在する学校で、学校自身の持つ活力と、地域の活力の交流を図るにはうってつけの恵まれた条件下にあり、地域との交流は創立以来部活動を中心に継続されてきている。

2 学校、地域、生徒の現状

本校は普通科の高校（生徒数754名、二期制、単位制）で、進路状況は卒業生の9割が進学（昨年度4年制大学は国公立2名・私立110名、短大43名、専門学校93名）し、就職は1割弱である。部活動が盛んで、陸上部・水泳部・吹奏楽部・箏曲部を中心に、東海大会や全国大会に毎年のように出場を果たしている。

一方、本校職員を講師とした「図書館ミニミニ講座」の地域への開放や、回覧誌『桔高だより』による地域への発信、校外清掃、地域行事への部活の参加などを積極的に押し進め、地域と共にある学校、地域より信頼される学校づくりを目指している。

しかしこうした中で進学においてはその実績の伸び悩みが見られ、生徒にいかにも目標を持たせ、必要な学力をどのようにしてつけるか、また部活動も8割の生徒が所属しているとはいえ、低調な部の活性化をどのように図るかといったことが喫緊の課題で、このための校内指導体制や指導方法の研究が急務となっている。

上記のことを踏まえ、また生徒数減少期を迎える中で、本校が地域で確固とした地歩を築いていけるようその方途を模索の状態にあり、こうしたことから学校経営品質推進のためのプロジェクトを設置した。

3 アドバイスを希望する課題

本校は現在、次の三つの課題に直面している。

- (1) 学校としての最重要課題に向けた取り組みを、学校経営品質の手法を用いながら、職員がどのように着手していけばよいか。
- (2) 職員間の仕事量均等化と軽減化、多忙感の解消に向けた取組はどのように着手すればよいか。
- (3) 分掌と各年次団が緊密に連携し、学校が有機的・機能的に組織化されるためには、どこをどのように変えていけばよいか。

上記(1)については、本年度「学校経営品質推進プロジェクト」を立ちあげ、年間の推進計画を策定し、取り組みを行っているが、その方向性や内容について適切なアドバイスが必要と考える。(2)については本校では学級数減に伴っての職員定数削減の中で、職員の分掌配置のやりくりをしているが、分掌担当者間の業務量の多寡の違いが顕著に見られ、退校時間が遅い者は恒常的に21時、22時となる職員（限定された者とはいえ）がみられる。またそれほどまでの時間でなくても、当然ながら定時近くに勤務を終えらる職員は少数であり、そうしたことに対する職員の不満も蓄積してきている。(3)については、ややもするとその担当部署だけの「部分最適」に陥る傾向があり、学校全体としての「全体最適」への意識感覚が希薄な場合も見受けられる状況である。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時：平成17年7月15日（金） 13：20～16：45

イ 場所：校長室・会議室

ウ 参加者：

- 小松 郁夫 [国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長]
梶間みどり [佐賀大学高等教育開発センター 講師]
辻 喜嗣 [県教育委員会事務局研修企画室 研修主事]
- 学校経営品質推進プロジェクトメンバー
森川(学校長)、大川(教頭)、米森、松本、服部、川上、吉田、川合
- 一般より
福田(事務次長)、田森、村田、谷屋、秦、山神

エ 内容

(ア) 協議の進め方についての事前打ち合わせ、及び次回の予定の調整

(イ) 名張桔梗丘高校の抱える現在の課題、強みと弱み等について協議と懇談

オ アドバイザーより

(ア) 学校経営の目標は、『授業がうまくいき、生徒がいきいきとし、職員が満足感を持てる』ことにつきる。

(イ) ある学校では各年次の抱える課題が同じであっても、それへの対応が各年次で異なるというケースが見られるが、この学校ではそうしたことはないか。

(ウ) 学校の経営品質を高めるには次のポイントが必要：

① 自分達の学校はどのような学校であるべきかをはっきりつかむ

② 生徒の実状・実態はどのような状況にあるかをつかむ

③ 生徒のどこをどう押せば、生徒はどう動くか、どういう効果があるのかといった戦術をたてる
取組を誰がリードしていくかが明らかである必要があり、また、生徒に徹底的に寄り添った働きかけや戦略が必要。そして一年たってどこまで目標到達できたかのデータ分析が必要。

(エ) 生徒指導上であまり問題がなく、比較的平穏な学校が更に一段アップするには、いくつかのポイントに絞って重点化していけば、メリハリのある学校となる。

(オ) 各分掌・年次でうまく取組があったとき、それがツールとしてすぐ他の部署でも取り入れられる体制が必要。また、そうしたことが容易にできるためには、それなりのコーディネーターの存在も必要。

(カ) 企業では一つの委員会を立ち上げるときは、既存の委員会を二つ程つぶすぐらいの意気込みでやっている。教員の仕事量が増加してきているのはわかるが、一番効果的なことをいかに（教員側の労力が）省エネでやれるかを考える必要がある。

(キ) 学校活性化のためとはいえ、生徒の特定集団（例えば特進クラスの設置等）のみに特別な支援を強化するという方策はいかなものか。

(2) 第2回

ア 日時：平成17年9月28日（水） 13：20～16：50

イ 場所：校長室・会議室

ウ 参加者：

- 小松 郁夫 [国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長]
梶間みどり [佐賀大学高等教育開発センター 講師]
辻 喜嗣 [県教育委員会事務局研修企画室 研修主事]
- 全体会・班別討議は全職員が参加

- 全体会後の研究協議は学校経営品質推進プロジェクトメンバーが参加
森川(学校長)、大川(教頭)、米森、松本、服部、川上、吉田、川合、橋本、中矢

エ 内 容

- (ア) 協議の進め方についての事前打ち合わせ、及び次回の予定の調整
- (イ) 学校経営品質に関わるカテゴリーのアセスメントの班別討議
- (ウ) 班別討議結果を受けての全体報告会
- (エ) 学校の抱える課題と、課題解決に向けた手順等について協議

オ アドバイザーより

- (ア) 学校評価をすることも大切ではあるが、それが学校の改善につながっていくことがより重要である。
- (イ) 改善には生徒等も巻き込むことで、職員側が省エネでやれることが大切である。
- (ウ) 多忙感と多忙には決定的な違いがある。事務的連絡等は一人一台パソコンを活用し、そうした多忙感を減じることも必要である。
- (エ) 課題の何から手がけていけば良いかの「優先順」に気づいてほしい。
- (オ) 生徒指導上で特に課題があるというのでなければ、「授業の取組、授業のやり方、授業の研究」から手がけてはどうか。
- (カ) 今や学校は多様化してきており、各学校できちんとした考えがあるなら、それに沿った責任ある学校づくりをしていっても受け入れられると思う。既成の枠組みを取り払うという選択枝もあり得ると考える。
- (キ) 教員は真面目であるが故に、変化への対応が遅くなる。
- (ク) 改善点を出し合い、その積み重ねが集まると、大きな動きとなる。ゆっくり検討することも大切だが、小さなことでもまず「動き」を出していくことが必要。そういう意味でやれるものから、そしてやれる所からやっていくことが大切である。

(3) 第3回

ア 日 時：平成17年10月17日(月) 13:20～16:50

イ 場 所：校長室・会議室

ウ 参加者：

- 小松 郁夫 [国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長]
梶間みどり [佐賀大学高等教育開発センター 講師]
辻 喜嗣 [県教育委員会事務局研修企画室 研修主事]
- 学校経営品質推進プロジェクトメンバー
森川(学校長)、大川(教頭)、米森、松本、服部、川上、吉田、橋本、中矢

エ 内 容

- (ア) 協議の進め方についての事前打ち合わせ、及び次回の予定の調整
- (イ) カテゴリーのアセスメント結果、及び職員のアンケート結果から見えてきた取組課題について協議

オ アドバイザーより

- (ア) 教員はすべて合議のスタイルを求め、また全体の詳細な見通しができないと動こうとしない。しかし教育改革はスピードを求められており、やりながらマネジメントのPDCAサイクルを回しつつ改善をしていく必要がある。
- (イ) もう一段上の教育成果が実感できていないから、職員に不満感があるのではないのか。
- (ウ) カテゴリーのアセスメントを実施し、また職員アンケート結果をKJ法でまとめ上げたことにより、この学校として見えてきたものがあるはず。
- (エ) 現状分析ができれば、次は行動計画づくりが必要となる。またその活動の成果を評価する仕組み

- も考えていく必要がある。そうすることで改善の過程が見えてくる。
- (オ) 一生懸命やろうとすればするほど仕事量は増えてくる。また、その新しい取組は誰かに、そしてどこかの分掌にとりあえず頼るため、そこを中心に特定職員に仕事量の偏りができてしまう傾向がある。
 - (カ) 多忙であっても納得できてやっていたら、それは充実感となる。そして単位制であることによる多忙感があれば、単位制のメリット・デメリットを総合的に検証する必要がある。
 - (キ) どこかに見直しの一点重視が必要。それをもとに学校全体が強化されていく。そうした手法を取れば組織力も上がるし、学校も活性化していく。
 - (ク) 学校としての教育理念や、また職員の思いである「授業をしっかりとし、生徒としっかりと関わっていく」ことを中心に、仕事のバランス、会議のあり方等もこれから協議していけばよいと思う。

(4) 第4回

ア 日 時：平成17年11月11日（金）9：00～17：00

イ 場 所：校長室

ウ 参加者：

- 小松 郁夫 [国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長]
梶間みどり [佐賀大学高等教育開発センター 講師]
辻村 大智 [昴学園高等学校 教頭]
辻 喜嗣 [県教育委員会事務局研修企画室 研修主事]
- 学校経営品質推進プロジェクトメンバー
森川(学校長)、大川(教頭)、米森、松本、川上、吉田、川合中矢

エ 内 容

- (ア) 協議の進め方についての事前打ち合わせ、及び次回の予定の調整
- (イ) 授業の実際を見て感じ取ったこと、及びカテゴリー1～8のアセスメントの結果等をふまえ、本校がこれから取り組むべき課題を協議。

オ アドバイザーより

- (ア) 個々の授業の改善点はいくつか見られるものの、全体としては落ち着いた授業ができています。
- (イ) 今回授業展開で大変うまいと感じたものがあったが、そうした場合に授業の仕方について組織として研修会を持っているのか。
- (ウ) 毎日が多忙とは言っても、教員にとっては授業が一番のポイント。満足のいく授業が展開できれば、充実感・満足感となる。
- (エ) 家庭での学習も大切だが、各50分の授業そのものが生徒にとって本当に生きたものになっているのかどうか。効率の良い授業であれば、生徒は集中と気分転換の識別がすっきりできると思う。
- (オ) 生徒による授業評価結果は、生徒自身未熟なことも含めて一つの指標と割り切り、そのよいところを取っていけばよいと思う。
- (カ) カテゴリー1～7では評価がそれなりに高いのに、カテゴリー8ではその評価結果が厳しく、その分析として「成果を見る指標設定ができていない」という結果や、またKJ法によるこの学校の当面する課題の洗い出し等、この学校のシステムも含め、冷静によく分析してある。
- (キ) アセスメントはあくまでも取り組みの「仕組み」をみるものであり、取り組みの具体的な議論となると、各人の経験や教育観が出てくる。しかしその中で対話を進めていけば、何か見えてくるだろうし、進むべき方向が明らかになってくると思う。その場合、生徒から見た観点も必要。

(5) 第5回

ア 日 時：平成18年1月17日（火）13：30～17：00

イ 場 所：校長室

ウ 参加者：

- 小松 郁夫 [国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長]
梶間みどり [佐賀大学高等教育開発センター 講師]
辻村 大智 [昴学園高等学校 教頭]
辻 喜嗣 [県教育委員会事務局研修企画室 研修主事]
- 学校経営品質推進プロジェクトメンバー
森川(学校長)、大川(教頭)、米森、松本、服部、川上、吉田、橋本、中矢

エ 内 容

- (7) 協議の進め方についての事前打ち合わせ、及び次回の予定の調整
- (4) 本校がまず取り組むべき最重要課題の特定について研究協議

オ アドバイザーより

- (7) PDCA サイクルは、本来は順を追ってやっていく必要があるが、この学校にあってはAをもっと明瞭にして、これだけはやっていこう、これだけは変えていこうという設定をし、そのためには何から、またどうしたらよいかを考えていってはどうか。
- (4) これまでは取り組みの評価指標、物さしがなかったため、そのやっていることによって学校は成果があがっているかどうかわからなかったのではないのか。
- (4) 職員の多忙感とも相俟って、個人個人はよく頑張っているが、学校全体をみると進歩がないという感覚があるのではないのか。
- (エ) 何か一つ二つのできる取り組みに対して、指標を設定すればよい。今やっていることにスポットライトをあてるだけでよい。それが「授業改善、授業の充実」ということではないのか。
- (オ) 「授業改善、授業の充実」の取り組みの指標の一つとして授業評価がある。しかしあまり細かく指標を決めてしまうと、毎年次々と入ってくる新しい生徒の変化に対応しきれないことも生じる。しかしいずれにしても、授業評価は教員にとってひとつの大きな目安とすることができるし、自分の振り返りができる。

(6) 第6回

ア 日 時：平成18年3月2日（木）13：30～17：00

イ 場 所：校長室

ウ 参加者：

- 小松 郁夫 [国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長]
梶間みどり [佐賀大学高等教育開発センター 講師]
辻村 大智 [昴学園高等学校 教頭]
辻 喜嗣 [県教育委員会事務局研修企画室 研修主事]
- 学校経営品質推進プロジェクトメンバー
森川(学校長)、大川(教頭)、米森、松本、服部、川上、吉田、川合、橋本、中矢

エ 内 容

- (7) 協議の進め方についての事前打ち合わせ
- (4) 最優先課題（授業改善、授業の充実）の具体的な取り組みや、取り組みの評価指標、取り組みの工程表を前もって各メンバーが提案し、それらをもとに協議。

オ アドバイザーより

- (7) 都の私立高校では、ベテランの教員が若手の教員を育てていくシステムができています。
- (4) 考査成績がふるわないと、部活動を当分の間停止という方向性はおもしろいと思う。日本の子供達は仲間との関係を特に大切にする傾向にあるので、そうしたことに對しては、良い意味で作用していくのではないだろうか。そうしたことを通して生徒の組織化をはかることも大切だと思う。この学校では、バランスの取れた生徒の育成をかかげていることから、それは大切だと思う。

- (ウ) 4月からすぐやっていけるものと、今暫く時間をかけていかなければならないものとを識別する必要がある。
- (エ) この学校や生徒の現状はどうなっていて、どこにどう手をつければ教員が手応えを感じられるようになるのか、といった取り組みがほしい。また自己の現状を見極め、将来を見通せる子供をどう育てていくかが大切。
- (オ) 別紙資料ではそれぞれに重複する提案があり、そうしたもから優先的にやっていけばよいと思う。そしてそれはどこで責任を持ってやっていくかも含めてプラン化してほしい。
- (カ) 教員側の望むところと、生徒の望むところの違いがあり、場合によっては入学時のガイダンスで、生徒の持っているイメージを壊し、教員側の望むところをしっかりと生徒に植え付けるということも大切である。
- (キ) 何をやる場合も生徒との根比べのところもあり、そうしたとき教員集団としてどこまでスクラムを組んで頑張れるかにかかってくる。

5 アドバイスを受けて一本年度の課題と成果一

この事業の指定を受けたこともあって、サポート事業にかかる研究協議会を中心に、学校経営品質推進プロジェクト会議を年11回開催し、次の共通理解を得るに至った。

- ① 制度等の検証より、校時の一部を変更（できれば平成18年4月から実施）
- ② 会議効率化の検証より、会議の持ち方を改善（平成18年4月から実施）
- ③ 組織システム化の検証により、校内組織編成の改善（平成18年4月から実施）
- ④ 学校最重要課題として授業改善・授業充実を特定し、それに基づく具体的な取り組みの工程表、取り組みの達成度評価指標の作成を計画（一部については平成18年4月から実施）

上記①～③によって職員の忙しさや多忙感を軽減し、それによって④に集中して取り組む方向で進んできた。

今後の課題として、④についての具体的な取り組み内容はほぼ特定できつつあるが、更に細部の検討（例えば授業評価票の具体的文言の検討等）が、次年度の継続した課題として残されている。

6. アドバイザーから —成果と課題—

6回の訪問を通してこれまでの学校改革の成果を確認することが出来た。同校の成果としては、次の3点が上げられる。

- ① 問題状況や課題が教職員間に次第に共有されるようになったこと
- ② 問題や課題の解決のための重点事項として、まず「学習指導」を絞ることが出来たこと
- ③ 次年度以降の取り組みの方向性がはっきりしたこと

が上げられる。

その上で今後の課題としては、

- ① 高等学校教育の場合は、多くの教育場面で、「授業は教師と生徒が共につくるもの」という意識で改革案とその取り組みを考えることが重要であることを、具体的に授業改善の中で工夫することが求められる。そのためにも、生徒が授業改善や学力向上などの目標を、自分の問題として取り組んでいける環境をつくることも大切である。
- ② 習熟度別授業や少人数授業については、どういう生徒に、どのような教員が、どのような授業をするのかを明確にして議論することが大切である。
- ③ 教員自身がやる気を持てる改革プランを検討する。そのためにも、評価して手応えが持てるものは何か？を改革プランの検討の際に考える。
- ④ 同校の特色を活かした（部活動参加率約85%）取り組みとして、生徒指導、学習指導に部活動との連携を促進させる。今後はそのような視点から生徒の組織化や校務分掌のあり方を考える。
- ⑤ やりたいこと、やらなければならないことを決める。それらの中から、新年度の4月からやること、

翌年度からやることを何点か決める。対策の重点化が学校改革のカギとなる。

- ⑥ 活動事項に加え、いつから実施するのかというタイムスケジュール、誰が何をするのかという役割分担や責任の所在を記載した工程表を作成することが次の作業課題である。

④ 県立西日野養護学校

所在地	四日市市西日野町4070-35
交通機関等	近鉄西日野線 西日野駅下車徒歩約10分
電話番号	059(322)2558
FAX 番号	059(322)2559
教職員数	125名
生徒数	202名

1 学校の概要

本校は三重県の四日市市の中心部に位置し、鈴鹿市、亀山市、四日市市、桑名市、いなべ市とその周辺の地域を校区に持つ北勢地区では唯一の県立知的障害養護学校である。約150名が5台のスクールバスを利用して、片道80～90分かけ通学している。

平成14年度以降児童生徒数が急増し、その対応には四苦八苦する日々が続いている。しかしながら、この様々な困難に対し学部を超え、知恵を絞り解決策を考えざるを得ない状況に追いこまれたことは、1つの学校という意識を高め、またより良い教育を目指しての専門性向上に向け結束するという結果を生じ、新しい自主的な活動をも生み出すこととなった。

2 学校、地域、生徒の現状

平成15年度3月に国から「今後の特別支援教育のあり方（最終報告）」が示され、特殊教育から特別支援教育への大きな転換が求められている。しかし、障害のある人に対する理解は、ここ四日市でも進んでいるとは言い難い環境にある。その理解を深めるため、本校でも人的・物理的資源を可能な限り有効活用し、障害のある子どもたち、一人ひとりに合った支援を行うべく努力をしている。日進月歩で進んでいく障害児教育に対して日々、研修・実践・課題の洗い出しを実践しているところである。

平成14年ごろに比べると、今は本校職員の児童生徒の障害に対する認識が研修等によって変わり、パニックを起こしたり自傷や他害をしてしまうケースが少なくなった。また、少しでも、本校の実践を地域でも活用してもらおうとする地域支援の動きも出てきた。

自閉症など「障害児教育では東海一の頼れる学校」を目指して、今回の事業で的確なアドバイスを受けることにより、本校在籍の児童生徒にも、また、地域の学校にも、一緒に学びあうことを通して個々の子どもたちに応じた支援の方法を確かなものとしていきたい。

3 アドバイスを希望する課題

自閉症やその周辺の行動障害について、長く養護学校では教師の経験やカンに頼った手探りの指導も行われてきた。それは、障害に対する研究が日本的レベルで進んでいなかったからである。今、科学的に「障害児教育」を捉える動きが加速し、知的障害という一括りの教育では、子どもたちの個々の障害に対応できないことが明らかとなった。そこで、本校で進めてきた研修の成果を具体的に検証し、本校に在籍する子どもたちへの支援方法について、継続的にアドバイスをいただき、新たな気づきや工夫を行うことでステップアップを狙いたい。県内には自閉症とその周辺の行動障害に対して、TEACCHプログラムを実践したい本校の取り組みに、的確なアドバイスをいただける講師がいない状況である。そこで、この手法の推進校から講師をお招きし、具体的に教材作り、場の構造化、視覚支援、発達診断検査等について教えていただき、実践することで力をつけ、その結果として、本校教員が地域の学校に対して支援が出来るようになり、特別支援学校としての機能を発揮できるようになることを期待する。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 平成 17 年 6 月 22 日 (水) 10:00～14:30 15:00～17:00

イ 場 所 三重県立西日野養護学校教室及びプレイルーム

ウ 参加者

- ・ 児童の学習活動中・・・ケース相談対象児童とその担任
- ・ 放課後の研修(教材づくり)・・・小学部職員対象のワークショップ(他学部希望者も参加)

エ 内 容

- <ケース対象生徒の観察>相談を希望したケースの児童の学習活動の様子を観察していただきながら、担任が直接各場面でアドバイスを受ける。
- <職員研修会>対象児童の主な活動教室にて、教材作りのワークショップを行った。自閉症支援のアイデアの一つとして、物理的構造化、時間の構造化がある。その具現化のために、スケジュールや移動の支援の教材づくりを行った。保健室、プレイルームなどの場所を示すカードや、そのカードを入れるポストを設置した。また、本人の好きなものを励みにスケジュールを組み立てる具体的なアイデアを学んだ。

オ アドバイザーから

(学校側) それぞれの生徒について事前に資料(「個別の指導計画」、ケース資料、VTR)を送付し、具体的な支援方法についてのアドバイスをお願いした。

- 自閉症支援は、個別のオーダーメイドの対応が大事である。本人の理解に応じ、無理をさせずに本人が課題に取り組む環境を整えることが大事である。また、本人が要求を伝えることができるような環境を整える必要がある。詳しくは、別紙資料参照

【アドバイスの要約】

教室の構造化をすすめるために、実際に一緒にスケジュールなどを作成しながらアドバイスを受ける。

- Aのスケジュールは具体物スケジュールで。しかも机の上のかごに常に一つだけ。教員が先回りして用意しておく。
- VHSビデオの外側のケースをポストにして、各教室にカード入れをつくる。各教室のマークが決まっているので、カードのスケジュールが使える子(4年教室では2名)はスケジュールの中にその教室のカードを入れておき、自立移動を促していく。また、登校後のルーティーン(決まりごと)にもカードを利用していく。まず着替えなので、着替えカードをもって着替えスペースに行き、着替えスペースのポストに入れて着替える。着替えが済んだら次のスケジュールは自由、対象児の好きな活動(ある子にとりラジカセ、ある子にとり中庭遊び)のカードをもって移動、その場所にもポストが設置してあり、遊ぶことができる、という流れをつくる。
- カードは手書きや透明テープなどで簡単につくって『こわされても悔しくない』ものでつくっていくというのも大切。
- マッチングに使う写真や絵は本人にとり分かりやすいものを。

(2) 第2回

ア 日 時 平成 17 年 9 月 14 日 (水) 9:30～14:30 15:00～17:00

イ 場 所 三重県立西日野養護学校教室及びプレイルーム

ウ 参加者

- ・ 児童の学習活動中・・・ケース相談対象児童とその担任
- ・ 放課後の研修(教材づくり)・・・高等部職員対象のワークショップ(他学部希望者も参加)

エ 内 容

(7) 活動内容

- <ケース対象生徒の観察>相談を希望した3ケースの生徒の学習活動の様子を観察していただきながら、担任が直接各場面でアドバイスを受ける。
- <ワークショップ>自閉症スペクトラムの生徒への支援のあり方のひとつとして、スケジュールの伝え方を取り上げ、本校で既につくって使用しているものを発表・コメントを受け、さらにケースの生徒に対するスケジュールを7~8人の小グループに分かれて試作した。

(4) 協議内容

- 3ケースの生徒についてのコメントとその質疑、各クラスのスケジュール支援の発表とその質疑・コメント、全体に関する質疑

オ アドバイザーから

- (学校側) それぞれの生徒について事前に資料(「個別の指導計画」「通知表」、VTR、夏季研修会[ケース検討]のまとめ)を送付し、具体的な支援方法についてのアドバイスをお願いした。
- 昨年度よりはずいぶん自閉症の特性に合わせた支援をしようとする姿勢がでてきている。が、一人一人の問題に対する理解の仕方がまだ、職員間で一致しておらず、いわゆる「カン」に頼ることも大きいため、せっかくの支援がフィットしていない状況があるように思う。

カ 職員対象研修会

- (7) 澤先生より生徒観察の感想と本校の取り組みの様子についての全体的感想をいただく。生徒観察についての感想は上記の各担任へのアドバイスをまとめた形で話していただいた。また、先に資料として送っておいた各生徒のVTRより、給食の場面を取り出して、非常な雑音を拾っていること、自閉症の生徒たちにとってこのような環境で食事をしなければならないことがどれほどつらいことかを想像してほしい、と言われた。さらに、スケジュールやワークシステムをつくる際の視点について本校始業式のワークシステムを例にとって説明。「教師」の視点に立った内容ではなく、一人一人の「生徒」がいつ・何をしたらよいかをはっきりわかるように示すことが大切だと言われる。(1, 校歌 2, 校長先生の話...) だけではなく、その時々に参加しているものは何をするのか(1なら立って歌う、2なら座って話を聞くなどを示すということ)合わせて、視覚支援やスケジュール支援のために役立つ資料(各種HP・出版物など)も紹介いただく。

- (4) 昨年度からの職員研修の中で少しずつ広がってきている支援の取り組みの中でスケジュールに絞って各クラスから紹介をする。(5クラス) その一つひとつに澤先生からのコメントをいただいた。既に終わった予定がわかりやすいようにはずす・裏返すなどした方がよいこと、移動を伴う活動の場合にはそれを示すカードなども持っていった方がずっとわかり良くなること、つくったスケジュールがなじまない時にはその原因を考えてフィットするように替えていくことが大切、1日より長い単位の予定を伝えるのには「巻物カレンダー」がわかりやすく使いやすいこと、などの指摘があった。

(7) 実際につくってみよう＝スケジュールワークショップ (50分)

縦割り6グループに分かれてAさんの9月15日(木)のスケジュールを考えた。作成手順は

- ① 先に、本人のスケジュール作成に必要な情報を澤先生とのやりとりから引き出し共有する
- ② グループごとに「1日のスケジュール」「作業学習内のワークシステム」「休憩時間の遊びの選択」について、作成していく
- ③ 各グループ作品発表と澤先生のコメント

* この活動を通してスケジュール作りのコツ、を体験的に学ぶことができた。何が必要な情報であるか・それをどう組み立てていくか、が、非常に具体的に理解できたと思う。これは、ただ話を聞くだけではなくて、実際に支援グッズを作成する活動であったこと、それを、意見の交換しやすい小グループ単位で取り組んだことによるところが大きい。また、適切なアドバイスを必要に応じてタイムリーにさせていただけたことはこの形式での研修に命を吹き込むものであった。

(3) 第3回

ア 日 時 平成 17 年 11 月 8 日 (火) 9:30 ~ 14:30 15:00 ~ 17:00

イ 場 所 三重県立西日野養護学校教室及びプレイルーム

ウ 参加者

- ・ 生徒の学習活動中・・・ ケース相談対象生徒とその担任
- ・ 放課後・・・・・・・・・・ 中学部職員対象のワークショップ(他学部希望者も参加)

エ 内 容

(ア) 活動内容

- <ケース対象生徒の観察>相談を希望した2ケースの生徒の学習活動の様子を観察していただきながら、担任が直接各場面でアドバイスを受ける。
- <職員研修会>自閉症スペクトラムの生徒への支援としてスケジュールの伝え方やコミュニケーション支援を取り上げ、各クラスでとりくんでいる個別のスケジュールやコミュニケーション支援について発表した。質疑の後、アドバイスを受け、さらにコミュニケーション支援のひとつ「PECS」についてどのように取り組むか、実習してもらいながら研修を深めた。

(イ) 協議内容

- 全体的な感想及び2ケースの生徒についてのコメント、各クラスのスケジュール支援、コミュニケーション支援の発表とその質疑・コメント PECS についての実技研修

オ アドバイザーから

(学校側) それぞれの生徒について事前に資料(「個別の指導計画」、ケース資料、VTR、)を送付し、具体的な支援方法についてのアドバイスをお願いした。

- 教室の物理的な構造化や個々への支援などが進んできているが、取り組んでみてどうだったのか、考えてほしい、また再構造化していくことも検討していく必要がある。

カ 職員対象研修会

澤先生より、向日が丘養護学校でのスケジュールやワークシステムの例などの実践ビデオをみせてもらいながら、今日の観察でのコメントをいただいた。その後、スケジュールとコミュニケーション支援についてクラスの取り組みを発表しアドバイスをいただいた。

<スケジュールについて>

- ・ オーダーメイドなので一人一人異なる。一人一人にあわせたスケジュールが取り組み始めてきている。最後に楽しみがある、ということはスケジュールを組む上でとても大切なことである。
- ・ 明日のスケジュールを伝える場合、ことばだけでなく、絵カードとか、具体物など何かで伝える工夫が必要ではないか。1日のスケジュールが?の場合であっても1週間のスケジュールを伝える工夫をすることで、「なにかあるらしい」という認識につながっていくように思う。
- ・ 絵カードや写真で理解できにくいケースは多いと思うので、そうした場合は具体物にもどってとりくんでみる必要がある。まず、わかるということが大切。具体物の方がわかる子は具体物に写真をおいていくというような取り組みが必要。写真や絵カードがうまくいかない場合は段階をおとしてみていくことを是非検討してほしい。

<ワークシステムについて>

- ・ 課題が終わったら、次は何があるのか、示すこと。課題はあるけど終わったら何をするのか、示されていない。示すことで活動につながる。
- ・ 基本は左から右へ。おしまい箱に入れて空っぽになったら終わり、ということを伝えやすくすることが大切である。
- ・ 課題について、完全に一人でできること、先生とすることを分けて取り組む必要がある。一人であるのか、先生に手伝ってもらってするのか、不明確だと混乱しやすい。

- ・ 課題の順番を変えることで、複数の生徒に対してもうまく先生と勉強する時間を作り出して、その場面で新しい課題にとりくむようにしたらよい。
- ・ 大人が関わらなくとも一人できちっとできることが、将来きちっと仕事ができる力につながる、仕事ができる準備をしていくということをおさえる必要がある。
- ・ 離席や取り組まない様子があるなら分量が多くないか、難しくないか、など検討する必要がある。課題を欲張らない、というのが鉄則。
- ・ ワークシステムの中に、たとえばあえて部品を一つ足らなくしておいて、コミュニケーションの課題として取り組むことがあるが、あまりおすすめできない。別の機会にできるのでワークシステムの中では全体の流れ、スケジュールに沿って一人のできることを大切にしたいほうがよい。

<中学部の時期について>

- ・ 感情を育てる時期でもあるのでワークだけでなく、最後に楽しめる活動を準備することで、楽しかった、よかった、感じるようなことを授業の最後に取り組むことが大切。
- ・ 体を動かすことの快感や面白さを感じていく時期でもあるので、朝の学習はワークでの学習よりも体を使った個人技の時間にするなど1時間目の取り組み方の検討が必要である。

<コミュニケーションについて>

- ・ 各クラスのコミュニケーション支援の取組(コミュニケーションブック、PECS、VOCA)の発表の後、アドバイスをいただいた。その後 PECS (Picture Exchange Communication System) について実際に子ども役、先生役をしながら支援方法の実技研修を行った。段階1、2について詳しく教えていただいた。

(4) 第4回

ア 日 時 平成 18 年 1 月 12 日 (木) 9 : 00 ~ 14 : 30 15 : 20 ~ 17 : 00

イ 場 所 三重県立西日野養護学校教室及びプレイルーム

ウ 参加者

- ・ 生徒の学習活動中・・・ ケース相談対象生徒（軽度知的障害および自閉症）とその担任・研修担当
- ・ 放課後・・・・・・・・・・・・ 本校全職員対象の研修会

エ 内 容

(ア) 活動内容

- <ケース対象生徒の発達検査>午前＝軽度知的障害生徒（高等部）に対する K 式発達検査とそのまとめ
- 午後＝自閉症生徒（小学部）に対する K 式発達検査（自閉用アレンジバージョン）とそのまとめ
- <研修会（講座形式）>軽度知的障害生徒の発達検査結果から読み取れることや、それに基づいた支援の方法や卒業までに学校ですべきことは何かを伝えていただいた。

(イ) 協議内容

- 【活動内容】の<研修会>部分に同じ

オ アドバイザーから

2名の児童生徒について事前に資料（「個別の指導計画」「通知表」、生育歴と担任・保護者から見た課題）を送付、軽度の生徒については全体に返し、自閉症の生徒については主に検査方法を教えていただくことをねらいとした。

- 発達検査をしてみることで、一通りそつなくこなせているように見える生徒の強み・弱みがはっ

きり見えてくる。機械的記憶力と考える力・コミュニケーションの力とのアンバランスが浮き彫りになる中で、将来の生活も見据えながら、そこにねらいを絞った取り組みを考えていく必要があるだろう。

- 澤先生のカウンセリングに基づいた本校の教室の構造化を中心に見ていただいた。

個々の生徒たちにあった構造化であるとともに、居住空間であるという観点から見た目がきれいであることも大切な要素であるとの指摘を受ける。

カ 職員対象研修会

(ア) 検査結果からわかること

結果を総合すると IQ60 くらい、15 歳という年齢から考えると発達年齢は 8～9 歳ということになる。

しかし、これは平均値で、子どもを理解する上では平均値にはあまり意味がない。一人の人間としてどこが得意でどの部分に落ち込みがあるのかを把握することで、その人にあった支援や環境、強いては必要な教育課程や集団も考え、準備していくことができる。

たとえば、A さんの場合、機械的な記憶力は高い反面、4 個の積み木をモデル通りの順番でたたく、というような動きの中での記憶の力には落ち込みがある様子が見られた。また、4～6 桁程度の数唱では、そのまま答えるのに比べて逆唱の方が難しかった。これは、短期記憶の弱さを示すものである。これらから、日常生活や学習において、活動の手順を覚えることや、文字の書き順を覚える、などに難しい面があることが考えられる。その支援としては、細かな手順をわかりやすく示した手順書を用意する、など自閉症の方への支援と重なるところがある。

また、財布さがし（財布を落としたという想定で紙面上の決まった範囲を合理的にたどることができるかどうか）や、円系列（決められた紙面の中で大きさを調整しながら描けるかどうか）の結果から、計画性＝つまり段取りを組む力にも弱さが見て取れる。これは、日常生活においては家事をする能力につながっていくもので、トータルで家事を活動に取り入れていけるような、教育の枠組みが必要となってくる。たとえば総合的な学習やクラス編成を工夫することで、自分たちで計画段階から取り組めるような活動が実践できるだろう。

また、おつり（2 けた）を計算する課題では、口頭での質問には答えられなかったが、紙と鉛筆をもらい、式をたてると答えることができたりした。今までの学習の中で机上での計算はできるようになっても、それを使いこなすことに弱さがあるといえる。かけ算の法則を見いだす課題でも、九九はできてその実際の意味理解が不十分であることが見て取れた。これらの結果が示すことは、机に向かったの教科学習が彼女の実生活に生きていない、ということである。たとえば金銭感覚を例にとったとき、正しい計算ができることより、決まった金額でだいたいどのくらいのものが買えるかがわかっていることが将来の生活を助けるであろうし、学校での教育内容を考えるときにもそのあたりを十分意識していく必要がある。

さらに、語彙数が少ないことや 2 つの言葉の共通点や絵の内容を説明する課題で十分な表現ができなかったり、物事を外見のみでとらえている様子もうかがえた。日頃自分の思ったことを、相手にわかるようにうまく説明することは得意でないことが見て取れる。一見、いろいろおしゃべりをして、自分の思いも伝えているようでありながら、実は伝え切れていないことがおそらく多いと思われる。コミュニケーションの力は卒業後の社会生活を支える大きな力である。これをじっくり育てていくことは軽度の生徒たちにとって非常に大切である。そのためには、同じような力を持つ生徒の集団を保障し、行事や生徒会活動など生徒主体の取り組みをじっくり進めていくことが有効である。

もうひとつ、3 つのねがいから人格の育ちを見ることができると。中～高と年齢が高くなってくると、発達のなびは緩やかになる傾向があるが、直接的な「～がほしい」から「仕事をがんばる」「背が高くなりたい」などあこがれの世界への希望や決意が見られるようになってくる。

(イ) 質疑のやりとりとまとめ

社会で生活していくために必要な力としてアメリカ精神遅滞協会がまとめたものを紹介された。改訂版の第10版では社会・実用的な領域においてかなり具体的な内容が盛り込まれていて参考になる。中に、「だまされやすさ」というのがあるが、これを克服する手だてはどうすればよいかとの質問では、だまされない力を育てるのはとても難しい、それよりもパターンとしてどう対応すべきかを覚えることのほうが現実的であろう、とのことであった。

また、金銭の扱いにかかわって、計算が（数の概念の理解が）難しければ、それに替わるものを用意することは、積極的に考えたほうがよい、とのことであった。概念理解を育てることも大切だが、年齢との兼ね合いで中学部後半あたりからは、自分の力を補うための道具などの利用を考えていくことは現実的である。

本人の中でも、できる自分を知り自信をつけることとともに、自分のできないところを受け入れることは大切である。「障害」の学習などでそういった機会を意図的に用意することは大切であろう。

まとめの中で、障害が軽度の人が、「軽度」なのではなく、支援がどれだけ必要かによって、その人が軽度であるか重度であるかを考えるべきである、という話は非常に印象的であった。高等部が教育課程を大きく変えていこうとしているこの時期、その方向性も示唆する、大変有意義な研修となった。

5 アドバイスを受けて一本年度の成果と課題一

(1) 成 果

本校に在籍する児童生徒の障害は主に、自閉症や知的障害と呼ばれる。しかし、誰一人として、同じ障害がある子どもはいない。その一人一人の違いや、個々に応じた支援のあり方を見出すことは並大抵の努力では出来ない。「一人一人のニーズに応じた教育」と、たった数文字で書けるこの教育が意味することが、科学とそれに基づいた技術・知識を駆使した実践の結果であることがわかる。この視点に立ち、本校では2年越しの研究と実践を積み上げてきた。自分たちの目の前にいる言葉を持たぬ子どもたちに正しい支援を行い、自立への道筋を開きたいとの強い教員たちの気持ちが今日の本校を創り上げている。

大きな成果としては、本県での自閉症支援では、本校はどこにも負けない学校であると自負している。地域の学校に講師として、本校職員が呼ばれる件数は30回を超えるに至った。教室の構造化や視覚支援も進み、それが自閉症以外の子どもたちにも分かりやすい教育活動となっていることは大きな発見である。

(2) 課 題

卒業後の自立に向けて、大議論の末、来年度より本校高等部では大きく教育課程を改編し、類型ではない完全コース制を導入することになった。今回の澤先生のアドバイスを受け、この改編を定着させ自立に向け、より細やかな個別指導を行うことをねらいとしているが、保護者とともに創り上げていく視点からはまだまだ、疑問や不安があることは事実である。専門的な知識を分かりやすい言葉に変え、保護者には提示をしていかなければならない。

澤先生の直接の指導を受けたのは特定のクラスであったり、抽出児童生徒であった。そこでの議論や指導法等を礎に、他のクラスや児童生徒への支援につなげていけるような校内システムの構築が必要である。

研修部や地域支援部を中心に特別支援に向けた学校としての進むべき方向性を打ち出していくことが望まれる。

⑤ 伊賀市立柘植中学校

所在地	伊賀市柘植町 1 8 8 1
交通機関等	バス 柘植中学校前下車徒歩 1 分
電話番号	0 5 9 5 (4 5) 2 0 5 9
FAX 番号	0 5 9 5 (4 5) 6 3 7 4
教職員数	1 8 名
生徒数	1 2 3 名

1. 学校の概要

本校は上野盆地の東に位置する農村地域にある。歴史的には旧大和街道沿いにあたり、宿場町として栄えてきた地域である。現在は、東西に名阪国道が通り、大阪・名古屋への交通の便も良く、京都にもJRで1時間で行けるため、柘植駅周辺には新興住宅地ができ、他県からの転入もある。校区は小学校と同一で、生徒たちは小学校からほぼ同じ仲間で9年間を過ごしている。

2. 学校、地域、生徒の現状

本校では、これまで数十年にわたり同和教育・人権教育を中核に据えて教育活動を推進してきた。地域での人権・同和教育もさかんで、近年は町が人権問題地区別懇談会のモデル地区を指定し、住民が事業を考えて進めていくなど、地域をあげて人権・部落問題の解決に取り組んでいる。今年度は県のビーコン事業の2年目でもあり、学校と地域が連携して、さらに人権・同和教育を進めていくことができた。

本校では、これまで大切に取り組んできた同和教育の成果と蓄積を活かしながら、「よりよく生きる」をテーマにした総合的な学習の研究を推進する中で、生徒たちは、学年別テーマ学習や修学旅行・社会見学の取組、サークル活動などにおいて、一人ひとりが自分の目標や課題を持ち、自分の“生き方”を見つめながら主体的に学習を進めてきた。また、学校行事や学年行事、全校解放学習などにおいては、「よりよい学校は自分たちで創る」という意識の高まりとともに、生徒会や実行委員会が中心となって、一人ひとりが生き生きと活動し、互いに助け合い高め合う姿が見られるようになってきている。

3. アドバイスを希望する課題

生徒たちの高まりを受けて、これまでの取組をさらに進めながら、教科学習においても、主体的に学び、助け合い、高まり合うことができれば、学校生活をより充実させることができると考え、昨年度までの2年間、アドバイザー事業のもと中野陸夫先生にご指導いただいていた。

今年度は「人と人がつながり、よりよい社会を創ろうとする人間の育成～主体的に学び、高まり合う集団づくりを通して～」と研究テーマを設定し、「調べる」「つなげる」「討論する」「発信する」「生徒が授業をつくる」をキーワードにしなが、各教科での授業実践に取り組むとともに、自ら学び考える力を支える基礎学力の定着にも重点を置いた取組を進めている。学力保障の観点から授業や学校体制についてのアドバイスをいただきたいと考えている。

4. 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 2005年10月12日(水) 13:30～17:15
イ 場 所 伊賀市立柘植中学校
ウ 参加者 中野 陸夫(大阪教育大学名誉教授)
本校職員

エ 内 容

(ア) 研究授業（3年生家庭科 保育 ディベート「家庭科は男子に必要な授業だ」）

(イ) 学校長及び担当者との打ち合わせ

(ウ) 校内研修会

① 研究授業の反省

- ・ 「家庭科は男子に必要な授業だ」賛成の方の立論が難しく、課題の設定に無理があったのではないかと。「家庭科は必要な授業だ」の方が両方の意見をだしやすかったのではないかと。
- ・ 立論の意見を考える過程で自分の家庭のこと、生活のことを重ねて発言ができたことはよかった。

② 学習意欲、学力の低い生徒にどうせまるか

- ・ 生活の厳しさや、学習がわからないことを出しあえ、支えあえる仲間づくりがまだまだ弱い。

オ アドバイザーより

(ア) ディベートをするときにはテーマを対立軸がはっきりしたものに設定する。

(イ) 職員の異動もあるが、3年目になるシラバスもまだまだ工夫が必要である。生徒が「何これ」と興味をもつキャッチコピーが大切である。

(ウ) 仲間づくりは共同作業、協同学習、生活学習によって培われていく。

(エ) 地区生の学力を保障してはいくには、小中の連携が必要で、大阪の松原では10～20年かかっている。まずは学期に1回ぐらいの研究授業の指導案作成ぐらいから始めてはどうか。

(2) 第2回

ア 日 時 2006年2月8日（水） 13:30～17:15

イ 場 所 伊賀市立柘植中学校

ウ 参加者 中野 陸夫（大阪教育大学名誉教授）
本校職員

エ 内 容

(ア) 研究授業（1年生英語科 少人数学級 Unit10）

(イ) 学校長及び担当者との打ち合わせ

(ウ) 校内研修会

① 研究授業の反省

- ・ 1年生は1学期に比べて良くなったとはいえないものの、まだまだ始めがつきにくく、学習規律を確立させていかななくてはならない。

② 学校評価項目の検討

- ・ 来年度の体制づくりにむけて、今年度の評価項目等を話し合った。

オ アドバイザーより

(ア) 1小1中で仲間関係が固定化しているためか、生徒間で自律できずにもたれあっている関係がみられる。

(イ) 少人数学級を実施するには何らかの工夫が必要であるのと、それを生徒や保護者に理解を促さなくてはならない。

(ウ) 単語テストは3年間で覚えなくてはならない数、1年生の段階での数、それが1時間あたりいくつになるのか、見通しをもたせる必要がある

(3) 第3回

ア 日 時 2006年2月15日（水） 13:30～17:15

イ 場 所 伊賀市立柘植中学校

ウ 参加者 中野 陸夫（大阪教育大学名誉教授）
本校職員

エ 内 容

(ア) 研究授業（3年生数学科 3年間のまとめ 教科係との連携）

(イ) 学校長及び担当者との打ち合わせ

(ウ) 校内研修

① 研究授業の反省

- ・ 2次曲線でグラフ黒板だったので、目盛りを数えることができたが、計算で出せる方法を押さえておく必要があった。
- ・ 学習したことをアウトプットさせるという点で、生徒が説明する活動が取り入れられていることは評価されるが、そのあと教師が同じことを押さえる必要はなかった。

② 学校評価(教職員)の結果から

- ・ 来年度、定数減であることから少人数学級、習熟度別学習、TT等のこれまでのあり方を見直していく必要がある。

オ アドバイザーより

(ア) TTの組み方はうまくいっている例が少ない。教師がどうアプローチするか、整理して取り組む必要がある。

(イ) 少人数学級にすることによって「これができますよ」という意味付けが必要。単純分割ではなく、何かスパイスを加えることが必要である。

(ウ) 習熟度別少人数学級は、数学に多く、国語は少ない。数学は学力差があるので、個別の課題がはっきりしている。

(エ) 抽出的個別指導は授業外の時間に取り組もうという流れが主流になってきている。

5 アドバイスを受けて—成果と課題—

- (1) 研究授業の参観をしていただいたので、子どもの実態を見ていただきながら授業についてアドバイスをいただいた。ディベートのテーマの設定、授業のすすめ方、個別指導や一斉指導など具体的なアドバイスをいただき、教師の力量向上につながった。また、子どもの姿から学習規律の指導の不十分な点も指摘していただいた。外部から客観的、率直な意見をいただくことで校内研修が活性化された。
- (2) 3年目になるシラバスであるが、教職員の異動もあり、その意図するものや意義が職員の意識の中で、薄まってきているところがあったが、生徒に学習の見通しをもたせること、学習意欲を喚起すること、家庭学習の目安とすることなど再確認できた。
- (3) 県外の具体的な取り組みを紹介していただき、職員全員が意思統一をしながらシラバスや仲間づくりなどの取り組みをすすめることができた。
- (4) 基礎学力が定着していない生徒に対して、学力を保障するために昼休みの学習会、個別学級、2・3年生では英数国の教科内選択学習を習熟度別で行ってきたが、選択を生徒にゆだねているため、本当に必要な生徒全員にその機会が保障されているとはいえない。小学校との連携をはかりつつ、わからないことがわからないと言え、それを放っておかないような学習態度を身につけさせていかななくてはならない。来年度、教職員の配置にもよるが、少人数学級の分け方、個別学級等の見直しも含めて検討していかななくてはならない。

6 アドバイザーからのコメント（1年間をふりかえって）

- (1) 研究授業で行われたディベートについては、ディベートそのものが生徒にとっては非日常的なものであるから、どのようなテーマを設定するか、また、ディベートのすすめ方について工夫が必要であることを助言した。特にテーマについては、賛否いずれの立場になっても立論にあまり無理がないものにすべきであることを強調しておいた。

- (2) 学力保障とのかかわりでシラバスを作成して3年目になるが、見通しのある授業、自学自習と結びついた授業にするという本来のねらいに即して、シラバスに記載する内容やシラバスの様式についてさらに改善していくことを助言した。
- (3) 仲間づくりそのものは単独の課題ではなく、生徒たちが心を動かし体を動かしてつくっていくものであり、具体的には共同作業、協同学習、生活学習などをすすめていく過程で教師による適切な指導や助言が必要であることを助言した。
- (4) 学習態度、学習習慣の確立については、小学校との連携を図りつつ、1年生の段階で全校あげでの指導が必要である。
- (5) 分割授業の実施については、課題別、習熟度別など何らかの工夫を加えるとともに、生徒に対してもその意義を十分説明しておく必要がある。
- (6) 学校評価の評価項目は経年的に評価をしていく項目と、その年に重点的に評価をする項目というような工夫をする必要がある。保護者、生徒の協力を得ている項目についてはその結果をかえす。
- (7) 授業の基本形は一斉指導＋個別指導＋一斉指導の効率性、一斉指導の弱点をカバーする個別指導との組み合わせという基本形の中でT Tのよさを活かしていくことが必要である。
- (8) 本校で行われてきた少人数学級、T T、習熟度別指導、個別学級は免許外教員が担当することを含めて教師団の努力によって実施されてきているが、そのことの意義が生徒と保護者に十分理解され、自学自習に結びつくよう工夫する必要がある。

⑥ 松阪市立東部中学校

所在地	松阪市魚見腸 8 8 4
交通機関等	近鉄 櫛田駅下車徒歩 2 5 分
電話番号	0 5 9 8 (2 8) 2 4 2 5
FAX 番号	0 5 9 8 (2 8) 7 7 8 4
教職員数	2 8 名
生徒数	4 0 8 名

1 学校の概要

校区は、櫛田川の下流域を中心とする、自然環境に恵まれた農村や漁村、住宅地などを含む広範な地域からなっている。校区には6校の小学校があり、45町の地域から全員が自転車通学をしている。兼業農家が多く、経済状態は比較的安定している。生活環境においても比較的落ち着いており、三世帯同居の家庭も多く、地域での活動も活発である。

2 学校、地域、生徒の現状

本校では昨年度、県の「セットアップ21事業」を受け、人権劇や人権メッセージを中心に全校で人権フォーラムを開催するなど、これまで校区および校内での人権・同和教育を推進してきた。また、2002年度に文部科学省「学力向上フロンティア事業」の研究指定を受け、2004年度までの3年間を生徒の学力向上にこだわって研究を進めてきた。さらに学力を保障していく上で、授業時間を確保したいという考えに立ち、昨年度より2学期制を導入した。

地域や保護者は学校の取り組みに協力的で、「郷土」や「職場体験」をテーマにした総合的な学習の時間では、地域で子どもたちを育てていこうと温かい支援をいただいている。朝の読書や2学期制の導入も円滑に進めることができた。

生徒たちは、自然に恵まれた落ち着いた環境の中で、学習やクラブ活動に取り組んでいる。3年間のフロンティア事業でのさまざまな実践を通して、「子どもが変わった」と授業研究の参加者から指摘されることが度々あり、生徒の学習に向かう意欲が以前より高まってきたといえる。

3 アドバイスを希望する課題

本校では昨年度まで「学力向上フロンティアスクール」として、文部科学省の研究指定を受け3年間、生徒の学力向上にこだわって研究を推進してきた。特に研究授業や全教師による全教科の公開研究は、授業づくりの研究を進める原動力になっており、生徒の授業に向かう興味・関心の喚起に結びついただけでなく、教師自身の意識改革や教師の資質向上につながった。今後もその積み上げを大切にし、生徒の学力向上に向けての研究や取り組みを継続していきたいと考える。しかし、研究指定を終えたばかりの今年度、今まで中心になり推進してきた教職員の多くが異動した。新しいメンバーを迎え再出発する上で、これまでの取り組みを全員で確認し、さらに継続していくことが必然であるといえる。また、本校が大切にしてきた、「仲間づくり」と「授業づくり」を柱にした「学力向上に向けての取り組み」の中での、「生徒どうしの擦り合わせや、学び合い高め合う力」、「班や小グループを活かした学習」についても引き続き今年度の課題として取り組んでいきたい。そこで、以下の2点を課題として「仲間づくり」と「授業づくり」を視点にした具体的なアドバイスをいただきたい。

- (1) 研究授業と全教職員による全クラスの公開授業を行い、授業実践を通して「学力向上に向けての取り組み」を進める。
- (2) 生徒どうしの擦り合わせや、学び合い高め合う力、班や小グループを活かした学習について研修を深める。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 2005年6月10日(金) 13:00~15:00
イ 場 所 松阪市立東部中学校 校長室および各教室
ウ 参加者 佐藤 廣和(三重大学教授)
岩出 隆(本校 学校長)
加藤聖名子(本校 研修担当)

エ 内 容

- (ア) 本校の概要説明と相談内容について
- (イ) 5限目の授業参観と学校案内
- (ウ) 今後の取り組みについて

オ アドバイザーより

- 生徒の実態について
学校全体が落ち着いている。授業では和やかな中にもほどよい緊張感が存在している。
各クラスとも、学習に関する課題をもつ生徒がいる。

- 次回の訪問について

10月26日に研究授業をする授業者の授業を中心に参観する。

教職員にアンケートを取り、8月11日の校内研修での講演の内容を決める。

第5限の授業を8クラス観察した。全体的に落ち着いた雰囲気の中で授業が行われており、適度な緊張感と、教師との良好な関係を想起させる穏やかな開放感がともに感じられた。

グループ学習では学習内容に応じた工夫がなされていた。気になった生徒を数名指摘した。(アドバイザーより)

(2) 第2回

ア 日 時 2005年6月28日(火) 10:00~12:00
イ 場 所 松阪市立東部中学校 校長室、3年A組教室
ウ 参加者 佐藤 廣和(三重大学教授)
岩出 隆(本校 学校長)
加藤聖名子(本校 研修担当)
崎本 伸也(本校 授業者)

エ 内 容

- (ア) 次回校内研修会の打ち合わせ
- (イ) 3限目授業の参観(3年国語科)と感想

オ アドバイザーより

- 次回校内研修会での講演の内容について

教職員へのアンケートを参考に「グループ学習をどう進めるか」という課題について、教育実践に基づいた講演を8月の研修会で行う。

～3年国語の授業について～

生徒は授業によく集中していた。何人かの生徒による発言をうまく取り入れ、授業を進めていた。余談として教科書にはない高度な内容にもふれ、興味・関心を高めていた。

秋の公開研究会で授業を行う予定の新任教師の授業(中3国語)を参観した。前日の社会見学の疲れが予想される中で、生徒はよく授業に集中していた。授業者の説明は幅広い教養に支えられた豊かな内容であり、生徒の発展的思考を喚起するものになっていた。ノートの取り方も日常的な指導の反映か、きっちりとした生徒が目立った。(アドバイザーより)

(3) 第3回

ア 日時 2005年8月11日(木) 10:00~12:00
イ 場所 松阪市立東部中学校 図書室
ウ 参加者 佐藤 廣和(三重大学教授)
本校職員全員

エ 内容

(ア) 校内研修会での学習会

佐藤廣和先生による講演「仲間を求め合う学習」と質疑応答

(イ) 次回の打ち合わせ

内容 4限目全クラスにおける授業公開
5限目の研究授業および事後研修会

オ アドバイザーより

1. 学習をめぐる現在の議論の問題

○ 「学力低下論」について

基礎学力が低いわけではないのに、「語彙力が少ない」「誤字が多い」「計算能力の低下」などが見られ、実際子どもたちの学力が低下していると感じる。

○ 「習熟」について

ゆとり、総合学習が定着していないのに、新たな習熟論が持ち上がっている。学力の基本的なところ＝『わかる』ことが『できる』こと、という部分が抜きにされ、習熟だけが問題にされている。学校で必要とされる習熟は、本来と違う方向に向かっている。子どもたちの習熟の力が全般的に低下しているのではなく、子どもの興味と学校でやっていることがずれてきている。現在、子どもたちの身のまわりには、気を引くいろいろなものであふれている。例えば、教科書で習う漢字よりも、漫画で覚えた漢字の方がよくできる。学校だけで、基本的な学力をつけられるのか？子どもの習熟が落ちているのではなく、子どもをやる気にさせる学校の方向性にずれがある。

○ 2コブラクダ現象

2コブラクダ現象により相対評価の根拠がくずれる。どちらのコブにも問題がある。
「学習意欲の喪失、低下」は学力形成の2極分解現象を生み出している。

2. 学習の「個人化」と「協同化」

○ 「学ぶ」＝「自己の経験を相対化し、世界を広げながら自己を深める」

学ぶ楽しさ、学び合う楽しさ、自分らしさに気づき発展させる楽しさ

○ サブカルチャー論

学習意欲、感性はむだなことを原動力としている。無駄だと思うところで世界が広がる。子どもたちが身のまわりで感じている疑問、サブカルチャーがたくさんあるが、学校教育とは平行していてなかなか結びつかない。子どもの興味のあるところから学習を始め、深める。世界を広げる手だてはたくさんある。

○ 他の子どもとかかわることが、学力形成にとって大切

学ぶことが自分のアイデンティティーに結びつくと、他者にも興味をもちつながる。他の子どもとかかわることが、自分の学力を高める絶対的な要素であり、この点でも評価すべきである。他の子とのかかわりを持つような学習をすすめる必要がある。

「仲間を求め合う学習」と題して、

(1)学習をめぐる現在の議論の問題、(2)学習の個人化と協同化、(3)グループ学習について問題提起を行った。要点は以下の通り。

(1) 学習をめぐる現在の議論の問題

- ・ 「学習意欲の喪失、低下」は学力形成の2極分解現象を生み出している。
- ・ 学習が個人的な達成とのみとらえられている（能力形成の社会的基盤、効力の社会性）

(2) 学習の個人化と協同化

- ・ 一斉授業の問題点は？日本の一斉授業は時間、空間、教師、教材、学習リズム、生活年齢の同一性が基本
- ・ 「自己の経験を相対化し、世界を広げながら自己を深める」という学びの体験の不足
- ・ 学ぶ楽しさ、学びあう楽しさ、自分らしさに気づき発展させる楽しさの不足

(3) グループ学習

- * 基礎集団的なグループ学習
- * 一斉授業の補完的なグループ学習
- * 個別学習の補完的なグループ学習
- ・ 学習内容との必然的なつながりを持ったグループ学習（変幻自在）

（アドバイザーより）

(4) 第4回

ア 日時	2005年10月26日（水）	10:00～17:00
イ 場所	松阪市立東部中学校	各教室および図書室
ウ 参加者	佐藤 廣和（三重大学教授）	
	県教育委員会研修企画室 辻 喜嗣	
	県教育委員会研修企画室 倉田 容子	松阪市学校教育課 青木 俊幸
	人権・同和教育センター 川島 三由紀	四日市市富州原中学校 新田 英生
	松阪教育事務所 中瀬 鉄夫	市内小中学校 教諭 (68人)
	松阪市学校教育課 中田 雅喜	本校教職員全員参加 (27人)

エ 内容

(ア) 4限目全教室公開授業

12学級（各学年 4クラス）

(イ) 研究公開授業

- | | | |
|--------------|----------|------------------|
| 1年数学科（少人数編成） | 「比例・反比例」 | （授業者：岩本 恵、大西 元樹） |
| 3年国語科 | 「高瀬舟」 | （授業者：崎本 伸也） |

(ウ) 事後研修会

オ アドバイザーより

1. 4限目全教室公開授業について

○ 授業の雰囲気について

生徒と教師の関係がとてもいい。生徒と先生の関係が授業を支えている。東部中の中で教師集団が生き生きとしており、先生たちと生徒たちとの日頃のつながりが居心地の良い教室や学校の雰囲気を創り出していると感じた。授業づくりが学級づくりに結びついている。

2. 研究公開授業について

○ 国語科の研究授業について

授業者はおさえるところはおさえながら、けっこう高度な内容をちりばめて授業を進めている。高校レベルの授業とも考えられる。中学校段階ではその場で解決できなくても心に残るものがあるのではないかと思う。

○ 教材解釈について

授業者は財産・安楽死について考えさせたいとのことだが、著者の生まれた時代・状況等をふまえ、今そのままにとらえることが果たして正しいのか。時代を超えた普遍性もあるかもしれないが、今の子どもの意識と明治の時代の食い違いはないか？身分制度などの時代背景の前提をまず問い直したい。また、文学作品を授業で取り扱う前提をもっと考えるべきである。

○ 文学作品を取り入れた授業でのグループ活動について

グループ活動の意味づけをしっかりとっておかないと、子どもの思いをひき伸ばしていくことができない。言葉にならない子どもの思いやアイデアに筋道を与えること、すなわちビジョンやイメージを与えることも、教師の仕事である。

○ グループでの教え合いについて

1年数学でのグラフを用いての学習で、ドット打ちができながら右往左往している子がいた。この場で何を教え合うのか？ドットを打てなくて線をひっばっている子に対し、子どもたちはどうやって教え合うのか？何をどうつまずいているのかは教師がチェックしていくものではないだろうか？何をどう教えていけばよいのか、子どもはわからない。子どもは教えるプロじゃない。「教え合う力」を具体的にどう作っていくかが今後の課題である。

○ 習熟度について

知らないことを知らないというのは恥ではないというけれど、知識を持つ・持たないがあざ笑いの対象になっている現実がある。そこをほぐしていくのが重要なことである。

一人ひとりが抱える課題をひとからげにしてしまうのが習熟度の問題点である。そこで例えば、数学における補助線の引き方をグループ討論させるとおもしろい等、TPOを考え、効果的にグループ学習を取り入れるとよいのでは？

○ 学びが生活につながるおもしろさ

「なんで数学を勉強しなくてはならないの？」という疑問にどう答えるか？自分も中学時代数学が嫌いだったが、高校の先生との出会いから数学のおもしろさを知った。数学は生活と結びついているんだなあとその時実感した。

○ 学びの力について

発表する力や、交流し合う中で学んでいく力をつけることが、今の日本の教育の課題である。自分の大学の学生が、フランスの小5の子どもたちが堂々と意見を交流し合う姿を見て落ち込んだ。大学でスピーチをさせているが、学生の感想は「80人の面前でのスピーチなので、はじめは『誰がそんなことをするか！』と思ったが、ある子がやったのを見てとてもおもしろいと感じた。ぜひ続けてやってほしい。」というものであった。

○ 今日のような東部中の取り組みをぜひ今後も続けてほしい。

公開研究授業を中心に参観し、公開研究会の討論に参加した。教師集団の協力・支援のもとに教職経験が比較的短い教師がしっかりとした授業実践を行っていることが印象的であった。特に、教師がこだわりをもった教材を深い知識・思索をもって授業を行うことが、学びの意欲を喚起するのに重要な点である。また、＜学習内容と必然的なつながりを持った変幻自在なグループ学習＞に関しても指摘した。

(アドバイザーより)

5 アドバイスを受けて—本年度の成果と課題—

10月の授業研究会を含め、アドバイザーの佐藤先生に4回来校していただいた。初めの2回は普段の授業の様子を見ていただきながら、本校の現状や課題を把握していただき、研究の方向性や適切なアドバイスをいただいた。佐藤先生のアドバイスにより、教科部会で自分たちの課題を出し合い、「佐藤先生への質問」としてアンケートをまとめたうえで、3回目は8月の校内研究会で「仲間を求め合う学習」と題して講演をしていただいた。時間が足りず、十分に質疑や意見の交流が出来なかったのが残念であった。アンケートではグループ活動についての質問が多く、どの教科も学習形態やグループの活用方法について悩みながら試行錯誤している状態であり、教科を超えて意見を出し合いもっと研修を深めたいと感じた。

授業研究会は松阪教育研究会が主催する「まつさか子どもと教育研究会」と兼ねることで、松阪市全体の小・中学校の多数の参加を得ることができた。午後の研究授業の前に午前中に全クラスが公開授業を行い、授業実践を通して全教職員で「学力向上のための取り組み」を進めることができた。また、事後研修会で多くの先生方から貴重な意見を伺い、指導を仰ぐことができた。多くの方からいただいた貴重なご意見や、佐藤先生からの的確な分析やアドバイスを今後活かしていきたいと思う。さらに、たくさんの方から本校の継続した取り組みを評価していただいたことや、「今日のような東部中の取り組みをぜひ今後も続けていってほしい。」と佐藤先生からいただいたお言葉は、本校の教職員を励まし、来年度の方向性を示唆するものとなった。

課題としては、グループ活動の活用について十分に研修を進められなかったことと、授業研究会をどのように継続して進めていくかである。グループ活動の活用は、今年度の反省をふまえ、教科部会を中心に検討し実践を重ね、全体会でも教科を超えて意見を出し合い研究を進めたいと思う。また、授業研究会のあり方も来年度は、「まつさか子どもと教育研究会」が松阪市全体から校区での取り組みに変わることで、今まで以上に校区での連携を深め発展的に進めなければならない。校区の保・幼・小・中が連携して「授業づくり」を進めることで、校区全体で子どもたちを見守り育てていきたいと考える。

⑦ 鳥羽市立鳥羽東中学校

所在地	鳥羽市安楽島町1451-19
交通機関等	バス 鳥羽市民体育館前下車10分
電話番号	0599(26)5001・5002
FAX番号	0599(26)5012
教職員数	28名
生徒数	412名

1 学校の概要

本校は、この鳥羽市の中心部や鳥羽港、景勝「三つ島」などを望める高台に、昭和54年4月、鳥羽・桃取・菅島の3中学校及び加茂中学校の安楽島地区を統合して開校された。その志は高く、21世紀の鳥羽を担う人間性豊かで心身共に健全な生徒の育成をめざした。広く市民の期待を集め、当時としては最新の施設・設備を有した校舎ができあがった。

校区には6小学校があり、保護者の職業は会社員、自営業、観光産業、漁業など多岐にわたっている。

また、離島3地区から合わせて約80名が定期船で通学している。それぞれの小学校区による地区住民の学校教育に寄せる思いは様々であるが、期待と注視は共通している。

2 学校、地域、生徒の現状

生徒数412名。中規模ではあるが、3離島を含む校区6小学校は、それぞれの地域性があり、地理的だけでなく地域文化的にも広域である。また、新旧の町並みが混在しており、校区の地域としては、一体感が乏しいと言えるかも知れない。

学校は、校区の南方に位置しており、遠方生徒は5kmの程の距離を自転車通学している。離島地区生徒は80名ほどが定期船で通学している。

開校以来27年が経過したが、15年ほど前に校則の準自由化の流れがあり、生徒は、のびのびと勉学や部活動に勤しんでいる。「自由と責任」の校風・気風が生徒・地域にも定着してきており、挨拶や学級対抗の合唱コンクールなど、上級生ほど熱心に取り組むという伝統が根付いてきた。

生徒は、明るく快活であるが、反面、じっくり思考し・行動する習慣が未定着な生徒が多いように思われる。

3 アドバイスを希望する課題

- (1) 学校経営品質の手法
- (2) 内部・外部の学校評価の方法

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時 8月1日(月) 午後2時から午後4時
イ 場所 鳥羽東中学校校長室
ウ 参加者 谷口 洋(組織開発総合研究所)
落合 英次(県教育委員会)
鳥羽東中学校 学校評価グループ員

エ 内容

- ・全4回の研修会の進め方についての協議

学校側から、できるだけ研修会の内容を具体的で学校現場の実情に即したものにしてほしいとの要望を申し入れる。

とりあえず、第2回の校内研修会について、「勤務時間の縮減」をテーマにしたワークショップ形式で行うことを申し合わせた。

谷口講師からも、できるだけ身近な問題を取り上げる方がよいという助言をいただく。

オ アドバイザーから

- ・ 学校要覧を元に、学校の概要、校区の様子を話す。
- ・ 今年度の研修体制と研究内容について谷口講師に説明する。
- ・ 「経営品質」というとどうも堅苦しくなるので、できるだけ具体的な学校の現状に即したものを取り扱ってほしいとの要望を出した。
- ・ 谷口講師から、「学校現場は忙しいですか」との問いかけがあり、「勤務時間の縮減」に関わってのワークショップ形式研修会を行うことになった。
- ・ 次回研修会まで日がないので、谷口講師が準備をしてくださることになった。

(2) 第2回

ア 日 時 8月3日(水) 午前9時から午後12時

イ 場 所 鳥羽市商工会議所

ウ 参加者 谷口 洋(組織開発総合研究所)

辻 喜嗣(県教育委員会)

鳥羽東中学校全職員

エ 内 容

- ・ 谷口講師から、経営品質全体についての説明
谷口講師にプレゼンテーションを準備して頂いて、それをもとに研修を行った。
- ・ 全体を4グループに分けてワークショップ形式で協議する
各グループで(司会、発表、記録、タイムキーパー)に分担。
「職務が多忙になる理由」などについて、グループ別に話し合いを行った。
最後に各グループで発表をした
身近な問題なので、各職員活発に討議に参加することができた。
できたら、話し合いの結果を「絵に描いた餅」にならないように具体的に実践していきたいということでまとめに代えた。

オ アドバイザーより

学校を多忙にしている要因とその解決方法について各グループから活発な意見が出た。中学校の特性から、部活動の練習時間が、職員の勤務時間を圧迫している実態が明らかになった。

また、学年会や職員会議などの会議の持ち方や進め方についても今後考えていかななくてはという意見が多く出た。

今回の話し合いをもとに、2学期以降の勤務時間の縮減に少しでも効果の出るような具体的な措置をとりたい。

(3) 第3回

ア 日 時 11月16日(水) 午後3時から午後5時

イ 場 所 鳥羽東中学校会議室

ウ 参加者 谷口 洋(組織開発総合研究所)

辻 喜嗣(県教育委員会)

鳥羽東中学校全職員

エ 内 容

谷口先生、辻先生のお二人が5限目の授業を自由参観された。生徒の様子を直に感じて頂いた後に、研修会を行った。

午後3時から、本校職員の全体研修会を開催した。その中で谷口先生、辻先生にレクチャー・アドバイスをいただいた。

【協議内容】

『学校経営品質』の立場から、本校が実施した「個人目標」の評価について意見を交換しあった。

始め、学校評価研究グループの本校・野村教諭が、一学期から取り組んだ自己評価についてのまとめを行い、情報交換をした。谷口先生から学校評価に関してのアドバイスをいただいた。

本校にとっては学校評価の在り方を検討始めたのは、今年が初めてであり、未熟なままのスタートであるが、評価の観点などについての研修を深め、今後、自己評価や学校評価を定着させていきたい。

後半部分では、谷口先生から経営品質の先進校の取り組みを紹介していただいた。また、県教育センターの辻先生から、資料『Let's Start』を活用し、外部評価の実際や先進校の取り組みを紹介していただいた。

今年度中には、評価シートを作成して外部（内部）評価を実施したいので、大変参考になった。

オ アドバイザーより

- ・ 評価には、二つの側面がある。「成果の評価」と「業績の評価」であるが、個人目標としてあげる場合は、「業績の評価」を目標としてあげる方がよい。「業績」は、自分でコントロールできるものであり、「成果」は、結果として出てくるものである。「成果」を教育の目標として位置づけるのは好ましくないので、評価の対象としにくい。
- ・ 今後は外部評価（第三者評価）が重要である。そのためには、学校側から地域や関係機関に情報の発信を積極的に行うべきである。

(4) 第4回

ア 日時 2月8日(水) 午後3時より午後5時
イ 場所 鳥羽東中学校会議室
ウ 参加者 谷口 洋（組織開発総合研究所）
辻 喜嗣（県教育委員会）
鳥羽東中学校全職員

エ 内容

谷口先生、辻先生の両名にお越しいただいた。平常の授業の後、午後3時より校内全体研修会を開催した。

2月に内部（保護者）評価を実施したので、その結果を本校学校評価研究グループの代表が分析した。それぞれの項目について、職員が熱心に意見交換を行った。

その後、谷口先生から今回の評価の項目や内容、今後のあり方について意見をいただいた。

【協議内容】

10の評価項目は、次の通り。

- ① 楽しそうに学校へ行っている。
- ② 学校で出された課題（宿題）について、自分の力でやりとげようとしている。
- ③ 学校の授業で、子どもに確かな学力がついている。
- ④ 部活動に積極的に参加している。
- ⑤ 部活動は適度に行われている。
- ⑥ 校則は今のままでよい。
- ⑦ 子ども一人一人が大切にされ、認められる学校になっている。
- ⑧ 教職員が子ども一人一人に熱意を持って教育にあたっている。
- ⑨ 地域・保護者の方の協力や場を生かした授業をしている。
- ⑩ 学校は、教育方針や課題をわかりやすく伝えている。

保護者の評価は概ね良好であったが、「学力」の項目で必ずしも期待したような評価が得られなかった。教員の議論もそのあたりに集中した。「少人数教室」の実施などもっと、学校の取り組みをアピールしていくことが大切ではないかという意見も出た。「塾」に依存する社会的な風潮も垣間見えるという意見もあり、学校として「学力の定着」を重要な柱として行くことを確認した。

オ アドバイザーより

今回の調査が「課題領域の認識」という位置づけであり、アンケート結果からは、「保護者の期待感」が表れている。

設問については「オープン」と「クローズ」の2種類があるが、今回は全て「クローズド」になっている。「オープン」は「どうでしょうか」という設問の設定であるのに対して、「クローズド」は「～でなくてはならない」という質問者の意図が明確に出ている設問である。

「学力」については、非常に曖昧な設問になっているので、もう少しふくらませる必要がある。

また、今回、保護者を対象とした調査であったが、同じ内容で生徒や職員にも実施することが必要ではないか。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

昨年度、本校は学校経営品質のモデル校指定を受けた。本校からは10名ほどが、校外研修を受け校内還流を行ったが、職員全体の理解が深まるまでには至らなかった。そのため、今年度は、学校経営品質や学校評価の部分を強化しようと、校務分掌に「学校評価研究グループ」を位置づけた。

本校の「経営品質」「評価」の研究推進の母体となる学校評価研究グループも専門的な知識を持っていなかったため、十分な成果を上げたとは言い難いが、定期的に専門的な見地から外部講師をお招きし、年4回の研修を持つことができたのは大きな成果であった。

その結果、とりあえず1回だけでも保護者への学校評価アンケートを実施することができた。ただ、今

回は、保護者だけに終わっているので、今後、生徒や教職員にも同質のアンケートを採る必要があろう。

調査項目の内容や項目のバランスを検討し、今後一定の期間で継続して調査していきたい。つまり、PDCAサイクルの中でこれらの評価活動が生かせるような活用を考えなくてはならない。

6 アドバイザーから

鳥羽東中学校に伺うと生徒が一人ひとり「こんにちは」と大きな声で挨拶して出迎えてくれました。慣れない訪問者にとってはとても気持ちが和む一瞬です。私もその一人でした。真っ黒に日焼けした生徒の目は輝ききれいでした。

最初に訪問させていただいた夏の暑い日、教頭先生と担当の先生とで本校での学校経営品質の取り組みの打ち合わせをさせていただきました。学校経営品質の取り組みの初期段階では大上段に経営品質の理論を観念的に理解するより、身近な、しかも切実な問題を解決するツールとして活用することが重要です。本校では校長先生のアドバイスもあり、先生方の多忙さをなくするために時間外勤務をいかに縮減するかを取り上げました。

夏休み中の一日、先生方が全員集まり、時間外発生原因分析のためのグループ討議を開いてもらいました。そこで、真剣な討議をしていただき、時間外の発生原因と真の原因を探りました。私自身、先生方との討議に参画して感じましたのは、先生方が実に真剣な討議が自主的に、主体的に行なわれていることでした。そこには学校経営品質に取り組む際の「やらされ感」や「余分な仕事感」がまったく感じられませんでした。本校では身近な問題を取り上げたために先生方が熱心に取り組まれたのだと思いました。

わたくしが「学校経営品質の展開について」の説明をさせていただいた時にも強調したのは次の点でした。「これから皆様にお伝えすることは学校を良くする為の改革の手法です。従って、これは一種の道具ですからうまく使いこなしてください。決して道具に使われないようにお願いします。しかし、使う前に食わず嫌いにならないでください。使ってみないとわからない面があります」と。学校経営品質向上プログラムの取り組みは頭で理解するより実践の中で体得することが活動を習慣化し定着させるには有効と思われます。

学校経営品質では「職員満足なくして学習者満足なし」とよく言われます。先生が仕事に誇りとやりがいを感じてはじめて、学習者に学ぶ楽しみや学校での楽しさを感じてもらえるのです。本校が今年度の取り組みをベースにしてより高い学習者満足と職員満足の向上を目指し学校経営品質向上活動に取り組まれることを期待して止みません。

⑧ 鳥羽市立答志中学校

所在地	鳥羽市答志町 2 2 2 0 - 5
交通機関等	定期船和具より徒歩 20 分
電話番号	0 5 9 9 (3 7) 2 0 3 7
FAX 番号	0 5 9 9 (3 7) 2 8 3 2
教職員数	9 名
生徒数	6 5 名

1 学校の概要

本校は、三重県鳥羽市佐田浜港から約 5 km の北東に位置し、周囲約 24 km、面積約 8 km² の細長く東西にのびた島の中にある。

1 年生 25 名、2 年生 16 名、3 年生 24 名、合計 65 名の生徒数である。地域と連携した取り組みが多く、20 数年続いているものがある。

- ・ わかめの種付けから刈り取りまでの体験
- ・ P T A との草刈り作業
- ・ 小中学校・地域合同運動会
- ・ 島内清掃
- ・ 注連縄体験

そして、今年度新しく取り組んだものに、

- ・ ロープワーク体験
- ・ 地域の青年によるフォークコンサートがある。

どの取り組みも、生徒と P T A と一緒になって取り組み、P T A の方々より、「子どもらと一緒に体験をして、本当に楽しい。わたしらも勉強になる。」という声をいただいている。

2 学校、地域、生徒の現状

歴史的には、いくつかの遺跡があり、縄文式土器、弥生式土器などが出土しており、一部は本校に保管されている。古墳も、17 基が現存し、奈良時代の万葉歌人・柿本人麻呂の歌も残されている。また、鳥羽城主・九鬼嘉隆が関が原合戦に敗れ自刃した首塚、胴塚の史跡もあり、「歴史とロマンの島」でもある。校区は答志・和具からなり、答志地区 345 軒、約 1600 人、和具地区 164 軒、約 670 人で、1 小学校、1 中学校で 1 級へき地指定校区である。南国のカラッとした太陽の輝きに映える集落で、海の澄んだ美しさ、あけっぴろげで声は大きい飾らぬ素朴なあたたかさや人の心を打つ朴訥な誠実さが残っている土地である。

沿岸漁業、わかめ養殖、海苔養殖等が盛んで、沿岸漁業の漁獲高は県下でも有数である。

また、寝屋子制度、朋友会、青年団、消防団等古い伝統を継承しており、それらから学ぶ地域のしきたり、漁法、仲間意識は地域の絆をより一層強く結ぶ大きな役割をはたしている。

しかしながら、都会への憧れと限られた仕事の種類と労働条件の厳しさなどから、島に残る人が減少してきている。生徒は、産業形態の変化や価値観の多様化などによる様々な影響を少なからず受けていく中で、ふるさとに誇りを持ち、ふるさとに足をしっかりつけながら、一人一人が人間としてたくましく心豊かに育っていかれることを望んでいる。

保育所・小・中・高の子どもたちの教育について地域全体が見守っているため、生徒は祖先を敬ったり地域を愛したりしている。素直でおおらかな生徒に成長している。しかしながら、保育所から中学卒業まで同一メンバーで変化のないことは、一方では新しいことを自らの力で切り拓く力や実践力・自己教育力という面での成長をはばんでいる。

3 アドバイスを希望する課題

① 本校は20数年にわたって地元の産業である「わかめ」の勤労生産学習を行っています。その学習は、地域の協力なくしてはできません。わかめの種付け、縄はり等を地元の方々にお世話になっているのです。

しかし、この学習も年数を経ることによって、いわゆるマンネリに陥ってしまっているのではないかという思いが生じてきました。そこで、外部の講師に、地域の産業を、地域の連携のもとで学習していく意義（なぜ地域の産業を学習するのか）や方法（地域との連携の形）をあらためてアドバイスしていただけたらと思います。

② 今年度本校は、「ふるさとの良さを知り、ふるさとを誇りに思う心を育てる」ことを目標としています。この目標の根っこには、中学校を卒業していく生徒が、どんどん島を離れていく現実があります。私たちは、一人でも多くの若者が、この島に残り、島の伝統や産業を受け継ぎ、発展させていくことを願っているのです。

そのために、何が必要かと考えたとき、確かに島の伝統や産業を地域の人の協力で学習することは大切と考えますが、それ以外に、もっと大切なものがあるような気がしてならないのです。例えば、島の路地を歩いているときに、匂ってくるご飯の支度の匂い、そういうものこそが、体や心に入るふるさとではないかと思うのです。

③ 地域との連携とよく言われますが、なぜ地域と連携しなければならないのか、そして地域との連携がうみだしていくものは何なのか、基本的なことを今一度見つめてみたいのです。

また、地域との連携には、様々な事例がありますが、その様々な事例を知ることにより、本校の地域との連携に生かしていきたいと思います。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 2005年8月18日(木) 14:00~18:30

イ 場 所 鳥羽市立図書館会議室

ウ 参加者 小松郁夫(国立教育政策研究所)
梶間みどり(佐賀大学)
本校職員9名

エ 内 容

(ア) 学校の概要と今までの地域連携の取り組み

- ・ 地域の特性と生徒の実態
- ・ 地域依存の取り組みから地域と共同の取り組みをめざすための方策

オ アドバイザーより

(学校側)

- ・ 地域依存の取り組みから地域と共同の取り組みをどう展開していったらよいか。

(アドバイザー)

・ 今、学校が地域とともに生きることが求められている。それには、村おこし・島おこしの発想が必要だ。アメリカのコミュニティースクールから学び、教室を開放するなどして、知恵を出し合っていけばいいだろう。そこから社会の空気を読み、先を読む力がついてくるだろう。これが将来的に仕事をしていける力につながる。

(2) 第2回

ア 日 時 2005年 8月19日(金) 9:00~12:15

イ 場 所 鳥羽市立答志中学校

ウ 参加者 小松郁夫(国立教育政策研究所)

梶間みどり (佐賀大学)

校長 教頭

エ 内 容

(7) 地域連携の教育で目指すもの

(イ) 地域連携で大切なこと

オ アドバイザーより

(学校側)

- ・ 地域連携の教育で目指すものとは？そして地域連携で大切なことは？

(アドバイザー)

- ・ 「生きる力」とは「仕事をしていける力」だと思う。これからの時代は、一工夫することでビジネスとして成功することもある。このような一工夫できる能力を学校で身につけさせて、伝えていけたらいいのではないか。
- ・ 学校を核にした地域づくりを目指すなどの事例からわかるように「地域」は色々である。学校の教師として、地域の思いをとらえ、子どもを育てていくという夢を持っていることが重要である。

(3) 第3回

ア 日 時 2006年2月6日(月) 16:30~20:15

イ 場 所 鳥羽市立答志中学校

答志漁協組合

答志演芸舞台

ウ 参加者 小松郁夫(国立教育政策研究所)

梶間みどり(佐賀大学)

校長 地域各関係者

エ 内 容

(7) 地域とのかかわりについて聞き取り調査

- ・ 八幡神社祭礼に取り組む若者や組合関係の方々の姿をみる
- ・ 漁業を営む島の人たちとの語らい

(イ) 中学校の取り組み(地域との連携)を地域の人はどう評価しているのか

オ アドバイザーより

(学校側)

- ・ 学校と地域との関わりをどう評価するか？

(アドバイザー)

- ・ 地域は、先輩から後輩へとしっかりと伝統文化が引き継がれている。また、地域が一つとなって、祭りをもりあげようとする姿に感動を覚える。
- ・ 中学校は保育所・小学校とも連携し、ともに地域と連携して子育てを推進していることをきいて、校長、教頭の取り組みや考えを学校全体に広め、共有していく活動が次のステップとして求められるのではないかと思う。

(4) 第4回

ア 日 時 2006年2月7日(火) 9:00~12:15

イ 場 所 鳥羽市立答志中学校

鳥羽市立答志保育所

ウ 参加者 小松郁夫(国立教育政策研究所)

梶間みどり (佐賀大学)

本校職員

エ 内 容

(ア) 保育所発表会視察

- ・ 保育所・小学校・中学校の連携をみる

(イ) 島外から通う教師の役割とは

オ アドバイザーより

(学校側)

- ・ 保育所・小学校・中学校の連携の持つ意義とは
- ・ 島外から通う教師の役割とは

(アドバイザー)

・ 子どもの立場から見れば、保・小・中の連携は当たり前だと思う。地域連携、学校間連携は当たり前という視点で、教育活動を見直していく必要がある。

・ 地域と密接な関係を持ちながらも、専門家としての教師としてしなければならないこと、あるいは教師にしか出来ないことを行うことも大切。教師には島にないものを運んでくる（伝える）役割もある。このバランスをどう取るかを考えることが今後重要になってくる。

5 アドバイスを受けて一本年度の成果と課題一

ややもすると、自分たちの進めている地域連携の取り組みが、独善的になり、これでいいのだ、はたまた、これでいいのだろうかと袋小路に入ってしまうがちなところに、アドバイザーの客観的な視点や、世界的な視野からのアドバイスを受けて、改めて自分たちの地域の素晴らしさを認識したと同時に、これからの課題がはっきりした。特に学校において、地域に入っていく職員をどれだけ増やし、かつ、地域の課題と、現在の教育の課題をどうリンクさせていくかの方向性が見え始めた。

6 アドバイザーから —成果と課題—

<成果>

校長、教頭が中心となって、学校内外で地域の声を聞き、人々と幅広く交流する活動が、次第に成果を上げており、人々の理解や支持を得てきている。具体的には、学校の活動に地域や保護者の参加を積極的に取り込み、そうした活動を出るだけわかりやすく、迅速に伝えるなどの広報活動の工夫をしている。また、校長や教頭が積極的に地域や保育所、小学校などとの交流に努めており、日頃から地域連携を学校側からの発信だけでなく、学校への地域のさまざまな教育力の取り込みを図るなど、双方向で取り組んでおり、以下の成果が上がっている。

- ・ 「島の子 (学校だより)」を子どもが各家庭に配布することにより、子どもと地域の人たちとの会話ができて、地域の人たちに学校を理解してもらえるようになった。
- ・ 学校の行っていることを表面的に見る地域の方々に対して、PTA会長を中心とした委員の方々が情報の提供をしてくれるなど、保護者や地域の人たちの学校教育への理解や協力の意識が高揚した。

<課題>

校長や教頭の取り組みが学校全体のものにまだなっていない点など、今後取り組まなければならない課題も明らかとなった。

- ・ 子どもとの関わり方、保護者との関わり方など校長、教頭が若手の教員を育てていくこと
- ・ 地域連携、学校間連携（保、小、中）の視点から教育活動を見直していくこと
- ・ 地域との交流を通して、色々な場面での子どもの姿を見て、子どもを理解すること

そのために、地域との交流を校内研修として取り入れることを提案する。子どもがどのような生活をしているのかを知ることにより教材として使えるものもあると思うからである。

また、地域連携により地域と密接な関係を持ちながらも、専門家としての教師としてしなければならないこと、あるいは教師にしか出来ないことを行うことも大切である。教師には島にないものを運んでくる（伝える）役割もある。このバランスをどう取るかを考えることも今後の重要な課題である。地域の伝統を伝えることと地域の外にあるものを伝えるというバランスから、学校という場でしなければならないことを考えることが教師の役割である。

そして、校長、教頭の取り組みや考えを学校全体に広め、共有していく活動が次年度以降の活動として重要である。

⑨ 亀山市立野登小学校

所在地	亀山市両尾町2124
交通機関等	バス 両尾下車徒歩2分
電話番号	0595(85)0009
FAX番号	0595(85)2952
教職員数	17名
生徒数	117名

1 学校の概要

本校は、亀山市の北部の安楽川沿いに広がる豊かな自然や歴史に恵まれたのどかな農村に位置している。

日本の棚田百選に選ばれた「坂本棚田」や清流「石水溪」などがあり、豊かな自然に恵まれている。しかし近ごろではゴルフ場の開発、高速道路建設の工事に伴い自然が失われてきている。また、生活様式の変化により子どもの生活も変わってきたので、子どもたちは自然の中で遊び、自然と共生するといったことは少なくなってきた。

児童数は年々減少傾向にあり、10年前の約半数に減少している。

2 学校、地域、生徒の現状

(1) 学校の現状

本校では、昨年度、個に応じた指導の充実が、基礎・基本を身につけ、自ら学び、自ら考えていこうとする意欲的な子の育成につながっていくという仮説のもとに、算数科学習を通して、個に応じた指導の研究を深めてきた。そして、自ら学び、自ら考える意欲的な子どもの育成をめざしてきた。

全学年TT体制で授業実践を行った結果、子どもたち一人ひとりにしっかり関わることができ、実態に応じた評価と指導もでき始めてきた。また、子どもたちの興味・関心から教材を考えたり、算数的活動を取り入れたりした結果、子どもたち一人ひとりの学びは意欲的になってきた。

しかしながら、子どもたちのなかには、まだまだ基礎的なことが定着せず、もっと分かりたい、授業をもっと楽しみたいと感じる子がいる。また、他の教科や様々な活動場面においても、自分を出せずに悩んでいる子もいる。

一人ひとりをしっかり見つめ関わっていき、生き生き活動できるような支援の必要性を感じている。子どもたちや保護者にも、きめ細かな個に応じた支援は評価され、継続してほしいとの声も上がっているので、保護者の期待に添うよう日々努力している。

(2) 地域の現状

兼業農家が多く、父母は、大部分共働きである。また、三世代同居の家庭も多く家族の手が行き届いている。

保護者・地域の方々は、学校教育に対して関心が高く、協力的である。6年前に「野登の子どもをはぐくむ会」が発足し、登下校時の安全指導等の教育ボランティアとして学校の教育活動へ協力してくれている。

学校・家庭・地域が一体となって子どもたちの健やかな成長を支援する体制が年々整ってきている。

(3) 児童の現状

本校の子どもたちは、とても素直で人なつこく、明朗である。上級生・下級生が一つになって和やかに活動できる雰囲気ができている。しかし、依存心や指示待ち傾向が強く、粘り強さに欠けるところがある。

また、マスメディア等から得た断片的な知識は多くもっているが、自然とのふれあい体験や家族の一員としての生活体験が乏しいため、自然や人とのつながりをもつことに関して苦手な面がある。

3 アドバイスを希望する課題

(1) 地域の教育力を生かす方策と効果的な活用の仕方

昨年度までは、授業、学校行事等のゲストティーチャーとして、様々な教育活動の場面で地域の方に協力してもらってきた。本年度は、「地域に開かれた学校」にしたいと考え、その一つの手立てとして、地域の方に、教育ボランティアを募った。この教育ボランティアの方を始め、地域の方の学校教育への参加を糸口に「学校を開く」ための戦略をアドバイスしていただきたい。

(2) 校内組織の活性化と充実

本年度は、校内組織が機能的に動くよう校務分掌の改善を行った。しかし、組織が充分機能しているとはいえない。そこで、教職員の個性・能力を伸ばし、創造性を発揮して組織全体の機能性の高まりと活性化が図れ、連携・協働が充実するための方策をアドバイスしていただきたい。

(3) 特色ある教育課程の編成と指導法の工夫

本年度、教育課程の編成の工夫を図った。日課表の改善、教科担任による TT 体制の充実等である。このことにより、個に応じた指導が推進できると仮定したわけである。より効果を上げる教育課程の編成や指導法等のアドバイスをいただきたい。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時 平成17年8月30日(火) 13:30~16:15

イ 場所 亀山市立野登小学校

ウ 参加者 池田 輝政(名城大学人間学部教授)

本校職員(亀山市立野登小学校)

エ 内容

(ア) 学校長・教頭・教諭との協議

① 事前配布の資料をもとに学校の概要、学校の経営方針等の説明

② 事前配布資料・・・平成17年度学校経営方針、本校の学校経営上の問題点、平成17年度の研究推進について、教育実践状況及び課題など

(イ) 協議内容

① 学校経営品質研修

学校経営品質の品質とは何かを考えた。企業では製品のことはあるが、本校では、児童・保護者・地域ととらえている。児童の質を高めるためには、いろいろな経験を与えることが大切であり、本校では、どのような経験の場を設定していったらいいかを話し合った。

(ウ) アドバイザーから

本校の特徴や課題、①地域とのつきあい、②学習指導、③生活指導の3点について

① 地域とのつきあいについては、学校が中心となって地域が広がる教育ボランティアの制度をもっているが、地域と一体化するまでには運営されていない。

② 学習指導については、学級で教師が抱え込む傾向が強いが、算数については4-5-6学年を通した縦割り指導を導入している。これは親の意見を汲み上げたことにもよる。

③ 生活指導については、5、6年生が全体をリードする上で大事な学年となる。地域の人々との触れあい経験(いわば、ののぼり経験)としては、藁ぞうりづくり、陶芸、ペーパークラフト、ネーチャー体験などがある。

「学校経営品質」について

「品質」=「製品の質」という考え方に立てば、教育は「子どもの質」となり、さらに「質」=「学力をつける、人間性の形成」=「確かな学力、豊かな人間性」と展開することができる。

講師役としては、「地域や保護者と協働して、先生方が子どもたちの成長の糧になる野登小経験をいかに演出できるか」というテーマに結びをもっていきたかった。

(2) 第2回

- ア 日 時 平成17年11月7日(月) 13:30~16:30
イ 場 所 亀山市立野登小学校
ウ 参加者 池田 輝政(名城大学人間学部教授)
本校職員(亀山市立野登小学校)

エ 内 容

(ア) 授業参観

① 月曜日5限目の全学年の授業参観

6年算数科のTT授業は、T1が専科担任、T2が学級担任というスタイルの授業であった。教材の工夫をして子どもたちが生き生きと授業に取り組む姿をアドバイザーに参観していただく。

(イ) 学校長・教頭・教諭との協議

- ① 事前配布資料をもとに学習評価、人権集会の説明
② 事前配布の資料・・・評価資料、野登小人権集会

(ウ) 協議内容

① 人権集会について

人権集会のねらいやプログラムの内容・スケジュールなどについて協議した。ねらいは優先順位をつけることの重要性、提案劇は子どもの課題に沿った内容のものにすること、地域への発信などについて話し合った。

② 学校評価について

評価項目は10項目程度が適切であり、学校経営、教育の中身、地域に関する3領域の視点から作成することがのぞましい。また、アンケート内容は専門用語は避けて保護者が回答しやすい表現にするべきである、などについて協議した。

(エ) アドバイザーから

① 人権集会について

プログラムのなかには地域の人や保護者の参加もみられ、よく準備されているという印象をもちました。気になった点は次に述べる二つです。

一つ目は、■集会のねらい■の部分です。以下のように、4点にわたって「ねらい」が述べてあります。学校における人権教育の流れはこの2、3年から始まり、なぜ必要かという論議が十分ではないということでした。「ねらい」が平板に列挙されていることにそれが現れているように思います。そのような状況のときには、「ねらい」に優先順位をつけてみることです。たとえば、「iii保護者や地域への発信と啓発・学習の場づくり」と「ii児童の発表・表現の場づくり」の二つがねらいとして重要であると考えれば、「i仲間の大切さを考えさせる」と「iv地域との交流」はその手段となる水準の内容です。

さらに「ねらい」が上記のように階層化できれば、次に「ねらいの効果」を確認する仕組みを考えてみることです。たとえば、「iii保護者や地域への発信と啓発・学習の場づくり」に対しては「保護者アンケートを実施して反応を確認する」、それから「ii児童の発表・表現の場づくり」に対しては「児童の感想文に成長の記録を残す」というような方法です。このようなことが実践できれば、人権教育に関する活動の成果を学外に発信することが苦にならなくなります。

■集会のねらい■

- i 各学級の仲間作りの課題を明らかにし、発表の取り組みを通して仲間の大切さを考える機会とする
ii 一人ひとりが役割を持ち、生き生きと活動できる発表・表現の場とする
iii 保護者や地域の方々へ、人権教育についての学校の考え方や活動を発信し、共に考えあう啓発・学習の場とする

iv 地域の方々と児童・保護者・職員の交流を深める

二つ目は、下記のような■提案劇について■の部分です。子どもの中にある、きめつけや固定的な見方、たて構造の意識という非を暴く問題を劇のテーマにするというのは、人権イコール自己否定という印象を子どもに植えつけることにならないか心配です。人の良さをみつける喜び、年齢を超えた交流のすばらしさ、などの肯定的なテーマの提案劇を通して、人の多様性を大切にすることを子どもに考えさせる方向もあわせて考えてほしいと思います。

■提案劇について■

野登の児童の中にある課題をテーマに、課題を投げかけるような短い劇にしたい

- ・ きめつけ、固定的な見方 「あの子はあんな子やで」「おまえには言われたないわ」等
- ・ たて構造の意識 「6年の決めたことやで」「6ねんになったら何でもできる!？」

② 学校評価について

アンケートの趣旨、質問項目数(20項目程度)の多さ、学校関係者だけがわかる専門用語でない質問文の作り方、などについていろいろ意見が交わされました。

学校評価のなかに保護者アンケートをどのように位置づけるかが大事ですが、協議の時間が限られていましたので、具体的なアドバイスとしては質問項目数を10項目程度に削ることを提案しました。

(3) 第3回

ア 日 時 平成17年11月22日(火) 13:30~17:00

イ 場 所 亀山市立野登小学校

ウ 参加者 池田 輝政(名城大学人間学部教授)

本校職員(亀山市立野登小学校)

エ 内 容

(ア) 教頭・教諭との協議

- ① 事前資料をもとに学校評価、第6学年国語科学習指導案の説明
- ② 事前配布の資料・・・学校評価アンケート、第6学年国語科学習指導案

(イ) 協議内容

① 学校評価について

学校評価の保護者への質問項目について話し合った。保護者の負担を考えると10項目にまとめたのは適切で、学校評価は質問項目の設定が評価を有意義にするキーポイントになることを確認する。

② 6年国語科学習指導案について

題材のパネルディスカッション、評価規準などについて協議した。指導案の書き方、特に評価との関連から単元目標についての議論が集中した。また、題材パネルディスカッションの難しさ、地域のコーディネーターがいれば話し合いが深まるなどの意見が出た。

(ウ) アドバイザーから

① 学校評価について

学校評価の一環としてのアンケート作成では、その趣旨を全員で確認しておくことがまず大事です。そのためには、保護者アンケートは、学校と地域の信頼と協力関係を築くためのコミュニケーションのツールの一つと考えることです。具体的には、一つひとつの質問を通して学校が何を大切にしているかを日常の言葉で伝え、それに対する保護者の反応や認識を理解するという点にあります。

技術的には、質問項目をつくっていくときに、以下のように学校が伝えたい要点をキーワードにしておき、それを児童でも理解できる言葉で文章表現するワーディング(wording)が重要なポイントです。

キーワード i : 確かな学力の形成

「子どもさんの学力でよく悩むことがありますか」

キーワード ii : 地域とのふれあい活動

「子どもたちが地域のみなさんから学んでいる様子を見聞きしたことがありますか」

キーワード iii : 人権教育

「子どもさんは友達のことを楽しそうに話しますか」

キーワード iv : たてわり班清掃活動

「学校が最近きれいになったと感じたことがありますか」

キーワード v : ふりかえりタイムの充実

「子どもさんは水曜日が5限になって喜んでいませんか」

キーワード vi : 公平な教師の評価

「先生方は子どもさんの学力をよく把握していると思いますか」

キーワード vii : 安全確保

「子どもさんの安全について学校がいろいろ指導していることを知っていますか」

キーワード viii : 教育方針や取り組みの広報

「学校だよりの内容にはよく目を通していませんか」

キーワード ix : 教育支援ボランティア

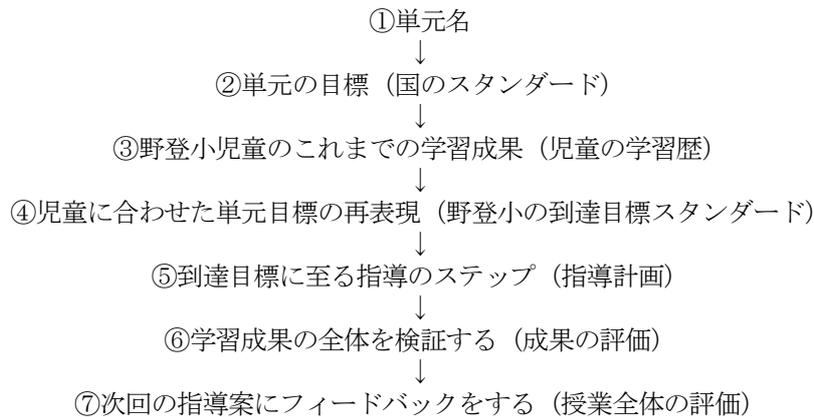
「地域の人や保護者が学校のボランティアとして協力されていることを知っていますか」

キーワード x : 地域への貢献

「地域や子ども会の行事に学校の職員が参加することを望みますか」

② 6年国語科学習指導案について

■指導案の流れ■



議論は、上記の②単元の目標（国のスタンダード）、に集中しました。この②ステップはT教諭案には「単元の目標と評価規準・評価基準」として表現されています。大学における授業改善の方法論を研究している身としては、単元目標（パネルディスカッションを経験し、発表とパンフレット作成をして、指定テーマが効果的に伝わるようにしよう）が評価（指導要録の観点別評価）に直結している点が気になりました。（中略）

「目標とは子どもと共有してともに達成するための言葉」であると思います。教師が達成しようとする目標を子ども一人ひとりが自分の学習目標として受け容れるようにする努力がすべての出発点になります。教師は自分の指導方法と子どもの集中力の相乗作用として達成された目標を授業の最後に確認する責任があります。その確認の方法は直観力も含めてさまざまです。教師にとって観点別評価とは子どもの現在の学力を診断する情報を整理する枠組みですから、子どもに対する学習目標として使うことはできません。たとえば、医者が患者を診断するカルテの情報は、病気をなおそうと努力する患者の目標として使わないのと同じようなものです。

(3) 第4回

ア 日 時 平成18年2月6日(月) 13:30~16:15
イ 場 所 亀山市立野登小学校
ウ 参加者 池田 輝政(名城大学人間学部教授)
本校職員(亀山市立野登小学校)

エ 内 容

(ア) 学校長・教頭・教諭との協議

- ① 学校組織、学校評価、特色ある学校づくり、セクシュアルハラスメントの研修内容の説明
- ② 事前配布の資料・・・学校組織表、学校評価結果の保護者への説明文、セクシュアルハラスメント資料、特色ある学校づくり報告文

(イ) 協議内容

- ① 学校組織について
学校の活性化に繋がる組織づくりのための検討を行った。
- ② 学校評価について
学校評価の結果分析について話し合った。保護者には概ね評価していただいたが、来年度はもう少し高い目標を掲げて取り組みたい。
- ③ 特色ある学校づくりについて
人権学習と確かな学力の定着のための取り組みをもう少し詳しく記述すべきだとの意見が出た。
- ④ セクシュアルハラスメント研修について
資料を基に研修した。各自のセクハラ観について先ず話し合った。どんな場合も相手に不利益を与えた場合訴えられるとのこと。その中で、子どもに被害が及ばないようにするには、日頃よりしっかりと観察することであるとのアドバイスがあった。

(ウ) アドバイザーから

- ① 学校評価について
保護者アンケートによる学校評価はアンケート項目がわかりやすく設計され、結果の公表についても簡潔なデータで表示されていました。各項目の評定結果については、次年度の活動目標、それから今年度の活動成果のデータとしても有効に活用してください。
- ② 特色ある学校づくりについて
特色ある学校づくりのレポートについては大変読みやすくまとめられていました。次年度においても、活動目標(計画)→活動プロセス(実践)→活動成果・課題(評価)の流れと循環をチームで常に意識して、この動きをとめることなく、これからも前進してください。

5 アドバイスを受けて一本年度の成果と課題一

アドバイスを希望していた課題以外にも、アドバイザーに訪問していただいた時の本校の課題を協議内容として提案したため、課題が紆余曲折したが、一貫してより良い学校経営、より良い学校づくりのためのアドバイスいただいたことは本校にとっては本当にありがたかった。

(1) 成 果

- ア 学校経営の柱が焦点化でき、全職員が共有することができた。
イ 学校を開くためには、もっと行事等を企画し参加を募ることから始めることを確認し合えた。
ウ 学校評価アンケートの意義、質問内容、評定結果の生かし方等をしっかり研修できた。

(2) 課 題

- ア 組織として、教職員一人ひとりが学校経営に参画しているという意識が低い。
イ 保護者や地域の人々の期待や要求を把握しきれていないので、話し合いの場づくりの工夫が必要である。
ウ 学校目標を到達目標的な表現に改めた方がよい。
エ 保護者や地域と協働して、子どもたちの成長の糧になる野登小経験をいかに演出するか。

⑩ 伊勢市立早修小学校

所在地	伊勢市常磐3-10-19
交通機関等	バス 南宮町下車徒歩4分
電話番号	0596(28)2765
FAX番号	0596(28)2765
教職員数	13名
生徒数	237名

1 学校の概要

本校は伊勢市の中心部に位置し、学校周辺には伊勢神宮外宮・市立図書館等福祉施設・古くからの商店街などがあり、落ち着いた雰囲気の中にある。また、早修学校として明治15年の開校以来、長い歴史をもっている。現在の校舎は平成12年に建てられ、太陽光発電、バリアフリー等の施設・設備が先進的に整備されている。

2 学校、地域、生徒の現状

本校の周辺には、市立図書館等福祉施設があるが、校区は大きく商業を中心とする区域と住宅地とからなっている。

地域は高齢化・少子化が進み、本校の児童数の推移を見てみると、昭和48年頃には、800名近くの児童が在籍していたが、その後減少の一途をたどり、現在はその30%程度となり、地域の高齢化現象が顕著に現れていることが分かる。地域の人たちの学校に対する思い入れは強く、学校開放デーや行事への参加率も高い。また、『早修っ子共育会』が組織され、「校区内安全パトロール」や「夏休みラジオ体操」の実施等子どもたちの健全育成に多大な協力を得ている。

しかし、保護者の教育に対する価値観が多様化し子育てについて課題が出てきている。基本的な躰が身につけていない児童や我慢のできない子など、生活指導上に問題が表面化している。また地域の人たちも児童に挨拶や声掛けはできても、注意したりしかったりすることは、なかなかできなくなっている。

3 アドバイスを希望する課題

本校の児童は、保護者の職業や価値観により基本的な生活習慣の定着に差が大きく、学習意欲にも影響している。そんな中、児童自ら学ぼうとする態度の育成と個性を發揮できる体験や活動の場の充実に努めるため、子どもが楽しく取り組める英語活動や、地域との結びつきを深めるため、総合的な学習の時間において地域を扱った活動を計画し「特色ある学校づくり」を目指している。

(1) 英語活動の取り組みとしては

- ア 「英語の得意な教員が教える」のではなくて、すべての教員が教えられるようにする。
- イ 歌やゲームを中心として子どもたちが楽しく取り組めること。
- ウ 国際理解の基盤であり、集会等も計画していくこと。

(2) 地域や家庭との連携として

- ア 学習の題材に、地域の自然に触れたり遊んだりできるようなものや場所を設定するなど、地域の自然・産業・歴史・伝統などが学べるように教材を工夫したり、総合的な学習の時間にそれらの内容を取り入れたものを扱う。
- イ 上記の時間や学校行事等に地域の人材の活用を図る。
- ウ 学校開放デー、授業参観を定期的実施し、学校行事とともに積極的参加を呼びかけ信頼する学校

づくりに努める。

エ 「婦人会」「町内会」等の協力を仰ぎ、登下校の安全や危険箇所点検など子どもの安全・安心に努める。

等を考えているが、更に望ましい「特色ある学校づくり」「地域との連携」の方策や計画事項の効果的な進め方のアドバイスを頂きたい。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 平成17年8月5日(金) 13:30~16:30

イ 場 所 : 伊勢市立早修小学校

ウ 参加者 : 福本みちよ [山梨英和大学助教授]

伊寿秀夫 [伊勢市立早修小学校長]

大場 治 [同校 教頭]

山川敬子 [同校 教諭]

森 清美 [同校 教諭]

中馬美子 [同校 教諭]

深川昭久 [同校 教諭]

野村恵子 [同校 教諭]

谷口文子 [同校 教諭]

世古行男 [同校 教諭]

藤本里佳 [同校 教諭]

田中美晴 [同校 養護教諭]

坂本有見 [同校 常勤講師]

エ 内 容

(ア) 活動内容

- ① 校長及び教頭との打ち合わせ
- ② 職員との全体協議と小グループに分かれての現状分析

(イ) 協議内容

① 英語活動について

早修小学校の進めていこうとしている英語は、中学校で行われている英語学習ではなく英語活動である。

② 地域との連携について

学校開放デーを実施したり、早修っ子共育会などで地域に学校のことを相談したりしている。

③ SWOT分析より

人材、施設・設備、校区の環境がある程度、整っている。

(ウ) アドバイザーから

(学校側)

- ① 英語活動はコミュニケーションをとるツールとして英語をとらえて進めていくようにする。
- ② 地域との連携では、連携の中味を明確にし、学校サポーターの基盤作りを進めていくようにする。
- ③ 支援課題への取り組みは
 - ・ 学校が持っている資源を見つめ直す (学校の環境分析)
 - ・ 職員間の協働関係を確立する (共通認識をもつ)
 - ・ 組織としての力を発揮する (全ての職員が「マネジメントマインド」をもつ) で進められる。
- ④ SWOT分析の結果として、人材や教材、学校の施設は豊富であるが、どのように使っていくかを考えていく。また、弱みとして学校内外のコミュニケーション不足がみられる。
- ⑤ SWOT分析から保護者・児童を外部ととらえるのか、内部ととらえるのか共通認識をもつことが大切であることが見えてくる。また、保護者・地域の人も細かく分類することも、これ

からの戦略を立てる上でなくてはならないことである。

⑥ SWOT分析から、危機感を持ち、存在意義、重要事項を明確にし、戦略を立てていく。

(アドバイザーのコメント)

「特色ある学校づくり」の観点から進められている英語活動及び地域連携のあり方の見直しについて、SWOT分析を用いて検討した。その結果、いくつかの課題が見いだされたが、中でも教員間の協働関係づくりが重要と思われる。この点を考慮しつつ、英語活動の改善策を進めていくことが次回の課題であろう。

(2) 第2回

ア 日 時 平成17年10月18日(火) 13:30~16:30

イ 場 所 伊勢市立早修小学校

ウ 参加者: 福本みちよ〔山梨英和大学助教授〕

伊寿秀夫〔伊勢市立早修小学校長〕

大場 治〔同校 教頭〕

谷口文子〔同校 教諭〕

山川敬子〔同校 教諭〕

藤本里佳〔同校 教諭〕

森 清美〔同校 教諭〕

田中美晴〔同校 養護教諭〕

野村恵子〔同校 教諭〕

坂本有見〔同校 常勤講師〕

エ 内 容

(ア) 活動内容

- ① 校長との打ち合わせ
- ② 職員との全体協議

(イ) 協議内容

- ① 英語活動を続けていくための姿勢・考え方(マニュアル化されたものにならないために)
- ② 早修小学校としての英語活動のゴール設定
- ③ すぐに取り組める具体的な活動事例の紹介

(ウ) アドバイザーから

(学校側)

- ① 早修小学校として、地域の特性等も考えながら、望ましい英語活動のゴールを設定していくべきであるが難しい。
- ② 学校として、壁面掲示の工夫活用・英日併記など簡単なことから学習環境作りに取り組んでいく。
- ② ゲームや歌の位置づけ、長いスパンでの英語学習(単元作り)の再考を行う。

(アドバイザーのコメント)

「楽しい英語活動」のあり方を検討した。早修小学校では、すでに英語活動が実施されており、現在はより充実した活動を実施するための手法が模索されている。今回の研修では、早修小学校としての着地点(目標)を何処に設定するかが最大の課題であり、それが明確になれば目標達成に向けた活動の実施形態は多様であることを強調した。

(3) 第3回

ア 日 時 平成17年12月14日(水) 13:30~16:00

イ 場 所 伊勢市立早修小学校

ウ 参加者：福本みちよ〔山梨英和大学助教授〕

伊寿秀夫〔伊勢市立早修小学校長〕

大場 治〔同校 教頭〕

山川敬子〔同校 教諭〕

森 清美〔同校 教諭〕

深川昭久〔同校 教諭〕

野村恵子〔同校 教諭〕

谷口文子〔同校 教諭〕

藤本里佳〔同校 教諭〕

西山 武〔同校 教諭〕

田中美晴〔同校 養護教諭〕

坂本有見〔同校 常勤講師〕

大屋真一〔同校 臨時講師〕

エ 内 容

(ア) 活動内容

- ① 5年2組総合的な学習の時間（英語活動）の授業参観
- ② 授業反省
- ③ 今後の早修小学校の英語活動について
- ④ 特区の学校の英語活動の取り組み例紹介

(イ) 協議内容

- ① 本日の授業の基本的な考え方
ホームルームティーチャーは英語のみを話し、TTが日本語訳をした。スラング表現「yummy」「cool」も意識して取り入れ、語彙を増やしていく。文法重視ではなく、表現を広めていく。
- ② 本日の授業を振り返って
 - ・ 教師や初対面の人にインタビューできて、児童の自信にもつながった。
 - ・ ボディランゲージや誉め言葉が豊富であった。
- ③ 今後の英語活動に向けて
英語の仮名表記の是非や教室掲示や授業のチャートの工夫を考えていく。

(ウ) アドバイザーから

(学校側)

- ① 本日の授業について
英語の質問に対する返答では児童が答えられる環境を整えておくこと。授業を一つのストーリーで展開するように工夫すると、児童に内容が入りやすい。
- ② 早修小学校の英語活動の着地点（目標）を（英語活動仮名表記の議論も含めて）決めることが、第一であり、そこから早修小学校としての英語活動が始まる。

(アドバイザーのコメント)

5年生の英語活動の授業研究を行い、それをもとに「楽しい英語活動」のあり方についての研修会を行った。活動内容を見ていると、前回の研修内容が活かされているように感じられた。授業研究をもとにした今回の研修会では、大小様々な意見が出されたが、結論的にはやはり早修小学校としての英語活動の着地点（目標）をどこに設定するかが最大の課題であり、それが明確になれば目標達成に向けた充実した活動の展開が可能であることを強調した。

(4) 第4回

ア 日 時 平成18年2月15日（水）13：30～15：30

イ 場 所 伊勢市立早修小学校

ウ 参加者：福本みちよ〔山梨英和大学助教授〕

伊寿秀夫〔伊勢市立早修小学校長〕

大場 治〔同校 教頭〕

エ 内 容

(ア) 活動内容

- ① 今年度の取り組みのまとめ
- ② 来年度にむけての話し合い

(イ) 協議内容

- ① 今年度の取り組み
 - ・ 英語活動の取り組みを、全職員が意識するようになった。
- ② 今後の英語活動に向けて（以下の3本柱で考える）
 - 英語活動自体をどう指導していくか。（子どもベース）
 - 英語活動の教員組織をどうしていくか。（教員組織）
 - 地域とのまじわり

（上記の具体的な内容は以下の通り）

- ・ 子どもは、英語活動において、楽しむことを求めているが、教師は授業の進め方を探っている段階であり、教員それぞれが、指導法や英語活動に対する思いをオープンにする場が必要である。また、地域や保護者の中で、堪能な方を巻き込んでいくことも考えていく。
- ・ 活動には子どもたちに達成感が必要である。その具体的な例として文化祭での英語活動の発表の場を設定するなどがあげられた。1年の前半の取り組みを文化祭で、後半の取り組みの発表の場も考えていく。
- ・ 新年度に向けて、3月後半から4月末までに英語活動の準備をしておくこと。そして、授業の進め方の初級、中級、上級を示し、教員が選んで取り組む。1ヶ月毎～2ヶ月毎に報告会を定期的に行い、軌道修正をして高めあっていく。（職員のスキルアップ）
- ・ 授業展開をパターン化して、職員に示し、授業に対する抵抗感を少なくすることも考えられる。

5 アドバイスを受けて—成果と課題—

(1) 成 果

- ア SWOT分析により、学校の諸活動の基本となる本校のもつ強みと弱みが分かった。
- イ 英語活動について、話し合いを何度も行い、早修小学校の英語活動について、全職員が切実に考えるようになった。また、助言を受けての英語環境作りに取り組むことができた。
- ウ 総合的な学習の時間（英語活動）の授業研究を行い、英語活動の授業を具体的にとらえることができた。

(2) 課 題

- ア 英語活動に対する具体的な目標・指導法・指導計画など共通認識を更に図ることと教材の整備。
- イ 英語活動に対する意欲を高め、積極的に授業を行い、研修を深めていく。
- ウ 地域の人材を学校に取りこみ、学校の教育活動をより多様なものに深めていく。

6 アドバイザーから—本年度の成果と課題—

(1) 本年度の活動について

英語活動を通じた特色ある学校づくりを主たる支援課題として、早修小学校に対する学校経営サポート事業がスタートした。

第1回目研修会では、「特色ある学校作り」の観点から進められている英語活動及び地域連携について、SWOT分析を用いて学校の現状を分析した。その結果、いくつかの課題が指摘されたが、特に教員間の協働関係づくりが重要であるという認識に至った。

第2回目研修会では、「楽しい英語活動」のあり方について検討した。早修小学校では、すでに英語活動が実施されているが、特に来年度以降は英語の得意な教員が教えるのではなく、すべての教員が教えられるようにしていくことが大きな目標となっており、より充実した英語活動を展開するための手法が模索されている。第2回研修会では、早修小学校としての英語活動の着地点（目標）をどこに設定するかが最大の課題であり、それが明確になれば目標達成に向けた活動の実施形態は多様であるということ 강조했다。しかしながら、教員間には目標設定の困難さを感じている様子が伺われ、まずは今すぐに始められることを見つけて取り組んでいくことを指導した。

第3回研修会では、5年生の英語活動の研究授業が行われ、それをもとに「楽しい英語活動」のあり方についての研修会を行った。第2回研修会以降の学校・教員の取り組みを見ると、前回の研修会での研修内容が活かされているように感じられた。研究授業をもとにした研修会では、大小様々な意見が出されたが、結論的にはやはり早修小学校としての英語活動の着地点（目標）をどこに設定するかが最大の課題であり、それが明確になれば目標達成に向けた充実した活動の展開が可能であることを強調した。

第4回研修会では、本年度の活動内容及び研修成果をもとに、来年度の研修の在り方について校長、教頭、及び研修主任と協議した。

(2) 成果と課題

① より充実した英語活動の展開に向けて

来年度以降、すべての教員が英語活動に取り組んでいくことになるが、そうした活動を単年度計画で終わらせず学校の特色にまで発展させていくためには、活動自体の充実を図ることはもちろんであるが、それ以上に指導者側の研修が重要になってくる。英語力だけでなく、学問としての英語ではない英語活動を展開していくためには、柔軟な発想力が求められる。そうした指導力の育成を重視した研修を、今後可能な限り多く組み入れていく必要がある。

② 特色ある学校づくりのために

本来、多様な要求に応えながら質の高い教育を行うという取り組み自体に独自性や個性が生まれるものである。「個々の学校が力を十全に発揮すること＝特色ある学校づくり」といえる。学校の置かれている環境（地域、自然）、保護者や地域住民の状況、子どもたちの状況、教員集団の状況など、自校の学校内外の環境を分析し、その強みを生かして、他校とは異なる、わが校ならではの特色づくりが期待される。

そのためには地域と一体となって学校づくりを進めることが重要であるが、早修小学校の場合、これまで以上に地域を巻き込んだ教育活動の展開が望まれる。

⑪ 伊賀市立花垣小学校

所在地	伊賀市予野 9 6 6 9
交通機関等	バス 花垣支所下車徒歩 1 分
電話番号	0 5 9 5 (3 9) 0 3 5 4
FAX 番号	0 5 9 5 (3 9)
教職員数	8 名
生徒数	4 5 名

1 学校の概要

児童数 45 名、2・3 年、4・5 年の 2 学級が複式学級の小規模校である。伊賀市の西端に位置し農村地域である。校区は 4 つの地域からなり、それぞれの地域が離れているため、3 地域の児童はスクールバスで通学している。近くに名阪国道が通っているが、公共交通機関は不便でバスは 1 日に 3 便しかない。

また、4 年前は 1 学年 1 学級だったが、今では 2 複式学級となるなど、年々児童数が減ってきている現状である。そして、校区再編により今後は廃校合併になる予定である。

2 学校、地域、生徒の現状

子ども達は素直で穏やかな子が多い。また、少人数での学校生活は一人ひとりに課せられた責任が大きく、特に高学年になると、自分達がやっていかなければという起動力が自然に身についている。しかし、少人数での生活に慣れ、大勢の中に入ると気後れしてしまう。また、ほとんどの子が保育園の頃から一緒に過ごしているため、お互いの言いたいことを察することにより、単語で話をしたり、最後まで文で話さなくても相手に気持ちが伝わることもある。一方で、学年が大きくなってくると、本当に言いたいことを伝えきれないまま、理解され日々を過ごす子どももいる。馴れ合いの穏やかさではなく、自分の思いを自分らしく表現し、伝達し合える力（コミュニケーション能力）を高め、一人ひとりのよさやお互いのちがいを認め合える集団を育てることが大切であると考えます。

しかし、今年度 2 複式学級になったため、学力保障に向けて芸術教科（音楽・図工・体育）以外の教科は、できるだけ 1 教科を 1 学年で 1 教師が担当するようにカリキュラムを組んだ。いわゆる教科担任制になっている部分が多い。まだ自分の思いを整理できず、伝えきれないこの年代にこのカリキュラムを組むことが適切であるのか、もう一度見直さなければならない。

3 アドバイスを希望する課題

- (1) コミュニケーション能力を高める手だて
- (2) 複式学級のカリキュラムの組み方

4 訪問記録

(1) 第 1 回

ア 日 時 6 月 2 9 日 (水)
イ 場 所 校長室・図書室
ウ 参加者 校長 亀井直文、 教頭 中島仁司、
教諭 木下真砂子・奥知由起・久保田彰・和田真一・安本修子
養護教諭 堀川明美 講師 橋本真美

エ 内 容

(ア) 活動内容

- a 学校長及び教頭との打ち合わせ（学校の概要説明）
- b 体育館における児童とひまわり作業所との「ひまわりコンサート合同練習」の参観

- c 学校長との打ち合わせ（学校の概要説明と相談内容）
- d 職員の全体研修会での助言（「複式カリキュラム」と「コミュニケーション能力」）

(イ) 協議内容

- a 複式カリキュラムについて（よい面・不都合な面）
- b コミュニケーション能力について（学級の実態から）

(学校側)

- a 複式カリキュラムについて
 - * 下の学年に担任が多くかかわれるようになっており、理にかなったカリキュラムである。
 - * 生活集団としての学級集団をきちんと持つことをベースに、教科については学習内容に応じて弾力的に編成すればよい。
 - * 教科によってはブロックカリキュラムも組むことができる。（休憩時間・2限続きで行う）
 - * 45分授業ではなく、モジュールも使うことができる。
 - * 理科については、観察・実験の仕方を整理し焦点をあてて指導していく。
 - * 時間割の組み方は教え合い・学び合うことができ、これでよい。
- b コミュニケーション能力について
 - * 教師が共通認識を持つことが必要。
 - * 各学年の目標をつくり、全校で取り組む。
 - * 基本的な話し方を授業の中で身につけていく。
 - * 具体的に話す機会をつくる。（朝・帰りの会、集会、社会科や総合など）
 - * コミュニケーション能力は社会に対する働きかけであるため、それによって何かが変わるという経験を積ませることが大事。
 - * 少人数だからこそ全体で取り組みやすい。

オ アドバイザーより

6月29日に行われた第1回の学校訪問においては、ひまわりコンサートに向けた全校合唱練習を参観し、その後校内研究会を行った。合唱練習を拝見し、大きな声で伸びやかに歌う子どもたちに接し、大変感銘を受けた。これは、音楽を中心とした歌唱指導のみならず日頃の児童に対する全校的な指導がうまく機能しているからであろうと考えられる。

校内研究では、1教科を1学年で1教師が担当できるように編成したカリキュラムについて、また、児童のコミュニケーション能力を高める手だてについての、2つの話題について各学年の現状をご報告し、討議を行った。

(ア) カリキュラム編成について

いわゆる教科担任制になっているカリキュラムにおいては、1人の学級担任が全ての教科を指導するスタイルでは実現可能である柔軟な時間割編成ができなくなること、また、各教科における、休み時間などを活用した個別指導などが行き届かなくなることといった問題点が提示された。しかし、学年間の組み合わせを固定せず、例えばある教科では、2、3年生合同、別の教科では3、4年生合同というように学習集団を編成することによって、児童どうしの学び合いや教え合いがよくなされているといった利点も紹介された。

この形式でのカリキュラムにも、いくつかの問題点が指摘されたが、生活集団である複式学級のメンバーを固定し、学級担任が全ての教科を指導するスタイルにおいても、当然有利な点と不利な点が出てくる。私どもとしては、生活集団をベースにしながらも学習集団を柔軟に編成しながら授業を行うことが望ましい学習形態であると考えており、その点で貴校のカリキュラムはよく練られているという印象を持っている。そのため、当面はこの形態のカリキュラムを実施する方が望まし

いと考えている。しかし、時間割変更の余裕がないなどの問題もあるため、モジュールの導入や、2時間単位の時間割編成などの工夫も考慮されてもよいのではないかと考えている。また、特に問題となっているのは、理科においてであるため、理科の実施形態については、さらに議論を深めたいと思う。

(4) コミュニケーション能力について

児童は小規模校ゆえの少人数での生活に慣れているため、コミュニケーション能力を高めることが大切であると考えていること、および、これまでの校内研究で扱われてきた内容について紹介があった。

今後、この研究課題を設定するのであれば、漠然と「コミュニケーション能力の育成」を目標とするのではなく、貴校が目指す「コミュニケーション能力を身につけた子ども像」を明確にし、学校全体としての目標及び、発達段階や各教科における学習内容等を考慮した、学年ごとの細分化した目標を設定し、それを実現するための手だてを具体的に検討していく必要があると考えている。特に、手だてについては、小規模校および複式学級ゆえの利点を活用したものを検討する必要がある。

そのために、7月の中旬に学校訪問を行い、1日掛けて生活および学習の様子を参観させていただいたあと、どのような力を身につけさせるべきかを検討し、8月の校内研究会で具体的な目標の設定と、その実現のための手だてを検討することにしたと考えている。

(2) 第2回

ア 日 時 7月13日(水)

イ 場 所 図書室

ウ 参加者 校長 亀井直文、 教頭 中島仁司、
教諭 木下真砂子・奥知由起・久保田彰・和田真一・安本修子
養護教諭 堀川明美 講師 橋本真美

エ 内 容

(7) 活動内容

- a アドバイザーによる各学級の授業及び子どもの様子の参観
- b 職員の全体研修会での助言（授業及び子どもの様子からのアドバイス）

(4) 協議内容

- a 子どもの様子について
- b コミュニケーション能力をつけるための具体的な手だてについて

(学校側)

- * コミュニケーション能力にかかわる学年ごとの目標をつくる必要がある。
- * 「表現する」（話す）「理解する」（聞く）を軸に目標づくりをしてはどうか。
- * 低学年は「聞く」ことが課題、高学年は「表現の方法」が課題である。
- * コミュニケーションした結果、好感覚を得て、さらにコミュニケーションをとろうとするなど、コミュニケーションの必要性を感じさせることが大切である。

(例) 教壇と児童の机を離す。

児童間の机を離す。

言葉を使わずにコミュニケーションをとるワークをする。

人が話を聞いてくれないときのロールプレイをする。

狭いところで授業をする。

行動療法（「今日は、〇〇ができた。」ことでシールをあげる。）など

- * 人間は理解できる容量は限られているので、認知的な負荷を減らすとたくさん理解できるという体験を増やすことで、聞こうとする意欲につなげることができるのではないかと。

- * 学習意欲を育むためには、目標が大切である。「褒める」「褒美」など、外発的なところからスタートしてもよい。
- * 個々の子どもをよく見て、少しずつ達成できるような細分化された目標をたてる必要がある。

オ アドバイザーより

今回は、3限から5限までの授業および、昼休み、清掃時間などにおける児童の様子を、貴校が中心的な研究課題としてとらえている「コミュニケーション能力」という視点から参観した。

<コミュニケーション能力のとらえかた>

- コミュニケーション能力とは、一般的に、読むこと、書くこと、聞くこと、話すことといった言語の4技能および、態度などその技能を運用するのに必要な能力の総称であると考えられる。一方、貴校では、主にオーラルコミュニケーションについて問題があると考え、コミュニケーション能力の育成を研究課題としていると判断した。
- したがって、聞くこと、話すことを中心とした「理解と表現の能力」の育成に的を絞り、学年縦断的な目標を設定した上で、発達段階や学習内容などを考慮しながら、学年ごとに身につけさせたい「理解と表現の能力」の下位目標を設定し、あわせて、これらの下位目標をさらに細分化したチェックリストのようなものを用意する必要がある。加えて、授業の様子などから検討すれば、低学年では「理解の能力」を、高学年では「表現の能力」に重みを置いた目標の設定が必要であると考えらる。
- なお、学年の縦断的な目標および学年ごとの下位目標の設定、ならびにチェックリストの作成にあたっては、指導要領の構成が参考になる。指導要領においては、教科ごとに教科の目標が設定され、それを細分化した形でさらに学年ごとの目標が設定され、学習内容が提示されているからである。

<校内研究会での討議内容から>

- 「コミュニケーション能力の育成」という研究主題にまつわる話については先に述べたとおりである。
- 加えて言うなら、コミュニケーションとは基本的に、何らかの交渉や意思表示が必要であるという状況において起こるものであると考えられる。基本的に、話を聞かないという行動は、子どもが「話を聞く必要がない」と認知しているから起こると思われる。また、声が小さいという問題に対しては、小さい声でも十分にコミュニケーションが成立するためであると考えられる。したがって、話を聞かせるためには、その必要性を子どもが認知している必要がある。声が小さいということが問題であれば、机の配置を教室いっぱいにするなどして、大きな声でなければ話が伝わらないというような状況をつくりだすことが対応策として考えられる。
- また、研究会では、特に2年生の授業態度の改善のための方策が討議されたが、私からの提案は以下の通りである。
 - ① 前を向かせるには、前を向かなければならないという必然性をつくりだす。板書などを有効に活用する。
 - ② わがまを言う子どもに対しては、関わりすぎない。何らかの反応を求めているから子どもがわがまを言うのであって、反応がなければわがまを言うても無駄だと子どもが認知するようになるのではないか。
 - ③ 問題行動に対しては行動主義的に対応するのも一方策。たとえば「授業の受け方カード」のようなものを作り「立ち歩かずに先生の話を聞いた」「手悪戯をせずに授業に集中した」というような項目を設定し、評価の機会ごとにシールやスタンプなどを押すようにする。研究会では「～しなかった」という項目でのカード作成を提案させていただいたが、上記のように「～せずに～した」というような項目の方が望ましいと思う。なぜなら、問題行動をしないことその

ものが目標ではなく、問題行動をせずに授業に参加することが目標となるべきだからである。

- ④ 教室空間の柔軟な利用も一方策かと考える。教室が広くて立ち歩きが見られる（ロッカーに荷物を取りに行ったり、など）のであれば、パーティションなどで人数に応じた狭い空間をつくり出したり、特別教室が広すぎて手に負えないようであれば準備室などを活用したり、大きな声で話すことを求めたいのであれば机の配置を広くとる、スクール型の座席配置だけではなく、ラウンド型の座席配置にしたりするなど、児童数が少ない分、多様な工夫が可能である。
- ⑤ 基本的に、子どもは「知りたい、褒められたい」と思っているはずである。授業内容が分からずに問題行動を起こすのであれば、個別指導を中心とした授業展開にするほか、少しでもよい行動が見られれば、大げさでもかまわないので褒めちぎるということも必要かと思う。そのようにして、次第に強化していけばよいのではないか。
- ⑥ 特活、道徳などでは、適宜ロールプレイを行うというのもいいかと思う。有元秀文（監修）「イラスト版心のコミュニケーション 子どもとマスターする49の話の聞き方・伝え方」合同出版などが参考になるかと思う。
- すべての子どもに特効薬的に効果のある教育的介入の方法はない。ひとりにでも効果があればそれで十分と割り切りながら、手を変え品を変え、あるひとつの方法に凝り固まらないように柔軟な工夫をしていくことに尽きると思う。なお、その際には、コミュニケーション能力の研究で用いるチェックリストなどを活用し、少しの進歩でも認め合いながら、日々の教育実践を行いたいものである。
- まとめると、(1) 目標設定の工夫、(2) 授業方法の工夫、(3) 空間利用の工夫の3側面から、コミュニケーション能力を育むことを企図すればいいのではないかと考える。

(3) 第3回

ア 日 時 8月10日(水)
イ 場 所 職員室
ウ 参加者 校長 亀井直文、 教頭 中島仁司、
教諭 木下真砂子・奥知由起・久保田彰・和田真一・安本修子
養護教諭 堀川明美

エ 内 容

(ア) 活動内容

- 職員の全体研修会での助言

(イ) 協議内容

- 「聞く」「話す」に関わる目標について
アドバイザーからの資料をもとにした話
校内作成の目標の表についての検討
- * 到達目標は、卒業までに子どもにつける力をねらっていけばいい。また、子どもの実態によるので、普遍的なものでもなくてもいいのではないか。
- * 「メモをとりながら聞く」という項目を入れることも大事だが、そのためにはスキルが必要である。
- * 「聞く」「話す」の項目だけでなく「話し合う」という観点をどうしていくか考える必要がある。
- * 「聞く」の項目の中には、本人しかわからない内容もある。どのように見取っていくか考える必要がある。
- * それぞれの学年の力を次の学年で伸ばしていける目標が大事である。
- * すべての教育活動での目標と考えるが、どのような場面で、どのようにチェックしていくかを整理していく必要がある。

- * 記録化したものをどのように活用していくか考える必要がある。
- * 教師だけの評価ではなく、子ども自身も自己評価できるチェックリストを作る必要がある。

オ アドバイザーのコメント

<話し合いの概要>

今回は、聞くこと、話すことを中心とする『理解の能力』『表現の能力』の到達目標」の表を検討する話し合いに参加した。最初に、話題提供として、準備していったコミュニケーション能力の向上についての関連資料を15分程度説明させていただき、その後、到達目標について検討が進められた。特に、資料3にあった「各学年で育てたい具体的なスキル」の表の「伝え合う」「発信する」などの項目と見比べながら話し合いが進行した。

<全体的なコメント>

- コミュニケーション能力を捉えるための到達目標の表は、前回の研究会を受けて、教職員の話し合いを通して作成されたものであるが、これから研究を進めていく上での軸となるものである。これをたたき台として、さらに、内容を検討し、共通理解を図りながら、よりよい表へと改訂・改善していくことが望まれるだろう。
- 今回はあまり掘り下げられなかったが、『理解の能力』『表現の能力』の到達目標」の表をこれからどのように活用していくかが次の大きな課題になると思われる。話題提供した内容なども参考にして、到達目標をいかに達成していくかについて具体的な手だてやプロセスを考えることが求められる。

<『理解の能力』『表現の能力』の到達目標」の表について>

- 目標とめざす子どもの姿の対応関係を検討する。
達成目標を構造的に捉えて、理解の能力（聞く）と表現の能力（話す）に具体化する必要がある記述した目標とめざす子どもの姿の各項目がきちんと対応しているか、論理的な関係を検討しなければならない。
- 各項目の発達の・段階的な展開を考えて項目を再検討する。
例えば、3・4年、5・6年の「聞く」のチェックリストに、「わからないことや知りたいことを質問する」という同じ内容があるが、子どもの発達段階を考慮しつつ、発達の・段階的な展開を考えて各項目の記述を再考することが必要である。
- 語尾の表現を検討する。
「聞く」の項目の中には、語尾に「・・・質問する」「・・・自分の考えをつくる」というものがあるが、果たして、これらは「聞く」という項目に入るのか。例えば、「質問を考えながら聞く」「自分の考えと比べながら聞く」など「聞く」という表現に統一する方がいいように思われる。
- 資料3の「話し合い」にあたる内容を、この表のなかにどのように反映させていくのかを検討することが必要である。
- チェックリストをどのように設定するかを検討する必要がある。
 - ・ 達成目標（評価規準）とその実現状況をみる指標（評価基準）という概念で考えると、チェックリストは評価基準にあたると思われる。
 - ・ 現在考えてあるように、めざす子どもの姿の部分＝チェックリストとするのであれば、めざす子どもの姿（評価基準＝実現状況をみる指標）の各項目については、事実に・行動的な表記にしたり、抽象的な形容詞は使わないなど、子どもの活動ができるだけ客観的に評価できるように表現の仕方に気を付ける必要があるだろう。
 - ・ 他のアプローチとしては、この表は、めざす子どもの姿も含め達成目標（評価規準）のみを記述するものとし、チェックリストは別に設定するということが考えられる。全学年チェックリスト、高・中・低学年チェックリスト、学年チェックリスト、具体的な学習内容に応じたチェック

リストなど、いろいろな作り方があって思われる。

- ・ したがって、どのようなレベルでチェックリストを作るのが効果的であるのかを検討して研究を進める必要があるだろう。

< 『理解の能力』『表現の能力』の到達目標』の表の活用について >

- 表あるいはチェックリストの活用については、具体的な子どもの姿を思い浮かべながら、どのような学習場面で、どの評価規準を、いかなる評価資料・情報（観察、学習カード、面接、・・・）を用い、どのような方法で評価するのかを考えることが必要である。
- 話し合いの中でも、参考資料として、表の活用についてヒントになるような事例を紹介したが、一分間スピーチ、音読、カルテ、話し合い場面、発表場面・・・など、具体的な学習場面を想定してチェックリストを活用する方法を検討すると、具体的な研究の視点が出てくると思われる。

(4) 第4回

ア 日 時 11月4日（金）
イ 場 所 各教室室・図書室
ウ 参加者 校長 亀井直文、 教頭 中島仁司、
教諭 木下真砂子・奥知由起・久保田彰・和田真一・安本修子
養護教諭 堀川明美 講師 橋本真美

エ 内 容

(ア) 活動内容

- a 授業参観及び子どもの様子を観察
- b 研究授業
- c 研究協議

(イ) 協議内容

- a 研究授業の反省（「聞く」「話す」に関わって）
- b 「振り返りカード」改善についての検討
- c 「振り返りカード」の活用についての検討

(学校側)

- a 授業に関わって
 - 1時間での内容にしては多かった。
 - 書く作業をもっと多く持って話し合いを進めると深まるのではないかな。
 - 教師対子どもの授業が多いのでペアまたはグループ討議を増やすと意見を言う力がつけられるのではないかな。
 - 子どもの思考のためには教師の発問が大切である。
 - 教師の助言等により授業がスムーズに流れた。
 - 振り返りカードを使うことを授業の初めに伝えることで、子どもが意識して聞くことができた。
 - 表現の能力ををつけるために書くことを大切にしたい。
 - 「今日のねらい」を書くなど、黒板をうまく活用する方法を考える必要がある。
 - メモのとり方の学習も訓練する必要がある。
- b 振り返りカード改善について
 - 振り返りカードをつけることで、子どもが意識して聞いたり話したりするようになった。
 - 自分を振り返る機会になっている。
 - マンネリ化してきている。
 - 子どもの評価と教師の評価にズレを感じる時がある。

- 「ほぼ聞けた」「あまり聞けなかった」などの曖昧なところが子どもとのズレになってきているのではないかと。そのため、特に低学年では「できた」「できなかった」の2択にするなど、学年の実態に合わせて変えていってはどうか。
- 統一する必要はないが、カードがあることが大切である。
- 継続して実施すること、評価する項目をピックアップして実施することが大事ではないか。
- なぜその評価をしたのかを話し合える機会が大切である。
- c. どのように使い、指導に活用するのか
 - TTでついた人がチェックリストをつけるのも1つの方法。
 - チェックする項目だけではなく、本時の授業のように授業の感想を書く部分をつくると、次時につなげることができる。
 - 音読も大切である。(2学期から全校で取り組んでいる。)
 - クイズ形式・電話をかけさせる・放送など、話す機会をつくってはどうか。
 - 振り返りカードの項目の中に教科にあう具体的な内容を入れてもいいのではないかと。
 - 1年生3人では話し合いになりにくいので、TTの先生に入ってもらえるのも一つの方法。

「課題として」

- 継続した指導により、子どもの自己評価力・自己学習力などの変容を長期的に見ていくことが大切である。
- 地域との関わり等、活動の広がりも大切である。
- すべての子ができた項目は減らすなど、カードの改善を考える。

オ アドバイザーより

授業参観(3・4校時)

- 2年生算数のクラスは、7月の訪問時には私語、立ち歩きなどが見られたが、今回は一部児童に手いたずらなどが見られたものの、教師の説明に集中して授業を聞いているほか、「お友達の話聞いて」といった教示にもきちんと従うなど、めざましい改善が図られていた。
- 5・6年理科では、話を聞く態度などを児童同士が互いに注意し合いながら授業に参加していたほか、前回訪問時と比べて発言の音量も大きくなっていったと思う。
- 全体的に「振り返りカード」の内容を意識した授業展開がなされており、そのため、児童の話す態度、聞く態度の改善が図られていたと考えられる。
- しかし、少人数の授業であっても30人程度の学級で行われるものと同じ一斉授業の形態によって授業が進められている点が気になる。少人数であれば、それに見合った授業展開の形があり、また多くの工夫ができると思う。
- また、全体的に板書が少なめである。本時のねらいを板書するなど、授業の目標が児童に理解しやすいように配慮する必要がある。

研究授業(5校時3・4年理科)

- 授業は、テンポよく展開し、児童も意欲的に参加していました。授業の準備も十分になされており、板書もわかりやすいものでした。
- 1時間では、盛りだくさんすぎるという感じをもちました。もう少し時間をかけて、実験をする時間を保障すると、さらに子どもの理解が深まるように思います。
- 「振り返りカード」からのねらいを授業のはじめに伝えるのはよかったのですが、ねらいの意識化という点で課題が残りました。ねらいを書いた紙などを掲示するなどして意識化を図ると、さらに効果が上がると思われれます。
- 授業中の話し合いが、教師←→子どもという形が中心でした。ペアでの話し合い、グループでの話し合い、クラス全体での話し合いなど多様な形を組み合わせると、さらによくなると思われれます。
- 子どもたちが書くという機会がみられなかったように思います。子どもたちにじっくり考える時

間を保障するという意味でも、書くという機会を増やしていくことが大切であると思われます。

研究協議

- 「振り返りカード」を利用した実践の効果、改善および活用の方向について討議を行いました。
- 実践の効果
 - ✧ 人の話を聞こうとする児童が増えた。このことは理解の能力の育成につながっていると考えられ、振り返りカードを用いた効果ではないかと思われる。
 - ✧ しかし、表現の能力の育成は難しい。
 - ✧ 振り返りカードに書かれている目標に見合うような授業を行わなければならないと教師側も意識するようになった。
 - ✧ 学校全体で取り組んでいるため、どの先生も振り返りカードのことを意識しながら指導を行っている。そのため、児童にもその内容が大事であるということが伝わるようになった。
- 振り返りカードの問題点
 - ✧ 4択法による評定は児童にとって難しいのではないか。
 - ✧ 自己評価を繰り返し行わせることによってマンネリ化してしまう危険があるのではないか。
 - ✧ 2年生では自己評価のスピードが速くなった。きちんと内省していないのではないか。
 - ✧ 教師の評定と児童による自己評定との食い違いがある。
- 振り返りカードの改善
 - ✧ 4択法にするか、はいいいえの2択法にするかは、学年ごとに対応する。高学年では4択法にすることが、自分の行動をじっくり振り返ることにつながっている様子が見られるため。
 - ✧ 自己評価を行ったら教師からのフィードバックを行うことで、児童にこの自己評価が無駄ではないことを意識させる必要。
 - ✧ 継続して取り組み、子供自身が自分の変容を意識できるようなシートへの改善の必要。
 - ✧ 自己評価を行うことで子供の自己評価能力をも高めることにつなげることを目標とするのであれば、あえて教師評定と一致するような信頼性を求める必要はない。振り返らせるための道具として利用すればいいのではないか。
- 振り返りカードを活用した指導
 - ✧ TTによって評価を行う。
 - ✧ 表現の能力を身につけさせることに課題があるが、表現が可能となるような言葉を身につけさせる必要があり、国語において重点的に取り組めばよいのではないか。
 - ✧ 音読指導を充実させ、振り返りカードを使った評価を行いながら表現の能力を身につけさせる。
 - ✧ 振り返りカードの利用に見合った授業の工夫の必要。

まとめ

- 以上のように、本校で夏休みを中心に開発を行い、2学期から実践を始めた「振り返りカード」の利用は、児童の理解の能力の育成により影響を与えていると考えられる。しかし、表現の能力を身につけさせることや、振り返りカードの形式などに課題があることがわかった。これらの課題の解決は、全校で一様に行うのではなく、各学年の児童の発達段階なども考慮しながら工夫を行う必要がある。さらに、指導の改善を行う必要についても共通理解が図られた。
- 今後は、これらの課題を解決しながら、新たに生じた課題に対してさらに改善を加えるというような、改善継続型の実践研究が必要であると考えられる。
- 今回の研究協議の内容をもとに、各教員がそれぞれ課題を認識しつつ、この実践を改善継続することによって、本校の児童のコミュニケーション能力の育成がはかられることを期待したい。

(5) 第5回

ア 日時 2月8日(水)
イ 場所 体育館・図書室
ウ 参加者 校長 亀井直文、 教頭 中島仁司、
教諭 木下真砂子・奥知由起・久保田彰・和田真一・安本修子
養護教諭 堀川明美 講師 橋本真美

エ 内容

- a 全校集会参観
- b 今年度の成果と課題についての検討

全校集会の様子から

- 進行役をした6年生は声の小さい子はいるが、自分の意見を以前より言える子が多くなってきた。どの学年も異学年との話し合いの場を繰り返し持つことで、意見を言うことに慣れてきつつある。今後もこのような場を多く持つ方向で考える。
- 全体的に最後の方のことばがわかりにくいが多かった。みんなに聞こえる声で最後まではっきり言う指導が必要である。
- 前もって考えてあったことは言うが、人の意見に対する質問や意見を言うことができず、話がかみ合わないことがあった。低学年では言えたことで満足してしまう傾向もあるが、ふだんから少人数での子どもどうしの話し合いを大事にするなどして、「話し合う」力をつける必要がある。
- 教師に聞こえていなくても子どもどうしの中では理解できていることがあるようだ。これは子どもたちにとって大きな声で言う必要性がなかったからであり、コミュニケーションをとる力はいつてきていると考えられる。しかし、話すときの態度(声の大きさなど)や話す目的をはっきりさせて指導していく必要がある。

5 アドバイスを受けて一本年度の成果と課題一

- 子どもたちは、話をよく聞けるようになってきた。取り組みの成果である。少人数の学校では、一人ひとりが自分を表現できる時間と場がある。「聞く」「話す」を中心とした取り組みを今後も続けていくことで子どもたちはもっと伸びると考えられる。
- 話し合いができるようになるためには、聞く側・話す側、どちらの側も準備が必要である。司会の仕方・話し合いの仕方・質問の仕方・賛成や付け加えの言い方などの技能を深める練習が必要である。その繰り返しによって、事前の準備がなくても話し合いができるようになる。また、縦割り班活動での話し合いではまず6年生がリードする力をつける必要がある。
- 集会でみんなの前で発表する時ははっきりと言えていた。意見を発表する時は事前に練習するなど、事前の指導を大切にしながら声の大きさについても考えさせると良いだろう。
- 授業に入る前に子どもの意識がわかると話し合いに入りやすい。子どもの意識を事前につかんだり、技能の習熟度について考えたりするなどして前もっての準備をする必要がある。
- 振り返りカードを活用するについては、1～3年は「授業ごとに項目を決める」、4～5年は「意識して聞く」「定着するまで続ける」「ペアで評価し合う」、6年は「自分を冷静に判断して自己評価する」ということを大切にしながら取り組むとよいのではないかと。
- 振り返りカードの活用と評価の仕方とを一本化したあり方について今後考えていく必要がある。
- 今年度のように学校全体で一つのことを共通理解し、取り組んでいくことが大切である。

6 アドバイザーから一本年度の成果と課題一

(1) 本年度の成果

ア 本年度は、児童は小規模校ゆえの少人数での生活になれているため、コミュニケーション能力を高

めることが大切であると考えていることをうけて、「コミュニケーション能力の育成」を目標とした研究を行いました。

イ 「コミュニケーション能力を身につけた子ども像」を明確にし、学校全体としての目標及び、発達段階や各教科における学習内容等を考慮した、学年ごとの細分化した目標を設定し、それを実現するための手だてを具体的に検討すると同時に、特に、手だてについては、小規模校および複式学級ゆえの利点を活用したものを検討することを目標としました。その中で、聞くこと、話すことを中心とした「理解と表現の能力」の育成に的を絞り、学年縦断的な目標を設定したうえで、発達段階や学習内容などを考慮しながら、学年ごとに身につけさせたい「理解と表現の能力」の下位目標を設定すると同時に、これらの下位目標をさらに細分化した児童用自己評価チェックリスト（振り返りカード）と、教師評定用チェックリストを開発しました。

ウ この振り返りカードを用いて全学年、全教科において取り組みを行った結果、人の話を聞こうとする児童が増えたことが確認されました。また、振り返りカードに書かれている目標に見合うような授業を行わなければならないと教師側も意識するようになりました。特に、学校全体で取り組んだため、どの教員も振り返りカードのことを意識しながら指導を行うようになり、児童にも振り返りカードに書かれている内容が大事であるということが伝わるようになりました。

エ このように、本校で夏休みを中心に開発を行い、2学期から始めた振り返りカードを用いた実践は、児童のコミュニケーションの能力の育成により影響を与えていることが結論づけられました。

(2) 次年度以降の課題

ア 今回は全学年統一様式による振り返りカードを開発しましたが、学年によっては自己評価が難しいこともあるなど、形式や項目の記述方法に課題があることがわかりました。これらの課題の解決にむけて、各学年の児童の発達段階なども考慮しながら工夫を行う必要があります。

イ 特に今後は、課題を適時的に解決しながら、新たに生じた課題に対してさらに改善を加えるというような、改善継続型の実践研究が必要です。

ウ また、コミュニケーション能力の育成をどのようにカリキュラムに位置づけ、日々の学習指導に組み込むのが課題です。複式学級の利点が活かされるようにする必要があります。カリキュラム、指導方法、評価の一体化が来年度の課題と考えられます。

エ さらに、振り返りカードを手がかりとして学校全体の共通理解が図られたのは成果でした。これを契機として、教育課程の編成や日々の指導などもまた学校全体で共通理解を図りながら進めていく必要があるでしょう。

オ 最後に、多忙な中実践研究に取り組み、児童のコミュニケーション能力の育成に大きな効果をあげ、さらに指導方法の改善をも図ることができた花垣小学校の教員のみなさまのご努力に敬意を表します。

⑫ 名張市立つつじが丘小学校

所在地	名張市立つつじが丘北3-5
交通機関等	バス つつじが丘北1番町下車徒歩5分
電話番号	0595-68-3485
FAX番号	0595-68-3729
教職員数	42名
生徒数	640名

1 学校の概要

本校は、昭和56年（1981年）つつじが丘住宅団地の開発に伴う人口の増加によって現在地に新設された。児童数は最大1386人、学級数34を数えたが、近年児童数も漸減し現在は640名となっている。現在の校区はつつじが丘団地と新しく開発が進んでいる春日丘団地の2ヶ所である。地元名張市をはじめとする周辺地域と、奈良県との県境に近いという地理的条件から京阪神方面よりの転入も多い。

2 学校、地域、児童の現状

本校では過去、社会科・生活科を窓口にして研究を進めてきた。課題を設定し、調べ活動を通して事象をとらえ、そこから自分なりの考えを持つ学習活動に取り組んできた。その結果、見学や調べ活動を通して新しいことを知り、友だちと討論したり伝え合ったりすることができつつあった。しかし、学習全般の基礎となる力（読む・話す・聞く・書く）が不十分であったり、教師の指導がないと自主的に学習できなかったりなど受身的な学習姿勢の児童も多いという課題もある。

3 アドバイスを希望する課題

児童にとって学校が楽しいかどうかは、授業が楽しいかどうかで決まってくる。そのカギをにぎっているのは教師の資質と指導力である。しかし、教室に入ってみれば一方的に教え込む授業になりがちで児童を自主的に学習させたり、つないでいたりという意識も弱いという実態があった。

そこで、授業を直接みていただき、授業を核にして児童の学びをいかに展開していくか。一人ひとりの児童をいかにつないでいくかについて指導を受けたいと思う。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時 平成17年8月24日（水）13時00分～16時30分

イ 場所 名張市立つつじが丘小学校

ウ 参加者 杉江修治（中京大学教授）
本校職員（名張市立つつじが丘小学校職員）

エ 内容 杉江先生の講演と研究協議

※ 授業づくりのキーワード

※ 質疑応答

【協議内容】

- ◇ 杉江先生の講演
 - ・ 学びの授業づくり
 - ・ 授業計画の前に
 - ・ 参加の授業
 - ・ 協同の授業
 - ・ 成就感をもたせる工夫

- ・ 少人数授業、習熟度別指導の考え方
- 学びの授業づくり
 - ・ 子どもがかわるために授業はある。子どもの主体的学習をつくるのが協同学習である。
- 授業計画の前に
 - ・ 児童観 教師が授業を工夫すれば、すべての子どもは伸びる。
 - ・ 学力観 社会を維持発展させる子どもを育てたい。
 - ・ 指導観 受身ではなく主体的な学習へ。すべての子どもが活躍する学習に。
- 授業づくりのキーワード

<参加>

- ・ 課題を明確にする。
- ・ 見通し（手順）を示す。
- ・ 単元計画を子どもに伝える。
- ・ 子ども同士の話し合い。

<協同>

- ・ 学びあい、高めあい、励まし合う。
- ・ 学習者全員が伸びることが大切である。

<成就>

- ・ 授業終了の5分間、単元の終わりに個々の児童の成長がわかる時間を確認し、成就感を持たせる。

Δ 質疑

- ・ 学ぶべき内容について
- ・ グループ学習での時間の取り方について
- ・ 集中して学習に取り組みにくい学級での協同学習について
- ・ 学び方のスキルについて
- ・ 確認のためのテストの意欲への影響について

オ アドバイザーより

今回は第1回目ということで、授業づくりの基本について話をしました。ただ、先生方のこれまでの経験相対的な改善ではなく、経験を抜け出した新しい授業パラダイムをつかんでもらうべく「学び」の授業についての解説をしました。児童観、学力観、指導観の点検からはじまり、子どもの主体的学習活動を保障するための3つの観点、参加、協同、成就の授業における実現の仕方を含め、内容をしました。

先生方との交流の端々に、まだ旧来の指導観、すなわちいかに「教えるか」を工夫することが授業研究であるという構えを感じましたが、今日の話の中にあつた参加、協同、成就の具体的な工夫を、次回の研究授業にどれほど取り入れてくれるだろうかという期待の持てる受講態度も多く先生方の中に見ることができました。次回の研修会に向けて、今の自分たちのやり方のでこがいけないのかというような後ろ向きな取り組みでなく、たとえ長いキャリアをお持ちでも、挑戦の心を忘れないで新しい試みをしていただきたいと思います。なるほどと思われたことも結構あるのではないかと思います。

今日の話の内容は基本的には実践の裏打ちを持つものです。納得したことがらはずいぶん実行に移してみてください。また、個別に取り組まれるのではなく、教師集団としての成果を追究することが肝要だと思います。今日は若い先生方の発言がありませんでしたが、年齢を超えて、遠慮のない研修が行われることを期待します。追求すべき共通テーマの模索も必要かもしれません。

(2) 第2回

- ア 日 時 平成17年10月13日(木) 10時00分～17時00分
イ 場 所 名張市立つつじが丘小学校
ウ 参加者 杉江修治(中京大学教授)
本校職員
エ 内 容 公開授業、杉江先生の指導

※ 公開授業(1年1組、1年2組、1年3組、2年1組、2年3組、3年2組、3年3組)についての杉江先生からの感想と指導をうけた。

※ 公開授業全体を通しての指導

※ 質疑応答

【協議内容】

◇ 杉江先生より公開授業全体を通しての指導を受ける。

授業を展開するとき

○ 子どもを横につなぐ

先生と子どもとのつながりが強くて、先生をすぐに求めることが多い。自分のことを認めてほしいがっている。もっと、子どもを横につなぐ取り組みを日常的にしてほしい。

○ 子どもが主体的に学ぶ授業に子どもにどんな力をつけるかが大切である。受身的ではなく、主体的に学ぶ授業にするために考える力、生きる力をつける授業を設定することが重要である。

○ グループ学習こそよりよい授業につながる

一人ひとりの学びをみたととき、一斉授業とグループ学習とではどちらがよいのか。グループ学習で傍観者がでて一斉授業よりは学習効果が高い。「学級として、グループとしてがんばったね」と時には評価することも大切である。

○ 子どもがわかって次に進めることが大切である。

隣同士で「わかったか」1分間話し合ってみる方法もある。学びはセレモニーではなく、自分かわるために学習していることをつかませたい。

オ アドバイザーより

3限、4限、5限の3時限にわたって、1、2、3年生の授業7クラス分を拝見。その後2時間にわたり全教員との研修会を持つ。拝見した授業数が多かったこともあり、杉江のコメントに時間をとり、実践者との意見交換を十分に行う時間が取れなかった点は残念であった。

実践では、これまでの枠を破ろうという試みを随所に見ることができ、授業改善に前向きの構えをうかがうことができた。また同時に、杉江が、改善が必要と思う点もいくつか浮き彫りになり、その意味でも有益な機会であった。

授業に沿った細かい改善点の指摘も行ったが、課題は大きく2つあると考え、その旨お伝えした。

1つは個々の教材から授業づくりを発想する前に、まず、その教材を通してめざす学力を十分に考え、その上で授業設計をすべきだということである。幅広い学力形成を常に念頭において欲しい。いまひとつは、支え合う学習集団からもたらされる意欲付けを高めるために、子どもたちの横のつながりの形成に力を入れるべきだということである。2点共に教える授業から学びの援助へという授業の図式の転換が要求されることである。子どもの学びの実際の姿の変化に注目しながら、ぜひ継続的に取り組んでいただけたらと思う。

(3) 第3回

ア 日時 平成17年12月1日(木) 10時00分～17時00分

イ 場所 名張市立つつじが丘小学校

ウ 参加者 杉江修治(中京大学教授)
本校職員

エ 内容 公開授業と杉江先生の指導

※ 公開授業(5年1組、5年3組、6年1組、6年2組、6年3組、6年4組) 参観いただく

※ 研修会 それぞれの授業について指導を受ける

【協議内容】

◇ 杉江先生より(公開授業についての指導)

3限、4限、5限の3時間にわたって5年生と6年生の授業を見ていただいた。教科は、算数、国語、理科、社会、体育の5教科と多岐にわたった。

それぞれの授業ごとに指導いただいたが、今回の授業は、どの授業も児童の主体的な学習にしようとの先生方の工夫と努力が見られるとの初発の感想が出された。

指導いただいた主な内容は下記の通りであった。

- ・ 学ぶ手順や本時の課題を児童に明確に示す授業が多くあった。
- ・ 個人学習の時、子どもたちは主体的に学ぶスタイルができていた。個人の課題を明示するとき、「昨年の児童は、4個ぐらい考えていた。」等ゴールのイメージを示すと、子どもはより活発に活動する。
- ・ 個にまかせた時は、できるかぎりまかせることが大切である。
- ・ 班学習の時、グループとしての課題を明らかにすることが大事である。子どもの活動が活発でない時、「一人ひとりの考えを聞いて、これはすごいと思うことを見つけよう。」などと投げかける方法もある。
- ・ 班学習の時、机をしっかりと合わせる。子ども同士の距離を縮める工夫が大切である。
- ・ 自分たちで予想→仮説→検証をしていく授業は、大切である。グループごとに思考の過程をメモすることもよかった。理由がわかって、実験を成功させたグループがでたら、すべての班ができるまで待つのではなく、できたグループに説明させるとよい。
- ・ 班学習の時、グループで何をするといいのか、なぜグループなのかを明確にすることが大切である。
- ・ 班学習で、班で話し合ったことを1枚の紙にまとめる時、記入している児童がどのように書いているのかをグループ全員が体を乗り出して見るなど、一体としていることが大切である。
- ・ 全体の中で発表するとき、発表者だけが活動しているのではなく、聞く児童にも役割があることを伝えたい。

オ アドバイザーより

3、4、5限の3時間にわたって5、6年生の授業を合計6コマ参観した。教科は算数、理科、国語、社会、体育など、多様であった。その後2時間にわたって全教師との研究会を持つ。今回の実践では、どの授業でも児童の主体的な学びを可能にするための工夫が積極的に取り入れられてきていた。教師主導の印象が薄くなり、児童がじっくり個別に取り組む姿、小集団形態での学び合う姿を多く見ることができた。一斉形態の学習でも、仲間に伝えようという態度、仲間の意見をきちんと聞こうとする態度が強くなってきた。教師自らの授業スタイルを大胆に変えるという試みは現実には難しいはずであるが、5、6年生の教師集団が一致してその方向の取り組みを行ったことは評価できる。

学習課題の明示、学び合い活動そのものの振り返りの導入などではまだ工夫の余地があり、具体的に助言させていただいた。また、前回の課題2つ、めざす学力と指導方法とのかかわりを追求することと、子どもを横につなぐ学級集団づくりについて、今後も一貫して留意されるよう申し上げた。

(4) 第4回

ア 日 時 平成18年1月26日(木) 10時00分～17時00分

イ 場 所 名張市立つつじが丘小学校

ウ 参加者 杉江修治(中京大学教授)

本校職員

エ 内 容 公開授業と杉江先生よりの指導

【協議内容】

<1年4組の授業>

- ・ 最初に学習の手順についての説明がなされたが、子どもは何をするのかわかりにくい点があった。時間をかけていねいに行うとよい。
- ・ 2人組で話し合う時、「感想をいみましょう」だけでなく、「作業をふりかえって自分の感想をいみましょう。まず、右側の人から。次に左側の人がいみましょう」と手順を言うと子どもの意欲も参加度も高くなる。
- ・ 2人組で話し合う時、子ども同士が互いの努力に気づき、学び合う姿があった。
- ・ 全体での話し合いの時、1年生としてはスムーズに集まることができた。まだ、書けていない子への配慮もされていた。
- ・ 聴く側の子どもも課題をもって聴く姿勢が大切である。
- ・ 自尊感情を育てるといふねらいを達成するため、親からの評価をもらうしかけを考えているのはよかった。

<2年2組の授業>

- ・ 子どもたちは総じて活発に測る活動をしていた。班で課題を追求するとき、多くの班はしっかりやっていた。
- ・ 「いろいろな方法で正しく長さを測ろう」という課題を設定し、どの班がより正確に測れるかという課題設定もある。
- ・ なぜ一人で考える時間をもつのか。それは班の話し合いでどれだけ貢献できるかにかかっているからである。
- ・ いろいろな測り方について、「30cmさしを並べる方法もあるが、それ以外の方法を考えよう」と提示すると、さまざまな考えがでてくる。
- ・ 班からはずれる子や私語をする子がいた。班の中でチェック係・記録係・発表係など役割を分担するとよい。また、全員参加のしかけをすると私語も少なくなる。

<3年1組の授業>

- ・ 子どもの学びをうながす授業ですばらしかった。先生の出番が少なく子ども主体で学習参加度の高いものであった。
- ・ 班の取り組みであることをもう少しいねいに示すとさらによい。
- ・ 班での役割分担がよくできていて、互いに高め合う話し合いができていた。班での発表も日常化してしっかり定着していた。聴く側もしっかり聴いていた。
- ・ 1つの授業モデルであると思った。先生の出番は最初と最後であった。子どもも45分よく活動していた。

<6年4組の授業>

- ・ 授業の様子をビデオでみたが、導入段階で課題と手順をしっかり示していた。子どもは主体的に

動きだせると思う。

- ・ 仮説実験授業は学びあい、高め合う授業だと思う。

オ アドバイザーより

1年生、生活科、2年生、算数科、3年生、国語科の3つの授業を参観した。また空き時間を利用してビデオによる6年生理科の授業も拝見した。

全体的な印象は、つつじが丘小学校の実践が「学びの授業」に向けて大きく変化したということである。たとえば、理科の授業では、子どもの積極的な学びへの構え作りに適切な導入の工夫がなされている。他の学校にもモデルとして提供したいと思うほどの水準の工夫であった。授業案も子どもの学びの動きを思い浮かべることのできる記述になっていた。1年生の授業は、主体的な学び作りへの挑戦が随所に見られた。子どもの発達水準にまだ囚われているために、子どもへの要求が低い観はあるが、授業づくりの方向については高く評価できる内容であった。2年生では、子どもが豊かに横につながって協力し合って学ぶ姿を見ることができた。授業スタイルの大きな、望ましい変化が認められた実践である。3年生は、子ども主体の学びを実現する授業のモデルに近い、水準の高い授業であった。子どもの主体的学びを十分に教師の仕掛けの下で実現させ、最後には学級全体が学び合い高め合う、学級全体の協同学習にまで持っていった。子どもの学習態度が積極的になっており、先進校といわれる学校の実践に肩を並べるといっても良い授業であった。

(5) 第5回

ア 日 時 平成18年3月2日(木) 10時00分～17時00分

イ 場 所 名張市立つつじが丘小学校

ウ 参加者 杉江修治(中京大学教授)

本校職員

エ 内 容 授業公開と杉江先生よりの指導

※ 公開授業(4年1組、4年2組、4年3組、5年2組)

【協議内容】

◇ 杉江先生より(公開授業についての指導)

3限、4限、5限の3時間にわたって4年生と5年生の授業をみていただいた。それぞれの授業ごとに指導いただいた。

<4年2組>

- ・ 導入で児童の学びを高める工夫がなされていた。
- ・ 3年生の教室で発表するという明確なゴールがある。ねうちや手順を児童に知らせると学びの構えはさらに高まる。
- ・ 導入で「わかりやすい文」についてのめあてを明確にしたが、推敲するまでの流れも伝えるとよかった。
- ・ 4年生としては、書くという作業に主体的に取り組んでいた。
- ・ いきなり全体で意見を聞かず、事前に個人思考すると学びに対する児童の意見が広がる。
- ・ 推敲の前に児童のチェック観点をていねいにおさえるとよい。そうでないと単なるセレモニーにおわってしまう。
- ・ 文を読んでよいところを見つける活動は、児童にとって大きな力になっていく。また、コメントをどんどん書く中で、モデルも生まれてくる。
- ・ 児童が活動しだしてからの先生のコメントはいけない。いったん活動を止めて話すことが大切である。

- ・ 児童は集中して活動していた。原稿の書き方、書く姿勢など基本的なことを押さえておく事が大事である。
- ・ 修正するアドバイスのない児童は、ない児童ばかり集めて話し合わせる方法もある。このように臨時的に班を編成する方法もある。
- ・ 班編成は2週間ごとにしてもよい。よい人間関係を学級全体に広げていくことになる。
- ・ できた作文を聞く側にも課題を与えるとよい。さらに学ぶ意欲が高まる。
- ・ 5年生の作文をストックするなどして、モデルをしめすことも大切にしたい。

< 5年2組 >

- ・ 予想、実験、わかったことを明確にしていくなど科学的方法の同時学習を意図した授業であった。予想をたてアイデアを膨らませた後、どれが正しいかを絞り込むことが大切である。
- ・ 各班での実験は、後で学級全体で交流するので、きちんとする事を最初に確認しておく。

< 4年1組 >

- ・ 手順の確認のために、先生をよぶ児童が多くいた。分からない時は、周りの知っている児童に聞かせるとよい。
- ・ 班で実験する時、温度計を見る子・記録する子・司会する子など係りを決め、班の活動に貢献させることが大切である。
- ・ 話し合いのじょうずな班を観察させることもあってよい。

< 4年3組 >

- ・ 少人数授業は、児童の学習参加度が高い授業である。
- ・ 分からない時は「わからない」と児童がしっかり言える事が大事である。分かる児童がわからない児童に説明していくことが大切である。教師主導では、少人数授業はできない。
- ・ 個人で思考する時、班で話し合う時、何のためにするのかを明確にしたい。
- ・ 児童の意見発表の時、同じ意見が多くあった。違う意見も出し合って学級全体でねりあげていくような展開が大切である。
- ・ 個の学びは高いと思ったが、17人の児童全員がわかることを目標にしてほしい。隣同士で話し合うなどして、人に説明できるようになってはじめてわかったことになる。

オ アドバイザーより

4年生3クラス（国語、理科、算数少人数授業）、5年生1クラスの実践を参観した。それぞれ、児童にとっての学びの見通しを事前に与えることによって学びへの積極的な構えを作ること、子ども同士の相互作用を活用して集団過程で得られる意欲付けの機能を高めようと試みること、学習の最後に振り返りの機会を設け、子どもの自己評価を通して学びの意義と成果を確認させる手続きへの配慮など、様々に有効性のある工夫を見ることができた。後の研究協議では、一定の水準に高まってきている実践であることを前提に、改善点を各所指摘させていただいた。

新年度に向けて、今の方向性を維持していただきたいと思う。同時に、子どもの育ちの姿、すなわちどのような力をつけるべきかについて、さらによく議論し、それを実現することを共通の基盤として、個々の教師の個性を生かしながら、新たな実践の改善に取り組んでいただけたらと思う。学力を軸に実践を考えることで、教師相互を一貫した筋で結ぶことができ、また、実践をシステムとして改善していくことができると思うのである。

なお、授業改善に教師集団としていかに取り組んでいくか、その体制も大切である。学年でしっかりとまとめ、指導案の共同開発をすると同時に、その考え方については全体で確認する場を設けるなどの機会を、これまで以上に実質的に機能するよう設定されていかれると良いと思う。

5 アドバイスを受けて—成果と課題—

(1) 課題

授業を核にして児童の学びをいかに展開するかについて、授業をみていただいて指導を受けた。この1年間教職員のにぎやかな声が増えている。これは児童がよい方向に変容し、児童と児童とがつながってきたためである。

今後も教職員一人ひとりが教え込みの授業を変えていこうとする意識変革の姿勢を大切にしていきたい。毎日の授業、1時間1時間の授業を研究授業と考え、学び合う授業を通して子ども同士をつないでいきたい。そのためにも、子どもの育ちの姿、すなわちどんな力をつけていかなければならないかをさらに議論し実践していきたい。

6 アドバイザーから —成果と課題—

児童にとっての学びの見通しを事前に与えることによって学びへの積極的な構えを作ること、子ども同士の相互作用を活用して集団過程で得られる意欲付けの機能を高めようと試みること、学習の最後に振り返りの機会を設け、子どもの自己評価を通して学びの意義と成果を確認させる手続きへの配慮など、様々な有効性のある工夫を見ることができた

新年度に向けて、今の方向性を維持していただきたいと思う。同時に、子どもの育ちの姿、すなわちどのような力をつけるべきかについて、さらによく議論し、それを実現することを共通の基盤として、個々の教師の個性を生かしながら、新たな実践の改善に取り組んでいただけたらと思う。

授業改善に教師集団としていかに取り組んでいくか、その体制も大切である。学年でしっかりとまとまり、指導案の共同開発をすると同時に、その考え方については全体で確認する場を設けるなどの機会をもつとよい。

学校経営サポート事業 報告書

発行：平成18年3月

発行者：三重県教育委員会事務局研修分野

連絡先：研修企画室

〒514-0007 三重県津市大谷町12番地

Tel 059(226)3526

Fax 059(226)3706